昭和60年8月15日号（毎月2回1日、15日発行）第28巻・第16号　通巻637号　昭和54年6月2日第三種郵便物認可

今日のソ連邦

1985
16
8.15.



ユニバーシアード神戸大会に
参加するソ連選手団

第16号　1985年8月15日発行

本誌の記事と写真はノーボスチ通信の提供によるものです。

今日のソ連邦

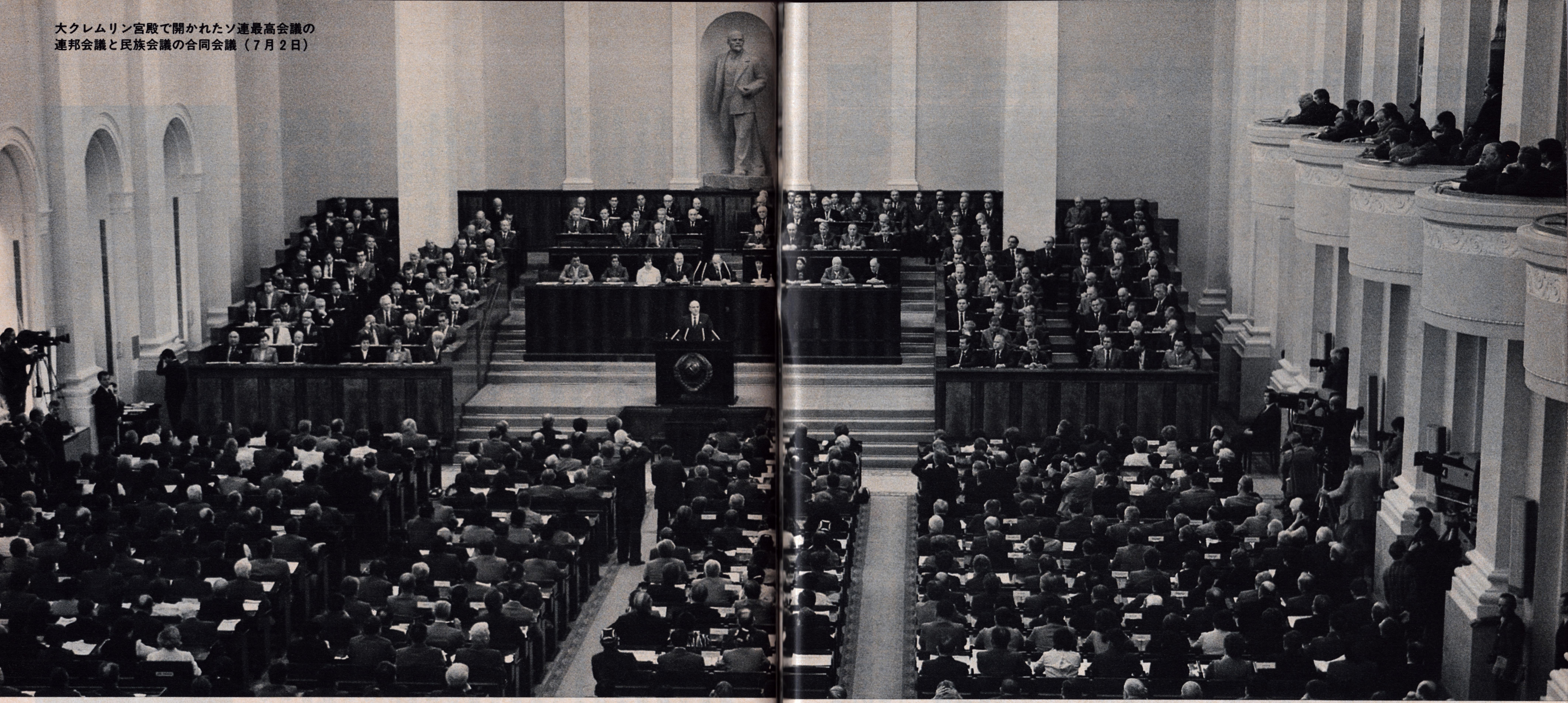


★数字は関連記事のページ

編集　在日ソ連大使館広報部　電話03(447)3536(代表)
〒141　東京都品川区東五反田3―9―13
振替口座　東京9―122358（加入者名＝ソ連大使館広報部）

発行所　(株)新時代社　電話03(293)4881
〒101　東京都千代田区神田神保町1―44
振替口座　東京0―13581（加入者名＝新時代社）

本誌の定期購読をご希望の方は、1部半年1800円、1年3000円、2年5000円の誌代（送料込み）を添えて、上記のいずれかにお申し込み下さい。多部数の場合の誌代は、お問い合わせを。



大クレムリン宮殿で開かれたソ連最高会議の
連邦会議と民族会議の合同会議（7月2日）

第11次ソ連最高会議第3会期

一九八五年7月2、3日の両日、第11次ソ連最高会議第3会期が開かれた。

連邦会議と民族会議の両院の第1回合同会議でミハイル・ゴルバチョフ・ソ連共産党中央委員会書記長が演説し、党は今後とも、最高会議の活動を活発にし、ソビエトの役割を引き上げる路線をとると強調した。M・ゴルバチョフの提案により最高会議はアンドレイ・グロムイコ・ソ連共産党中央委政治局員をソ連最高会議幹部会議長に選出した。

ミハイル・ゴルバチョフはソ連最高会議幹部会員に選出され、ウラジーミル・オルロフ（ロシア連邦）とヤン・ワグリス（ラトビア）がソ連最高会議幹部会副議長になった。

ニコライ・チーホノフ・ソ連閣僚会議議長の提案により、ソ連最高会議はエドゥアルド・シェワルドナゼ・ソ連共産党中央委政治局員をソ連外相に任命した。

ジヤ・ヌリエフ・ソ連閣僚会議副議長は「自然保護と天然資源の合理的利用に関する法律の要求の順守」について報告した。

採択された決定には、人類が当面している自然保全の諸問題は、緊密な国際協力を要求していると指摘されている。わが地球上の自然と生命そのものは大きな危険にさらされているが、これは帝国主義勢力のせいで勢いを増している軍拡競争、宇宙への軍拡競争の拡大、熱核戦争勃発の脅威によるものである。決定に述べられているように、ソ連は環境の保全と健全化を、内外政策の最重点項目と見ている。

ソ連最高会議は、自然保護と天然資源の合理的利用、人間を取り巻く環境の改善とこの分野の法律の無条件の順守に関する追加の経済的、組織的、法的、その他の措置の採択を必要と認めた。

ソ連検事総長A・M・レクンコフ代議員は、法秩序の強化、市民の権利と合法的利益の保護に関するソビエト法の諸要求の実行を監視するソ連検事局の活動について報告した。

ソ連最高会議は審議を総括して決定を採択したが、この決定には、ソ連では経済効率の向上とソビエト国民の福祉の向上、社会主義的民主主義の改善、市民の権利の保護の強化に必要な条件の一つとして、社会主義的法秩序をさらに強化する方針が一貫してとられている、と指摘されている。さらに決定は、検事局は活動を改善したとはいえ、法の実行を監視する検事局の活動は、社会主義法秩序を強化する諸要求にまで完全に合致していないし、経済活動における法の実行の監視も不十分である、と述べている。市民の提案、申請、訴願の審査手続きに関する法の要求を実行する国家、社会諸機関の活動を監視する検事局の活動も改善する必要がある。

ソ連最高会議は、法秩序のあらゆる違反を摘発して、タイムリーに除去し、また社会主義的生活様式と無縁の諸現象を撲滅するために、断固たる措置をとるよう、ソ連検事局と他の法を守る諸機関に義務づけた。

代議員は最高会議の前回の会期から今回の会期までの期間に採択されたソ連最高会議幹部会令を承認した。

ソ連最高会議両院合同会議でのM・S・ゴルバチョフの演説

（一九八五年７月２日）

7月2日、ソ連最高会議は連邦会議、民族会議の合同会議を開いた。第一議題のソ連最高会議幹部会議長の選出について、ソ連共産党中央委員会書記長M・S・ゴルバチョフ代議員は次のような演説を行った。

代議員の皆さん！

われわれはこれからソ連最高会議幹部会議長を選出しなければならない。

昨日開かれたソ連共産党中央委総会はこの問題を審議した。

ご承知の通り、一九七七年以降ソ連共産党中央委書記長がソ連最高会議幹部会議長のポストを兼任してきた。当時の条件のもとでは、党と国家の最高のポストを同一人物が兼任するやり方は妥当なものだったと言わねばならない。この期間にソ連最高会議の立法その他の活動が活発化し、地方の各級ソビエトの活動が改善され、行政機関に対する監督が強化された。

それとともに中央委員会は、いまわれわれが直面している新しい課題の解決が、党と国家の活動の内容をも、形態と方法をも改め、中央と地方での幹部の配置を改めることを要求している点を考慮してきた。

わが国はいま重大な時期にさしかかっている。われわれは近い将来と遠い将来の戦略路線を定めようとしており、ソ連共産党第27回大会で採択されるべき党綱領新稿の草案を作成中である。われわれは多くの重要課題に直面している。それがどういうものかは、皆さんがご承知の通りだ。それは経済の集約的発展の軌道への移行であり、生産の構造的再編成の実施であり、効率の高い管理形態や労働の組織と刺激の導入であり、ソ連人の福祉の一層の向上であり、国防能力の強化である。

われわれの今後の見通しがよりよく見えるようになっている現在、前面に押し出されているのは組織活動であり、ソビエト政治システムのすべての環の活動を活発化し、提起された課題の解決に大衆を動員することである。これらすべては社会における党の指導的役割の一層の強化を前提とし、ソ連共産党中央委とその政治局の活動の集約度を高めることを要求している。

こういった具体的な条件のもとで現段階の課題を考慮して、ソ連共産党中央委総会は、中央委書記長が党の中央諸機関の活動を組織し、所期の路線の順調な実現のためにすべての党・国家・社会組織の努力を統合する仕事に最大限に集中することが妥当であると認めた。

これに関連して、ソ連共産党中央委、ソ連最高会議幹部会、最高会議の党グループは、両院長老会議の支持をえて、アンドレイ・アンドレーエビチ・グロムイコ同志をソ連最高会議幹部会議長に選出するという提案を行い、諸君の審議を求めることを私に委託した。

アンドレイ・アンドレーエビチの名は、わが国でも、諸外国でも広く知られている。著名な政治家、最古参党員の一人として彼はわが国の内外政策の立案と実施に多大の貢献を加えている。彼の深い知識と多面的な経験は、われわれが策定する方針の実施にあたっての原則性、一貫性と組み合わされている。党と国民はソビエト国家の対外政策路線の実現での彼の功績を高く評価している。アンドレイ・アンドレーエビチ・グロムイコがソ連最高会議幹部会の活動の指導に関連する仕事をりっぱに遂行するものと考えるあらゆる根拠があると思う。

ソ連共産党中央委7月総会が示したように、党は今後とも最高会議の活動を活発化し、各級ソビエトの役割を高め、各州、各市町村の現状に対するその責任を強めることをめざす方針をとっていく。これらのソビエトは国家の決定を採択し、その遂行を組織し、これらの決定の実施状況を監督するという機能を有機的に統合しなければならない。

われわれが何度となく強調しているところだが、すべての段階のソビエトは、それが有する権限をもっとずっと完全に首尾一貫して行使すべきである。各級ソビエトは社会生活のすべての領域を視野に入れていなければならない。いま特に注意を向けるべきことは、勤労者の多種多様な必要や要求の充足である。食糧計画の遂行のために、現地の可能性や余力の動員によって各共和国・地方・州の住民への食料品供給を改善するという課題の解決のために、各級ソビエトはさらに大きな努力を傾けなければならない。所管官庁いかんにかかわらずすべての工業企業での消費物資の生産の組織に、各級ソビエトが全力をあげて取り組むことが重要だ。中央と地方のソビエトは社会問題の解決、ソ連人の文化的要求の充足、勤労者の教育に、さらに大きな努力を払う必要がある。

われわれは、国の生活の重要問題の検討、行政機関の監督のためのソ連最高会議に憲法によって付与されている権限と幅広い実際上の可能性を、もっとよく利用しなければならない。立法の改善の分野で最高会議は多くの課題を解決しなければならない。確固たる適法性は、社会主義的民主主義、社会的公正の原則の厳守の切り離せない一部分である。ソ連人の政治的積極性は今日、過去のどの時期にもまして、われわれの社会生活の特徴となっている。ソ連の人々は政治、経済や社会生活のその他の領域の諸問題について多くの提案を行い、あらゆる欠陥に敏感に反応している。これこそ真の民主主義のあらわれであり、われわれが人民の社会主義的自治と呼んでいるもののあらわれである。

というわけで、各級ソビエトの活動の改善、適法性の強化の分野でのわれわれの仕事は、まだまだ山積している。ここでは最高会議幹部会とその議長の役割もまた、重みのあるもの、活発なものでなければならない。

以上のようなあらゆる点を考慮した上で、次の決定案を提出して代議員の皆さんの審議をもとめるしだいである。

「ソビエト社会主義共和国連邦最高会議は、アンドレイ・アンドレーエビチ・グロムイコ代議員をソ連最高会議幹部会議長に選出することを決定する」

同時にグロムイコ同志をソ連閣僚会議第一副議長およびソ連外相の職務から解任する決定の採択が提案されている。

（最高会議はこのあと全会一致でこの決定案を承認し、A・A・グロムイコをソ連閣僚会議第一副議長とソ連外相の職務から解任する決定を採択した）

グロムイコ・ソ連最高会議幹部会議長の略歴



アンドレイ・アンドレーエビチ・グロムイコは1909年、現在のベロルシア共和国ゴメリ州ベトカ地区のスタールイエ・グロムイキ村の貧農の家に生まれた。ロシア人。1932年に経済大学を卒業。その後全ソ農業経済学研究所の大学院を終えた。1936—39年ソ連科学アカデミー経済学研究所の先任研究員として勤務し、同研究所の学術書記を努めた。経済学博士。学術論文がある。

1939年から外交活動に従事。駐米ソ連大使館参事官となり、1943—46年には駐米ソ連特命全権大使と在キューバ共和国ソ連公使を兼任。その後国連安保理事会ソ連常任代表兼外務次官、駐英ソ連特命全権大使、ソ連第１外務次官を歴任した。

1957年２月からソ連外相、1983年からソ連閣僚会議第一副議長兼ソ連外相。

1931年からソ連共産党員。第19回ソ連共産党大会で中央委員候補に選出、第20回、第22回—第26回党大会で党中央委員に選出。1973年４月から党中央委政治局員。

第２次および第５次以降のソ連最高会議の代議員。ロシア連邦共和国最高会議代議員。

祖国に対する功績により、社会主義労働英雄の称号が２回与えられた。また多くの勲章と記章を受章している。

シェワルドナゼ・ソ連外相の略歴



エドゥアルド・アンブローシエビチ・シェワルドナゼは1928年生まれ。グルジア人。1948年からソ連共産党員。グルジア共産党中央委員会付属党学校およびクタイシ国立教育大学卒。

コムソモール機関で労働活動を始め、1946年から1952年までコムソモールの指導員、地区委員会部長、グルジア青年共産同盟中央委員会指導員、コムソモール・クタイシ州委員会書記、第二書記。

1953年にグルジア共産党クタイシ市委員会の指導員として承認され、その後再びコムソモール活動に戻り、市委員会第一書記、第二書記を経て、1957年からグルジアのコムソモール中央委第一書記となる。

1961年からグルジア共産党ムツヘタ地区委員会第一書記に、ついでトビリシ市ペルボマイスキー地区委員会第一書記に選出された。1964年にグルジア共和国第一内務次官に、さらに1965年にグルジア共和国内相に任命された。

1972年にグルジア共産党トビリシ市委員会第一書記に選出され、1972年からグルジア共産党中央委第一書記。

1976年からソ連共産党中央委員、1978年からソ連共産党中央委政治局員候補、1985年7月からソ連共産党中央委政治局員。ソ連最高会議（第9次―第11次）とグルジア共和国最高会議の代議員。社会主義労働英雄。

経済成長と自然――調和は可能か？

本誌経済評論員　アレクサンドル・グーベル

環境保護に対する不安は人々の意識へますます深く浸透している。そこで極めて断言的な見解がしばしば述べられているが、それも根拠があってのことである。専門家の計算によれば、環境汚染に対する先進資本主義諸国の加担の比率は約63%で、それは世界の人口と世界の工業生産に占めるこれらの国の比率よりもはるかに高い。それに比べれば、ソ連はかなりましな方だ。次のように言うことさえできる――地球上の生態学的均衡が今のところ相対的に受け入れられるレベルで維持されているのは、ある程度はソ連のおかげである、と。にもかかわらず、わが国にはのんきにかまえているための口実はない。このことは7月2―3日に開かれたソ連最高会議でも取り上げられた。ソ連最高会議は自然保護と天然資源の合理的利用に関する法律の諸要求を順守する問題を特に審議した。

問題の原則的な提起から始めよう。

世界には二つの正反対の観点がある。一方は環境保護のために生産の増大を抑制することを提案している。もう一方は大気、水、動植物界への損害を無視して、発展を続けることを提案している。ソ連ではいずれの立場にも同意しない。われわれは、社会主義社会制度が急速な社会・経済的発展と天然資源の保存・増大とを結び付けることを原則的に可能にしている、と考えている。

この調和への途上ですでに少なからぬことがなしとげられた。信頼できる法的基礎――われわれと自然との相互関係を調節する単一の法体系がつくられた。それは、土地、水、森林に関する各法典であり、地下資源に関する法典であり、大気の保護および動物界の保護と利用に関する法律である。これらの法律はわが国では生産の計画化と管理における実際の行動、国家予算からの巨額な資金の支出、生態学的知識と自然に対する慎重な態度の育成や特別の自然保護機関をはじめ、広範な社会団体の活動によって、補強されている。

ソ連最高会議ではこの活動の結果について述べられた。結果のいくつかを挙げてみよう。自然保護措置は国家的な諸計画の切り離しがたい一部となった。この目的のためにこの9年間に約六三〇億ルーブルが支出されたが、この金額は過去のいかなる時よりも多い。近年、汚水の放流は約30%減り、企業は大気中への有害物質の排出を13%減らし、淡水消費の合理化によって1年間に欧州最大のボルガ川の年間流量にほぼ等しい量の水が節約されている。

自然保護区の面積は9年間で2倍に増え、12の国立公園がつくられ、野生動物や鳥類の保護と数の維持を目的とする生命工学的措置の量が4倍に増えた……

自然保護はあまりにも高くつかないか、という質問が出るかもしれない。この数十億ルーブルを人々の他の最も切実な要求の充足に向けた方が良くはないか？

このどちらの質問に対してもソ連は、そんなことはないと答える。第一に、もし今日しかるべき措置をとっておかなければ、将来、生態系の破局を防止するために計り知れないほど多くの資金が要求される。第二に、生態学的合目的性は直接の経済的利益と結び付かなければならないだけでなく、完全に結び付くことができる。この思想を裏付ける幾つかの数字を示そう。ついでに言うと、このような数字は文字通りあらゆる生産部門で、いくらでも引用することができる。

くず鉄から作る1tの鋼は、鉄鉱石の採掘から始まる普通の方法による鋼の生産の$\frac{1}{15}$―$\frac{1}{20}$の費用ですむ。そのうえ空気の汚染は86%、水質汚染は76%減る。

故紙から作る1tの紙は、4立方mの木材を保存し、九〇〇立方mの水を節約し、電力消費を$\frac{1}{2}$に減らす。

くず鉄も、故紙も、その他の再生原料も今のところソ連では十分に利用されていない。ここに生産効率を高めるためにも、生態学的諸問題の深刻さを和らげるためにも極めて重要な余力がある。

これに劣らぬ効果があるのは、原材料を合理的に利用する措置、くずを出さない工程、有用鉱物の採掘時のすべての有効成分の総合的な利用などである。これは直接の経済的利益をもたらすだけでなく、自然に対して加える損害を減らすことにもつながる。

ソ連最高会議では、鉄鉱石を採掘するさい硫黄、コバルト、銅、その他の貴重な成分を含有する〝尾鉱〟をぼた山に捨てている企業の名が挙げられた。今でも随伴ガスを排ガス燃焼塔でむだに燃やしている採油場の名も挙げられた。この背後にあるのは、直接の経済的損失だけではない。これに劣らず重要なのは、硫黄、銅、随伴ガスを他の場所で別個に採掘しなければならず、そのさいこれにかなりの資金が費やされ、自然への負担を増大させることである。

代議員たちは他の問題も鋭く提起した。ソ連の多くの工業部門は原料節約工程をまだ十分精力的に導入していない。これは燃料、原料、電力、物資の重大な使い過ぎになる。それらの生産や採掘がますます高くつくというだけではない。自然の宝庫がそれだけ速く枯渇するのだ。新しい露天掘り採掘場、炭鉱、鉱山、発電所などの建設のためには農業用地を使用し、森林を伐採し、動物の居住環境を破壊しなければならない。資源を経済的に、合理的に利用すれば、ずっと少ない燃料と原料でより高い社会・経済発展テンポを保障することができる。実を言えば、この課題の解決のために主要な努力がふり向けられている。6月に開かれた科学技術進歩促進の諸問題に関するソ連共産党中央委員会の会議でミハイル・ゴルバチョフは次のように語った。「節約体制こそわれわれが豊かになるための道であり、真に課題中の課題であり、全党的、全国民的事業である」。彼は、燃料、原材料に対するソ連国民経済の需要の伸びの75―80%はそれらの節約によって賄われなければならない、と強調した。これは経済的理由からも生態学的理由からも必要である。

ソ連には見習うべき立派な模範がある。

私は新興都市ニジネカムスク（タタール自治共和国）で巨大な石油化学企業と並んで花咲く果樹園や緑の森林を見た。石油工業従業員たちはカマ川（ボルガ川の支流）と隣接の湖で魚釣りをしている。経済指標でも、生態学的指標でも彼らの企業はこの工業部門で最良の企業の一つである。

カルパート山脈の山ろくの丘陵地帯では森林は大量伐採により比較的最近まで全滅にひんしていたが、現在は大がかりな植林をしたおかげで復活しつつある。ここの木材蓄積量は年々増えている。木材の加工に携わっている諸企業はたえず製材の生産を増やしている。

このような例は沢山ある。とはいえ、経済と生態系とのこのような調和は今のところまだ通則になっていない。しかし必ず通則になるだろう。幾百万の人々がそのような調和の必要性を自覚したからだ。これはソ連最高会議が採択した新しい一連の措置に反映された。

〝憂慮する科学者連盟〟の呼びかけに対するM・S・ゴルバチョフの回答

全米科学アカデミーのメンバーの著名な科学者数百名を統合する米国の民間団体〝憂慮する科学者連盟〟は最近ゴルバチョフ・ソ連共産党中央委書記長とレーガン大統領に対し、ソ米両国が宇宙軍備の開発と実験の完全禁止について合意し、その間、衛星攻撃兵器の今後の実験に対し相互にモラトリアムを実施し、ABMシステム制限に関する一九七二年の条約を遵守するむね確認するように呼びかけた。以下は7月6日付けソ連各紙に発表されたM・S・ゴルバチョフの回答の全文。

尊敬するケンドール殿

〝憂慮する科学者連盟〟を代表してあなたが寄せられた宇宙兵器禁止の呼びかけを受け取った。軍拡競争が宇宙空間に波及し、宇宙が軍事的なせり合いの舞台になったら、人類にとってどんな危険な結果がもたらされるかを、他の多くの人々よりもはっきり理解しておられる著名な科学者たちのご意見に、私が深い尊敬の念をもって接していることを申し上げたい。

〝憂慮する科学者連盟〟は、宇宙空間の軍事化を防止し、それを平和的協力の場として開放しておくような明確な不退転の政治的決定を採択するようにとの根拠ある要求を出している。実際にこの問題は大胆なアプローチを要求している。ここでは、昨日の尺度や、一方的な利益や優位、しかも幻想的な利益や優位についての狭い考え方は、とうてい適用できないだろう。いま、過去のいかなる時にもまして必要なのは、現実の理解にもとづき、今日唯一の正しい決定を採択できるし、そうしなければならない人々が自らの責任を回避した場合、われわれが明日には不可避的に直面することになるその危険の理解にもとづいて、先を見通した政策なのである。

ソ連指導部を代表して、はっきりと申し上げておきたいが、ソ連は先に宇宙に兵器を持ち込むことはやらない。このような宿命的な一歩を踏み出さないよう他の諸国、とりわけ米国を説得するため、われわれは全力を傾けていくつもりである。この一歩は必ずや核戦争の脅威を増大させ、あらゆる方向での抑えのきかない軍拡競争に刺激を与えるだろう。

あなたもご存知と思うが、この目的でソ連は国連に抜本的提案――宇宙空間での武力行使と宇宙から地球に向けての武力行使の禁止に関する条約案を提出した。もし米国がこのイニシアチブを支持するなら、宇宙兵器の問題は一挙に永久に解決できるだろう。

核軍備と宇宙軍備に関するソ米ジュネーブ交渉で、われわれは攻撃用宇宙システムの開発・実験・展開の完全禁止について合意を達成することをめざしている。このような禁止は宇宙を平和な開発、研究や科学的発見のために保持するばかりでなく、核兵器の大幅削減と廃絶のプロセスに着手する可能性をも与えるだろう。

われわれは米国によいお手本を示すための一方的措置をも、一度ならずとってきた。衛星攻撃兵器を宇宙空間に打ち上げることに対してソ連が実施したモラトリアムは、すでに2年間効力を保っており、今後も他の諸国が同様に振る舞っている限り効力を保っていくだろう。双方が新たな衛星攻撃手段の開発作業を完全に停止し、ソ米両国が現に保有するこの手段は、実験が完了していないものも含めて廃棄するようにしようとのわれわれの提案は、ワシントンのテーブルの上にある。米側の行動は、すでに近い将来に米政府がどのような決定を選ぶかを明らかにするだろう。

米国がソ連と共にABMシステム制限に関する無期限の協定の規定を守るむね拘束力のある形で確認することに合意するなら、戦略的安定は強化されるに違いない。ソ連は攻撃宇宙軍備や大規模ABMシステムをも、このような防衛の基盤をも開発しておらず、条約全体とその各部分から生じる義務を厳守し、この最重要文書の精神と字句を一貫して守っている。われわれは米指導部に対し、この仕事でわれわれに合流し、かねてからの宇宙軍事化計画を放棄するよう勧誘している。この計画は不可避的に、核軍備制限プロセス全体のかなめを握るこの文書をほごにしてしまうだろう。

ソ連は、双方にこの歴史的目標を達成しようとする政治的意思と誠実な希望があるならば、宇宙での軍拡競争を許さず、地上でのそれを停止するという課題の実際の解決は可能であるとの立場に立っている。ソ連はこのような希望、このような意思をもっている。

〝憂慮する科学者連盟〟とその全メンバーが、平和と進歩のための立派な活動で成功を収められることを希望する。

「核戦争阻止・核兵器廃絶」国際シンポジウム（東京）におけるソ連共産党代表の発言要旨

7月10日から13日まで東京で「核戦争を阻止し、核兵器全面禁止・廃絶を実現するたたかい」をテーマにした日本共産党中央委員会主催の国際シンポジウムが開催され、ソ連共産党を含む世界27ヵ国の共産党、労働者党の代表が参加した。以下に紹介するのはこの国際シンポジウムにおけるソ連共産党代表の発言要旨である。

ソ連共産党中央委員、ソ連最高会議民族会議議長 A・E・ボスの発言要旨

核戦争の防止、核兵器の禁止と廃絶は、現代の切実な課題である。私は、現在世界で起きている諸事件との関連で第2次世界大戦の教訓のいくつかの問題に焦点をしぼりたいと思う。

第2次世界大戦の主要な教訓は、すべての人々にとって明らかである。それは、戦争が始まらないうちにそれに反対して闘わなければならない、ということである。この結論は、大量殺りく手段が使われる戦争のことを念頭に置くならば、いっそう重要な意味を持つ。

歴史の経験は、核の脅威に反対する闘争で最も積極的で首尾一貫した力は世界共産主義運動であることを示している。世界における事態の展開は共産主義者の使命を、搾取に反対し、社会主義をめざす闘士という伝統的、古典的な役割の枠の外へ引き出した。いまやそれは、文明と地球上の生命そのものを救うという課題を有機的に含んでいる。平和を守り、核の脅威に反対する闘争と、社会進歩をめざし、勤労者の利益を守る闘争は極めて緊密に結びついた。

ソ連共産党は核の脅威に反対する闘争で他の兄弟諸党、すべての平和愛好勢力と協力している。この点で昨年12月のソ連共産党と日本共産党の共同声明は重要な意味を持っている。そこには核戦争阻止、核兵器の禁止と廃絶をめざす闘いで両党が協力することについての合意が明記されている。

わが党はこの文書に大きな意義を与えており、今回のシンポジウムへの参加も、そのことを証明している。

第2次世界大戦のもう一つの重要な教訓は、戦争の脅威、核の脅威に反対する闘争で最も重要な要素は、労働者階級、すべての勤労者、民主主義者の統一と団結である、ということである。戦前、大衆の反戦運動がしかるべき勢いにまで達しなかったのは、主として労働運動が分裂し、民主勢力が掘り崩されてしまったからである。

歴史の経験に照らせば、共産主義者と社会民主主義者、労働組合、労働運動全体の共同行動の大きな意義は特に明らかだ。

しかし、核の脅威に反対する闘争は、闘争参加者が人類にとってこのような脅威が現在どこから出ているかをよく知る場合にのみ、成功を収めることができる。われわれすべてに全く明らかなように、帝国主義、まず第一に米帝国主義とその侵略政策こそ、核の脅威の主要な源泉、核軍拡競争の主要な原動力であったし、今もそうである。

このことは周知の諸事実によって裏付けられている。まさに米国こそ最初に核兵器を使用したのであり、しかも軍事的にその必要がなかった情況下で使用したのだ。米国こそ第2次世界大戦終結後すぐに核兵器の禁止に反対したのであり、現在も反対し続けているのだ。米国こそ核兵器を最初に使用しないという声明をすることを拒否しているのだ。米国こそ、核軍拡競争を中止し核戦争を凍結し完全廃棄を含む核戦力の真の削減に着手することを拒否しているのだ。米国こそ核兵器実験の完全禁止協定の締結を防げているのだ。米国こそその展開が核戦争発生の危険



宮本顕治・日本共産党中央委員会議長と握手するA・E・ボス、その左――I・I・コワレンコ。（写真提供＝赤旗）

を著しく増大する攻撃用宇宙兵器の開発に着手したのだ。

反戦運動の反帝国主義的性格は、反動勢力の間に大きな不安を引き起こしている。反動勢力は、反戦闘争を迷わせ、核の脅威の主要な源泉である帝国主義から攻撃のほこ先をそらせ、帝国主義から国際緊張の激化と軍拡競争の強化の責任を少しでも取り除こうと躍起になっている。反動勢力が反戦運動に盛んに押し付けようとしているいわゆる米ソ"平等の責任"などという概念の出現は、同じ意図によるものだ。この"概念"が事実による検証に堪えないことは言うまでもないし、この概念が成り立たないことは再三証明された。

われわれは核戦争の宿命的な不可避性はないと確信している。諸国民の結束は、世界を核破局へ押しやる連中の途上に立ちふさがる強力な障壁になりうる。いまや平和勢力は反動と侵略の勢力よりも比較にならぬほど強力である。

核兵器出現当初からソ連共産党とソ連の政策は核戦争阻止、核兵器の禁止と廃棄を一貫してめざしている。わが国は決してこの方針にそむかなかったし、現在もこの方針を堅持している。これらの目的を達成するために、ソ連は政治上、イデオロギー上、宗教上の理由やその他の理由による一切の差別なしに地球上のすべての平和擁護者と協力する用意がある。

第2次世界大戦の終結40周年にあたってソ連共産党中央委員会、ソ連最高会議幹部会、ソ連閣僚会議はすべての国の国民、議会、政府に宇宙での軍拡競争の防止と地上でのその中止、核兵器の制限、削減、さらには完全廃棄のために全力を尽くすよう呼びかけた。

ソ連は、核戦争を阻止し、核軍備を制限し、その完全廃棄を含む抜本的な核軍縮へ移行するために、数々の具体的措置――核兵器の使用・実験の禁止、新型核兵器の開発・生産の禁止、核兵器のストックの制限と削減、地球上の核兵器拡散禁止、さまざまな地域での非核地帯創設など――の実施を提案してきたし、いまも提案している。その際われわれは決して、主要な課題の領域の具体的、部分的措置を、核兵器の禁止・廃絶ということと区別していない。核戦争阻止のための具体的、部分的措置の実施は核兵器の全面禁止・廃絶を近づけ、この現代の極めて重要な課題を解決するための好ましい条件をつくり出し、より広範な大衆を反核運動に引き入れるのに役立っている。

最近とみに宇宙での軍拡阻止の課題が重要性を帯びてきている。これは特に、報復攻撃を受けることなく核の第一撃発射が保障される攻撃宇宙兵器の開発を米国がすでに始めたことと関係がある。

核兵器の出現が通常兵器を取り除かず、核兵器に加えて通常兵器の軍拡競争の促進をも招いたように、宇宙兵器の開発もまた同じ道をたどり、軍拡競争はさらに活発になり、新たな領域を巻き込むだろうことは極めて明確だ。宇宙空間軍事化はあらゆる分野での制御できない軍拡競争につながるだろう。

われわれは、40年前広島・長崎に米国の原子爆弾が投下された8月6日と9日を、核兵器禁止・廃絶のための国際共同行動の日と宣言するという世界平和評議会の決定を支持する。ソ連の平和支持者たちは、この両日、核戦争を阻止し、核兵器禁止・廃絶を達成する決意を表明する考えである。

ソ連共産党中央委国際部次長 I・I・コワレンコの発言要旨

私は、今回のシンポジウムのテーマの枠を逸脱しない範囲で、反核闘争、アジア・太平洋地域の平和と安全を強化する闘争の諸問題に言及してみたいと思う。全世界の政治情勢が、陸地の1/3、世界人口の3/5以上を占めるこのアジア大陸の事態がどんな方向へ発展するかにかかっているからだ。

そのアジアは、地球上でも、核戦争の起こる危険が最も大きな地域のひとつだ。原子兵器がはじめて使われたのも実にこのアジアの土地だということ、すなわち一九四五年8月米国の原爆が広島と長崎に投下されたという事実をあげるだけで十分であろう。そして今日も、米国軍部はアジア・太平洋地域を潜在的な核戦争の戦域と見ているのである。

アジアにとっての核の脅威の源泉がなによりもまず米国とその侵略政策にあるのは議論の余地がないことだ。

現在極東における米国の核の力はめざましく増強されている。日本の港を基地とする米第7艦隊の艦艇には新型の巡航核ミサイル「トマホーク」が装備されている。三沢空軍基地には核兵器を運搬する性能をもった米軍機F16が配備されている。米国の支配層のもくろみによれば、東アジアと、その岸を洗う太平洋とインド洋は、西欧とその岸を洗う大西洋と同じく、前進配備核兵器の展開地帯にならねばならない。どちらの場合も、その目的は明らかに、第一撃兵器を四方八方からソ連の国境にできるだけ近づけること、西の同盟国も東の同盟国もともに、米国自体に向けられる報復攻撃をそらす避雷針として利用することにあるのだ。米国がソ連の東と南にあたる地域に、西にあたる北大西洋条約機構（NATO）式の軍事・政治ブロックをつくりたがっていることは、秘密でもなんでもない。つまり、米国の庇護の下にこの地域に新しい多国間の軍事・政治機構をつくるというのである。

こういう米国の政策の矛先はソ連と他の社会主義諸国に向けられているが、それはアジア・太平洋地域のすべての国の国民にも脅威を与えている。

平和にとって危険なこの活動を隠ぺいするために、アジア・太平洋地域諸国への「ソ連の脅威」というデマが使われている。もちろん、これは新しい手口ではない。ヒトラー・ドイツとファシスト・イタリアと軍国主義日本の間にあの悪名高い「反コミンテルン条約」が締結されて、第2次世界大戦への一歩となったのもやはり同じような口実にもとづくものであった。

故意にでっちあげられた極東の「ソ連のSS22ミサイル」問題もやはり前述のような目的に奉仕している。ソ連は、西でも東でもいかなる国にも脅威を与えていないし、脅威を与えるつもりもないことを、再三明言してきた。

わが国はこれまで何回も、実現さえすれば極東の平和の強化を助けるような具体的な提案をしてきた。日本を含めたすべての関係国と極東における信頼措置について具体的な交渉をすることをソ連が提案したのは、4年余りも前のことだ。また二国間ででも、たとえばソ連と日本の間で信頼措置の交渉を始める用意のあることを表明したのも、また航行の最も頻繁なシーレーンが通る海域に信頼措置を広げることを提案したのも、いずれもソ連である。

核兵器をつくらず、持たず、持ち込まない国には決して核兵器を使用しないとはっきり断言したのは、ソ連である。ソ連としては、このような義務に国際条約の形を与える用意があり、またとくに日本とこの点について（極東における信頼措置についての交渉の枠内あるいは別の形で）意見の交換を始める用意がある。日本国憲法も、また日本政府が宣言した「非核三原則」も、以上の問題についての合意の達成に幸いするはずだ。

つい先頃M・S・ゴルバチョフ・ソ連共産党中央委書記長は、米国がアジア地域の戦略情勢を変えるような行動をとらないことを条件として、ソ連アジア部のミサイルの数を凍結することにソ連が同意することを確認した。ソ連としては、相互主義の建て前でミサイルの数を制限し、次いで削減するために、アジア・太平洋地域の国家のうちで、同じような兵器を持っている国とこの問題を審議するのに反対ではないと、ゴルバチョフ書記長は強調した。

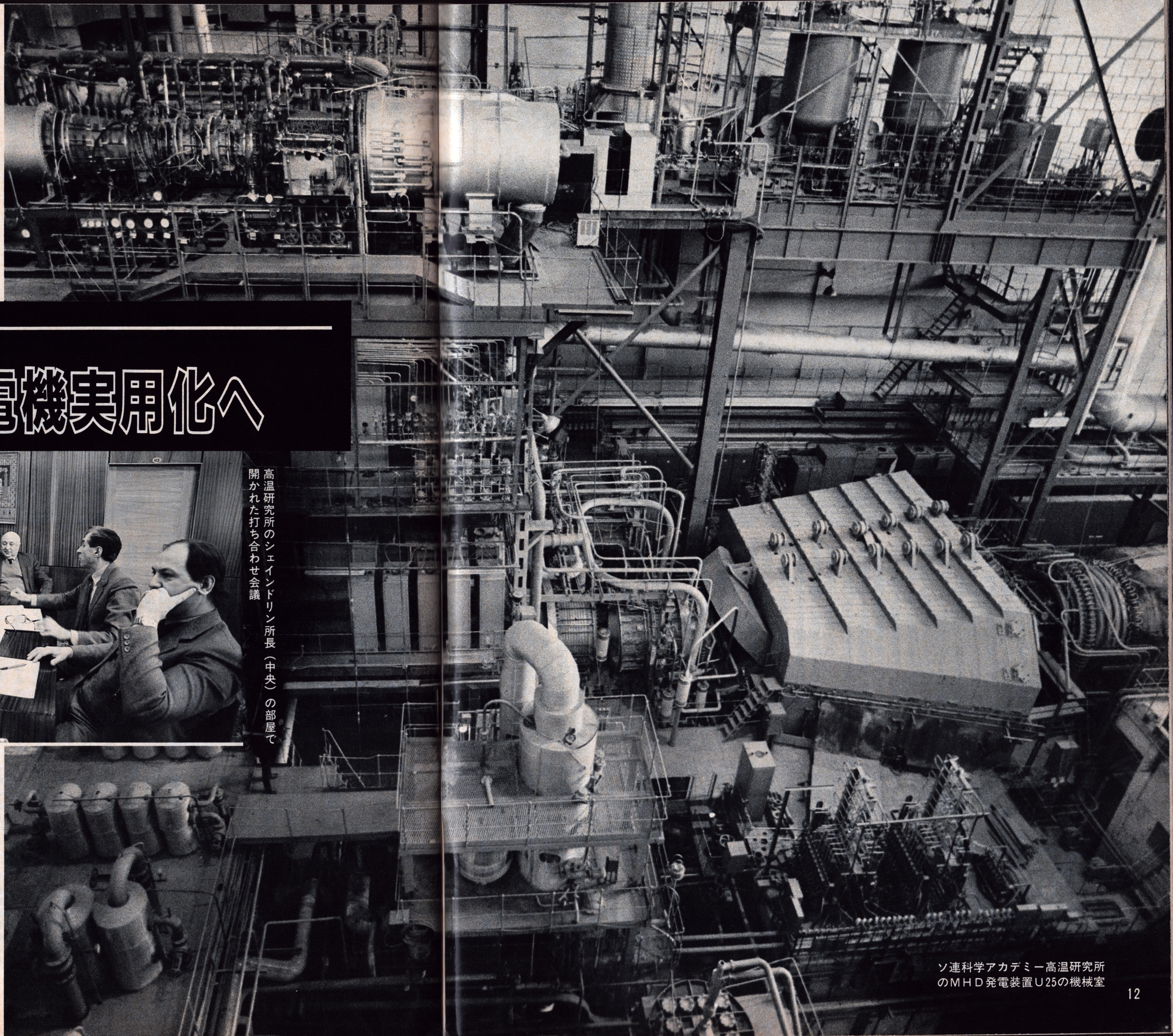
一連の非同盟諸国はインド洋を平和地帯に変え、そこには外国の軍事基地を置かないようにしようとの提案を行った。周知のように、この提案は、国連総会によって支持された。しかしながら、この構想の実現は、核攻撃力を持つ大艦隊をインド洋に集結している米国によって妨げられている。

アジア大陸の二つの核大国、ソ連と中華人民共和国が共に、最初に核兵器を使わないという義務を自ら負ったことも、大きな意義を持っている。

今年の5月インドのラジブ・ガンジー首相がモスクワを公式訪問中、ゴルバチョフ書記長は、こういったすべての積極的な動きや、これまでの欧州での経験などを考慮に入れた上で、アジアの安全問題に対して全般的、総合的なアプローチを考え、この方向でアジア諸国の努力を統一する可能性を考えることに賛成の意見を述べた。そして書記長は、この目的へ進む方法として、二国間の交渉、多国間の協議から、将来は意見交換と建設的解決の共同探求のための全アジア・フォーラムを開催することまで挙げたのである。

つい先頃レ・ズアン・ベトナム共産党中央委書記長を団長とするベトナム社会主義共和国党・政府代表団がソ連を公式訪問した結果採択されたソ連・ベトナム共同声明には、アジアを平和地帯、同権の協力地帯にするという構想への支持が確認されている。

もちろん、この目標を実現する道は簡単ではない。アジアには、軍事紛争の火種があるとか、外国からの干渉とか、独自の小さからぬ困難が存在する。しかしながら、アジア諸国民が平和と安全、善隣と協力に寄せる関心の深さは決してほかのいかなる大陸の国民に劣るものではない。全アジアの安全をめざす運動の原動力になるのは実にこのような諸国民の意志なのである。



ソ連科学アカデミー高温研究所のＭＨＤ発電装置Ｕ25の機械室

明日の発電機

ＭＨＤ発電機実用化へ



高温研究所のシェインドリン所長（中央）の部屋で開かれた打ち合わせ会議

現在先進諸国は予算の50％近くをエネルギーの確保に使っている。電力の約90％は火力発電によるものだが、発電効率は40－42％以下である。つまり火力発電所で使われる石炭ないしは重油一〇〇ｔ当たりわずか40－42ｔが電力に変わるわけで、残りの58－60ｔの熱は電力を生産する過程で空しく消えている。世界の火力発電所で毎年使わ

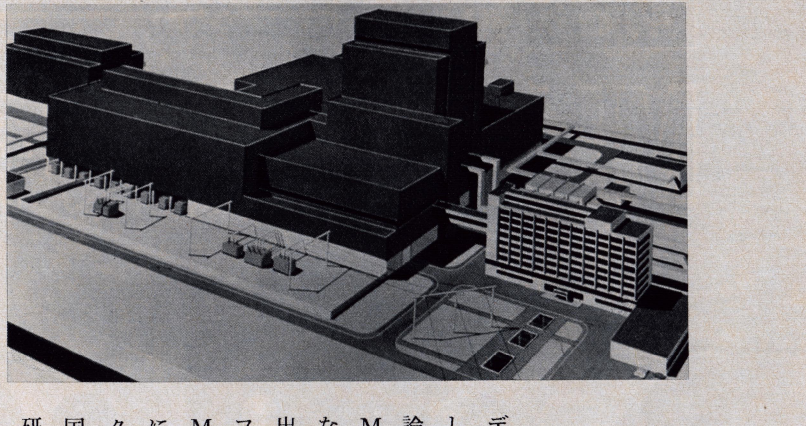
れる燃料は、締めて数十億ｔにもなるから、考えると恐ろしいような無駄使いである。

電磁流体発電とは？

学校の上級生なら普通の発電機の作動原理ぐらい、誰でも知っている。回転子が回るさい、回転子のコイルが固定子の磁界を横切り、その結果電流が誘起される。では回転する金属の導体の代わりにプラズマ（電離気体）を使ったらどうだろう？　電磁流体発電機（ＭＨＤ）という名のこうした発電機だと、熱エネルギーは〝仲介〟ぬきで直接電気エネルギーに変換されるので、発電効率はとても高い。

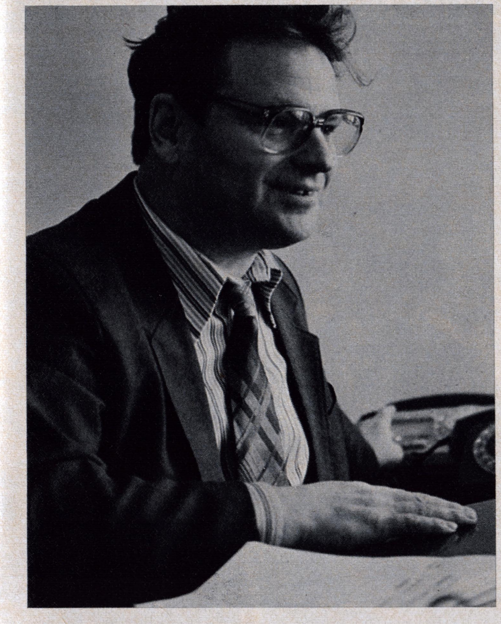
この構想を工業的規模で実現した場合のメリットはどうだろうか？

専門家たちは、工業用ＭＨＤ発電機だと、燃料消費量はうんと減って、火力発電所の効率は50—60％上がるとみている。ソ連の火力発電所の効率が1％上がるということは、年間一〇〇億kWｈの電力（シベリアのエニセイ川の世界最大級のクラスノヤルスク水力発電所の半年間の電力生産量に相当）が追加生産されることにほかならない。



リャザン州ノボミチューリンスク市にできる出力50万kWのＭＨＤ発電所の完成予想図 ▶

建設中のノボミチューリンスクのＭＨＤ発電所長ウラジーミル・ボルコフ



実験から実用化へ

一五〇年余り前マイケル・ファラデーは電気と磁気との近接作用を発見したが、いまファラデーの〝古い〟理論は全く新しい原理で実現されており、ＭＨＤ発電機のなかでプラズマは強力な磁界を横切って、電気の流れを生み出している。ところで偉大な英国人ファラデーの肖像は、ユネスコ付属のＭＨＤ国際連絡グループ制定のメダルに刻まれているが、一九八三年のモスクワの第8回ＭＨＤ・エネルギー変換国際会議で、ソ連科学アカデミー高温研究所のアレクサンドル・シェインドリン所長は、このメダルを受章した。シェインドリン・アカデミー会員はソ連のＭＨＤ発電についてこう語った。

「ソ連で初めて実験用ＭＨＤ発電装置が開発されたのは一九六〇年である。開発に当たっては高温燃焼生成物を得るソ連のロケット工学の成果が生かされた。燃焼生成物にアルカリ性元素（カリウムまたはセシウム）を含む化合物を添加すると、気体は導電性の気体になり、低温プラズマに変わる。約三〇〇〇度（ケルビン温度）のこうしたプラズマはＭＨＤ発電機の作業体となる。プラズマは秒速約一〇〇〇ｍの高速で強力な磁界内の通路を通り、運動するプラズマの運動エネルギーは電気エネルギーに直接変換する。

まだ高温のうちに発電機を離れてゆく気体は、離れてゆくときに熱の大半を持ち去る。この熱を利用しなければ、ＭＨＤ発電所の経済性は高くはならない。ＭＨＤ発電機の背後に置かれた伝統的な汽力発電装置でなら、その熱を利用できる。

初期のころのＭＨＤ発電機が連続作動した時間はわずか1、2秒であったが、これだけのわずかな時間の実験でも、新しいエネルギー変換方式が現実

的で、将来性があることがわかった。この方式は新鋭の蒸気タービン発電所の約1・5倍の発電効率をもつ発電装置を開発する道を開くものである。

燃料の利用効率を大幅に引き上げるというバラ色の構想は、すべての工業先進諸国の専門家たちの注目を引いた。しかし構想を実現する道はいろいろで、ソ連の科学者たちは未来のＭＨＤ発電所のあらゆる要素をそなえた総合的な発電装置の開発に力を集中した。一九六四年には世界に先がけてこうした装置Ｕ02が稼働した。Ｕ02の出力は一〇〇kW以下ではあったが、商業用ＭＨＤ発電所のすべての要素を内包していた（これが一番肝心なことである）。

一九七一年には世界初の実験・工業用装置Ｕ25がモスクワで運転され、ＭＨＤ発電は次の最も重要な段階に入った。実験用ＭＨＤの連続作動時間は二五〇時間に達した。

ソ連のＭＨＤ発電装置による総合実験は、ＭＨＤ方式の実用化の新しい研究段階へ移る強固な土台を築いた。初めはとりあえず、天然ガスを使う通常の火力発電所の建設予定地に、天然ガスを使うＭＨＤ発電所をつくることになった。

一九七五年にソ連電力・電化省その他一連の組織は、科学アカデミー高温研究所の指導のもとに、ガス・重油を燃料とする出力五〇万kWのＭＨＤ発電ユニットの開発に着手した。いまソ連欧州部の中央にあるリャザン火力発電所（ノボミチューリンスク市）ですでにその発電ユニットが建設されている。

ＭＨＤ発電機は発電ユニットの出力の約半分の電力を供給し、あとの半分はＭＨＤ発電機の背後の装置の蒸気タービン部分が供給する予定である。

リャザンの発電ユニットの建設工事は、一九八〇年代の後半に終わり、ついで同じようなＭＨＤユニットが建設されるが、その出力は一〇〇万kWに増えよう。

このようにＭＨＤ発電機と組み合わせると、火力発電所の発電効率はぐんと上がる。しかし発電所の発電効率の引き上げは、燃料の節約や電力コストの引き下げから見て重要であるだけでなく、廃ガスによる大気汚染や熱による環境汚染の防止という点から見ても、重要である。ＭＨＤ発電機を使えば、有害ガスの排出量を30—50％減らすことができよう。

前途の難問

しかし、工業的規模のＭＨＤ発電産業創設の前途はまだ多難だ。

まず第一にコストが高いこと。たとえばリャザンＭＨＤ発電所の30ｍ管にプラズマを抑え込むには、高価な耐熱材を使わねばならないし、そのほか、ＭＨＤ発電機には低温冷却の超伝導磁気システムが使われていて、消費先に電力を供給するためには、複雑な半導体変換なしにはすまされない。

それでもなお専門家たちは、燃料消費が少ないことと運転経費が安上がりな点をあげ、たとえＭＨＤ発電所の工費が高くついても結局数年間で償却されるとみている。

もう一つは燃料選択の問題である。ＭＨＤ発電機には燃料として石油、ガス、石炭が使える。しかし、石油を使うと——たとえ方法は効果的であっても——金がかかり過ぎる。だから学者たちはもっぱらガスと石炭を使うべきだとしている。石炭の場合露天掘りのものなら、ガスよりもずっと安くあがる。恐らく石炭を使うＭＨＤ発電所は、一九九〇年代始めにシベリアに建設され、クズネツク炭田とカンスク・アチンスク炭田の石炭が使われよう」

共同の利益のための協力

一九七六年にソ連の研究所は、ブルガリア、ハンガリー、ポーランド、ルーマニア、チェコスロバキアの学術センターと共同でＭＨＤ発電の問題を解決することになり、いまガス、液体・個体燃料を使うＭＨＤ発電所を開発する大規模な総合的開発作業が共同で進められている。一九七九年からはこの開発作業にユーゴスラビアが加わり、一九八二年からはフィンランドが加わっている。

前述の第8回国際会議には日本を含む20ヵ国から約四〇〇名の学者と専門家が出席し、エネルギー確保の最も有望な方法の今後の発展問題を討議した。会議参加者は、ユネスコ付属ＭＨＤ国際連絡グループ議長のＬ・リチエンス教授（オランダ）が強調したように、「新しいエネルギー使用方法の発展に大きく貢献してきた」ソ連で会議を開いたのは有益だったと指摘した。

ソ連国民の夏休み

夏は休暇の季節。さまざまな年齢、職業の数百万の人が——都会暮らしの人も、いなか暮らしの人も——どこで休暇を過ごそうかと計画を立てる。北部地域に住む人は南の太陽と暖かい海をめざし、南部に住む人は炎暑にうんざりして逆に北方やバルト海沿岸へ出かける。釣りや狩猟のファンは湖や川、森やステップ（大草原地帯）の猟場へと向かい、若者たちは徒歩旅行を選ぶ。また、体調を崩した人たちは休暇を利用してサナトリウムへ行く。

ソ連ではこの20年間にサナトリウム、ペンション、休息の家、ツーリスト基地で休暇を過ごす人の数が5倍以上も増えた。毎年六〇〇〇万以上の人がこうしたリゾート施設の利用券をもらう。サナトリウムその他の保養施設も増え、現在その数はおよそ一万四五〇〇にもなる。

保養施設網はぐんと広がり、目の肥えた人でもどこにしようかと迷うほどだ。夏場に特に人気が高いのが、グルジア共和国やクラスノダル地方、クリミア、オデッサなど黒海沿岸の保養地、バルト海岸やアゾフ海岸の保養地、ボルガ川、ドニエプル川、バイカル湖の船旅である。一方冬にはカフカズ山脈やカルパート山中の日光のふりそそぐ渓谷、ウラル山脈、ヒビン山脈（コラ半島）の斜面、カレリア地方やモスクワ郊外の森が、たくさんのスキーヤーの人気を集めている。

カフカズやクリミアの伝統的な保養地へは大勢の旅行者が押し寄せるため、夏季は列車と飛行機の臨時便を増発して客をさばいている。一方、新たな保養地を開拓する動きも活発になっている。

その一つがカスピ海の西海岸。ここは背後の山脈が寒暑を和らげるので亜熱帯植物の緑に恵まれているほか、鉱泉と泥浴用の泥が豊富だ。延長八〇〇kmの海岸の大部分ではほぼ一年中気温がマイナスになることはない。

すでにことしからここではサナトリウム、休息の家、ペンションの大規模な建設が始まる。近い将来カスピ海はクリミア半島やカフカズの黒海沿岸に劣らぬ人気リゾートになるだろう。

全国的な意義はともかく、その地方で人気のある保養地にも触れておこう。たとえば、バム鉄道建設の起点になったシベリアの新興都市ウスチクートの近くにサナトリウムが開設されたが、ここの治効のある温泉と泥浴用の泥は鉄道建設関係者だけでなく、地元のシベリアっ子たちにも評判がいい。ちなみにソ連のサナトリウムはすべて専門化されており、それぞれのサナトリウムは一定の疾患の患者を受け入れるようになっている。血液循環系の病気、支持・運動器官系の病気、肺の病気、消化器系の病気などの治療を専門とするサナトリウムがある。

別の例を挙げよう。数年前、アルペンスキーヤーたちがグルジア共和国のグダウリという村の近くをトレーニング地に選んだ。その後短期間の内にここには労働組合の資金でホテル、数軒のコッテージ、索道がつくられた。世界中どこでもそうだが、ソ連でも高原で休暇を過ごすのが、ひじょうに人気がある。ソ連ではアルペンスキー基地で休暇を過ごす人の3人にひとりは、無料か7割引の利用券を支給された人たちである（2週間の滞在費を個人で全額負担すれば一二〇—一三〇ルーブルになる。1ルーブルは約三〇〇円）。

高原の保養客は3食付きの快適なホテルが保障され、グループごとにベテランのインストラクターの指導を受ける。冬は初心者のアルペンスキー指導、夏はハイキングやスポーツ競技会が催される。アルペンスキー用の保養地はやはり若い人たちの独壇場。難しい山登りをこなせる技術と体力が必要ということになれば、それも当然だろう。

次にサナトリウム、休息の家、ツーリスト基地の利用券の値段について。ソ連では労組の組織する休息はすべて、国家社会保険の予算で費用がまかなわれる。そしてこの予算は労働組合が管理している。そのおかげで、保養施設利用券の大半は、実費の約3割を支払えば手に入れられるようになっている。このほか、サナトリウム利用券の5枚に1枚、休息の家やツーリスト基地の利用券の10枚に1枚は、企業の労働組合委員会から労働者・職員に無料で支給されている。なお、ソ連の場合、忘れてはならないのは、国家社会保険基金は企業の払い込み保険料と国の補助金で構成されるということだ。勤労者自身が自分の賃金からこの基金に保険料を払い込むことは一切ない。

別荘で楽しむ花づくり

ソ連では国民の福祉向上にともない、人々の自由時間、余暇の組織化にますます関心が払われているが、最近、都市の住民の間でひじょうに人気があるのが、都市の近郊に借りた土地で行う家庭園芸だ。こうした都市住民用の園芸用地（協同組合方式で管理）は、現在ソ連に五〇〇万以上ある。ことしの5月には政府レベルで、協同組合方式の家庭園芸・菜園用地を発展させる問題が審議された。来年一九八六年からは、都市住民の高まる需要に応えるため、家庭園芸用の資材・機械の供給を増やすことが決まっている。

国は勤労者の希望に応え、家庭園芸協同組合（主として工場や他の大企業単位で設立される）に加入した労働者・職員に面積六〇〇平方mまでの土地を無料で提供している。また、園芸用地に別荘（サマー・ハウス）を建てる資金を10年分割払いローン（最初の3年間は据え置き）で提供している。



娘のアレフチナと孫娘のオリガがスハノフ夫妻の別荘に来た時は、みんなで森へキノコ取りに行く。

園芸用地所有者の多くは週末の土、日曜日だけでなく、年次休暇までそこで過ごす。園芸協同組合のメンバーは自分の用地に対しては完全な使用権をもつ。用地を花壇にしようが、果樹園にしようが、菜園にしようが、その人の自由である。それでも昨年度だけで一〇〇万t以上の野菜、漿果、果物がこれら家庭園芸用地の所有者により収穫された。収穫物の一部は都市の自由市場で販売されたが、これはもちろん、国の果物・野菜供給体制に対する大きな助けになった。

ノーボスチ通信社記者のニーナ・ニキーチナとユーリー・プロスチャコフは、園芸用地をフルに使って生活を楽しんでいる年金生活者ウラジーミル・スハノフ、ニーナ・スハノワ夫妻をモスクワ郊外の別荘に訪ねた。

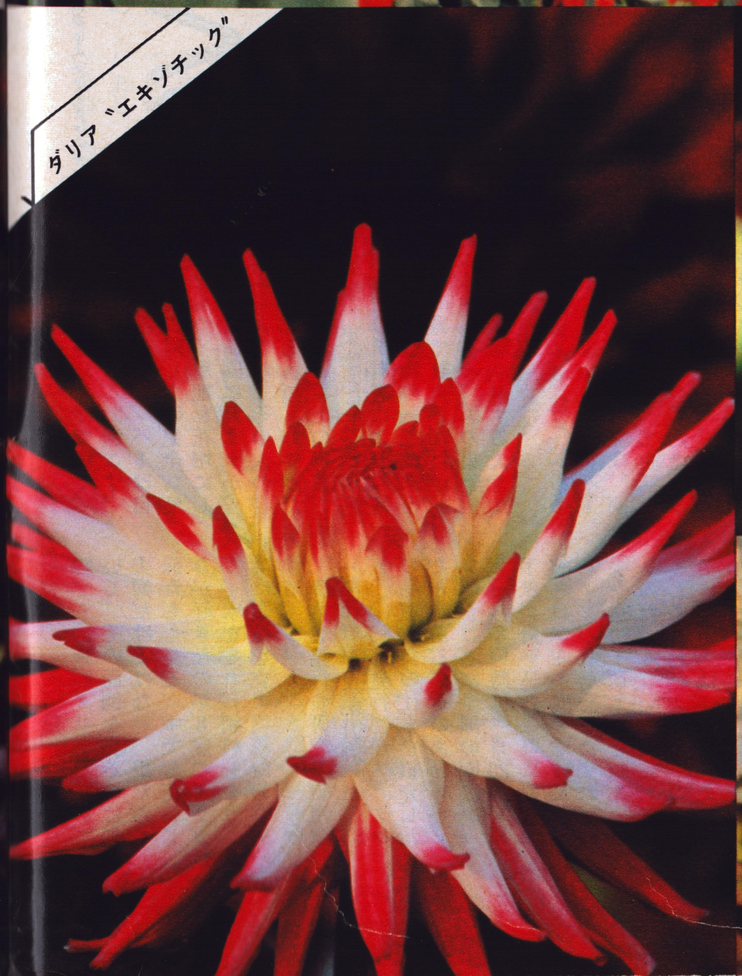
日が差し始めると、スハノフ家の花壇の花が一斉に開く。春はスイセン、チューリップ、初夏はシャクヤク、バラ、グラジオラス。8月にはダリアが咲く。ウラジーミルはダリアが一番好きだ。そしてダリアのことに一番詳しい。40年間に約二〇〇〇種の新種を育てた。その作品は何度となくモスクワの国民経済成果博覧会の「草花栽培館」に出品された。妻のニーナも何度か品評会で入賞した——彼女はフラワーデザインの名人なのだ。スハノフ家の土地にはいま約二五〇〇種のダリアが咲いている。その面倒を見るのは老夫婦だけではない。娘たちも孫たちも見る。中でも花いじりが好きなのが8歳のオリガで、水をやり、肥料をやり、茎に支柱を立て、草むしりをする。

農業省発行の研究・実用誌「草花栽培」（隔月刊、三〇万五〇〇〇部発行）がスハノフの品種改良の仕事を紹介したことがある。そのあとスハノフのところに全国の園芸ファンから多い時は一日20通もの手紙が舞い込むようになった。彼らはアドバイスを求め、スハノフの栽培法をたずね、球根を送って欲しいと頼んでくるのだ。そういう人たちにどうして断われよう？　こうしてスハノフはベロルシア共和国からサハリン、カムチャツカまでソ連全国の同好の士に小包を送っている。

「花は私の人生です」とウラジーミル・スハノフはいう。「これはけっして、老人には何か日々を満たすものが必要だから、というのではありません。電気技師として働いていた現役時代も、年金生活に入ったいまも、ずっとこの花づくりは私を助けてくれたように思います。美しいもののつき合いは気持ちを明るくしてくれます」



下端　ダリア"芸術家"
下　ウラジーミル・スハノフの作ったダリア"貞節"
郊外のこの園芸用地をスハノフ夫妻は"小さな楽園"と呼ぶ。ここは文字どおり花にうずまっている。



ダリア"エキゾチック"







ダリア"星"



いちばんきれいな花輪はママへ。

スポーツ

スポーツに力を入れるハバロフスク地方

ハバロフスク地方体育・スポーツ委員会議長　ワレンチン・アンドレーエフ

7月末、ハバロフスクで恒例のソ連極東・北海道親善スポーツ大会が開かれた。競技種目はサッカー、バスケットボール、柔道、卓球。

このスポーツ大会が初めて開かれたのは13年前。以来、ソ連と日本で交互に開催され、今回が第9回目になる。

ソ連極東のスポーツマンとコーチたちは、晴れの大会めざして万全の準備をした。競技会はいつも友好的な雰囲気のもとで行われる。ハバロフスクには競技会のための立派な施設がそろっている。ソ連のスポーツマンは北海道からの客人たちがハバロフスク市の歴史や名所旧跡に親しみ、博物館や劇場を訪れ、アムール川を船で遊覧し、ソ連の若者や体育大学の学生たちと交歓して、余暇を有意義に過ごせるように計画を練った。

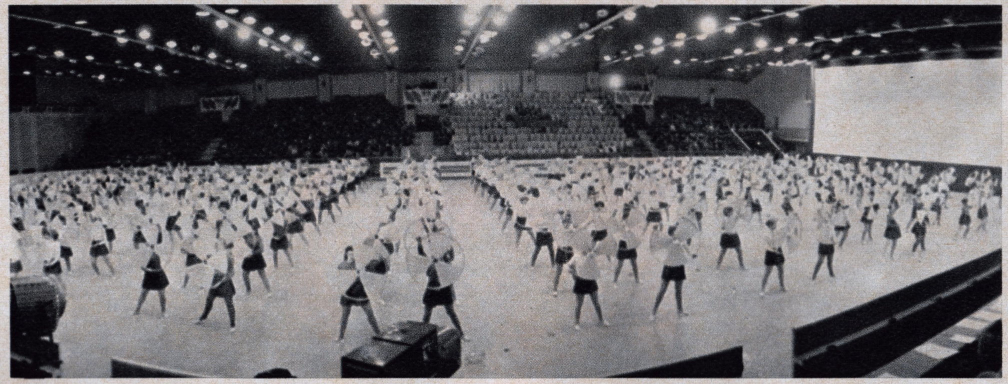
北海道からの客人たちにとっては、ハバロフスク地方の人々がどのようにスポーツに親しんでいるかは大いに興味のあるところだろう。

ワレンチン・アンドレーエフ・ハバロフスク地方体育・スポーツ委員会議長にこの地方のスポーツ生活について語ってもらった。

次々に建設されるスポーツ施設

ハバロフスク地方はソ連で最もスポーツが盛んな地域の一つである。この地域から数々の大選手――オリンピックや世界選手権、欧州選手権の優勝者、入賞者、記録保持者が生まれているのも偶然ではない。現在、さまざまな種目のソ連ナショナルチームのメンバーに21人のハバロフスク地方出身者がいる。

だが、われわれにとって大事なのは大きな国際競技会や全ソ競技会でのメダルの〝成果〟ではなく、さまざまな年齢や職業の人々がどうやって日常的な体育やスポーツに参加するかということである。これは重要な社会的、国家的課題であり、したがって人民代議員ソビエト、企業の管理部、労働組合は、だれもが体育、スポーツ、レクリエーションに取り組めるための最適の条件をつくり出そうと努力している。



ハバロフスク市のスポーツ宮殿で行われる全ソ体育デーのスポーツ祭典

たとえば、この5年間に、ソビエトと労働組合の資金でハバロフスク市内に、一度に五〇〇人以上が練習できるアーチェリー場、〝ネプチューン〟プール、ボクシング、重量挙げ、レスリング、体操の専用ホールが建設された。レーニン記念スタジアム、〝ディナモ〟スタジアム、〝ロコモチフ〟スタジアム、〝ネフチャニク〟スタジアムが大改修された。児童スタジアムの建設が完了しつつあり、陸上競技宮殿の建設が始まった。

ハバロフスク地方の他の都市や町でもスポーツ施設の建設が進められている。コムソモリスク・ナ・アムーレ市では観客二万五〇〇〇人収容の〝アバンガルド〟スタジアム、観客三〇〇〇人収容の人工リンクを持つアイスホッケー宮殿がオープンし、〝メタルールグ〟スタジアムと〝スメーナ〟スタジアムの工事が終わる。

ハバロフスク地方に属するユダヤ自治州の行政中心地ビロビジャンでは陸上競技場、チェス会館、プール、体操、卓球、重量挙げの専用ホールがオープンした。

体育・スポーツは住民の生活の重要な一環

ソ連極東の経済は急速に発展している。タイガの中に新しい都市や町、工場や林業所、採鉱・選鉱企業が建設されている。ここではすでにバイカル・アムール（バム）鉄道が開通し、営業しており、沿線整備の大工事のためにソ連欧州部から若者たちが大勢やってくる。

ハバロフスク地方の各級人民代議員ソビエトは、すべての新しい都市や町に工場や住宅とともに文化施設やスポーツ施設も同時につくり出すよう、建設をコントロールしている。たとえば、新しい都市アムールスクでは、工場よりも先に文化宮殿、スタジアム、スポーツ宮殿、プール、スキー基地（2カ所）、ツーリスト基地、メカ・スポーツ会館が建設された。ハバロフスク地方を通るバム鉄道東部区間のすべての駅にスタジアム、体育館、アスレチック公園がある。

ユダヤ自治州も含めて人口約一九〇万のハバロフスク地方にスタジアムが31、専門別の体育ホールが約一〇〇〇、スポーツ宮殿が19、屋内プールが21、アーチェリー場が一一三、スキー基地が78、チェス会館が26、バレーボールやバスケットボール、ハンドボール、テニスのコートがついたアスレチック公園が二〇〇〇以上ある。

これらすべての施設は朝から夜おそくまで利用できる。昼間は学童が使う。すべてのスタジアム、スポーツ宮殿、体育館には子どもスポーツ学校が付設されている。夜には大人がやってくる。授業はすべて無料で、コーチの報酬、用具購入代、試合のための旅費は国家と労働組合が負担する。

スポーツを通じて国際交流を強化

ハバロフスクには大規模な国際競技会を開くことができる現代的なスポーツ施設がそろっている。一九八一年にはここでバンディーの第12回世界選手権が行われた。ハバロフスクへはさまざまな国際競技会や親善試合のためにスウェーデン、フィンランド、ノルウェー、モンゴル、朝鮮民主主義人民共和国からもスポーツマンがやってくる。だが、いちばんひんぱんにやってくるのは日本のスポーツマンだ。日本のサッカー、アイスホッケーのオリンピックチーム、ナショナルチーム、ジュニアチームその他のチームもハバロフスク地方を訪れている。

こうした日本のスポーツマンとの交流の歴史の中でもソ連極東・北海道親善スポーツ大会は最も主要な地位を占めている。この大会は両国の若者たちが親しくなるのを促し、スポーツ技術を高める学校の役割を果たしている。たとえば、日本の選手やコーチたちは卓球や柔道の練習法を喜んで教えてくれるし、一方、ハバロフスクのスポーツマンはサッカー、アイスホッケー、バスケットボールの経験を伝え、模範演技を披露する。

われわれハバロフスク地方のスポーツ指導者、コーチ、選手たちは、日本のスポーツマンとの交流をいっそう発展させ、強化するつもりである。

スポーツ盛んな トビリシ大学

ケテバン・ロサベリーゼ
カメラ　S・ギブリン





戸外でトレーニングする
トビリシ大学の学生たち





▶学生レクリエーション大会の障害物リレー
グルジアでは昔から馬術が盛んで、学生もその例外ではない。

”ブレベスニク”協会のフェンシング・チーム



スポーツと若者が切っても切れない仲にあるとすれば、学生の場合はなおさらだ。なぜなら、チャンピオンたちの多くが自己の最高記録を打ち立てるのは、まさに学生たちと同じ年齢のころだからだ。だが、記録や華々しい勝利はそれ自体が目的なのではない。スポーツは、在学期間中はそれぞれの学生にとって良き助手であり、卒業してからは生涯の友人となる。

本号ではグルジア共和国の首都トビリシにある国立トビリシ大学の学生たちのスポーツ生活を紹介しよう。女子


数学の授業をする筆者のケテバン・ロサベリーゼ

アーチェリーのモスクワ五輪チャンピオンで国立トビリシ大学一般数学講座の講師ケテバン・ロサベリーゼに語ってもらった。

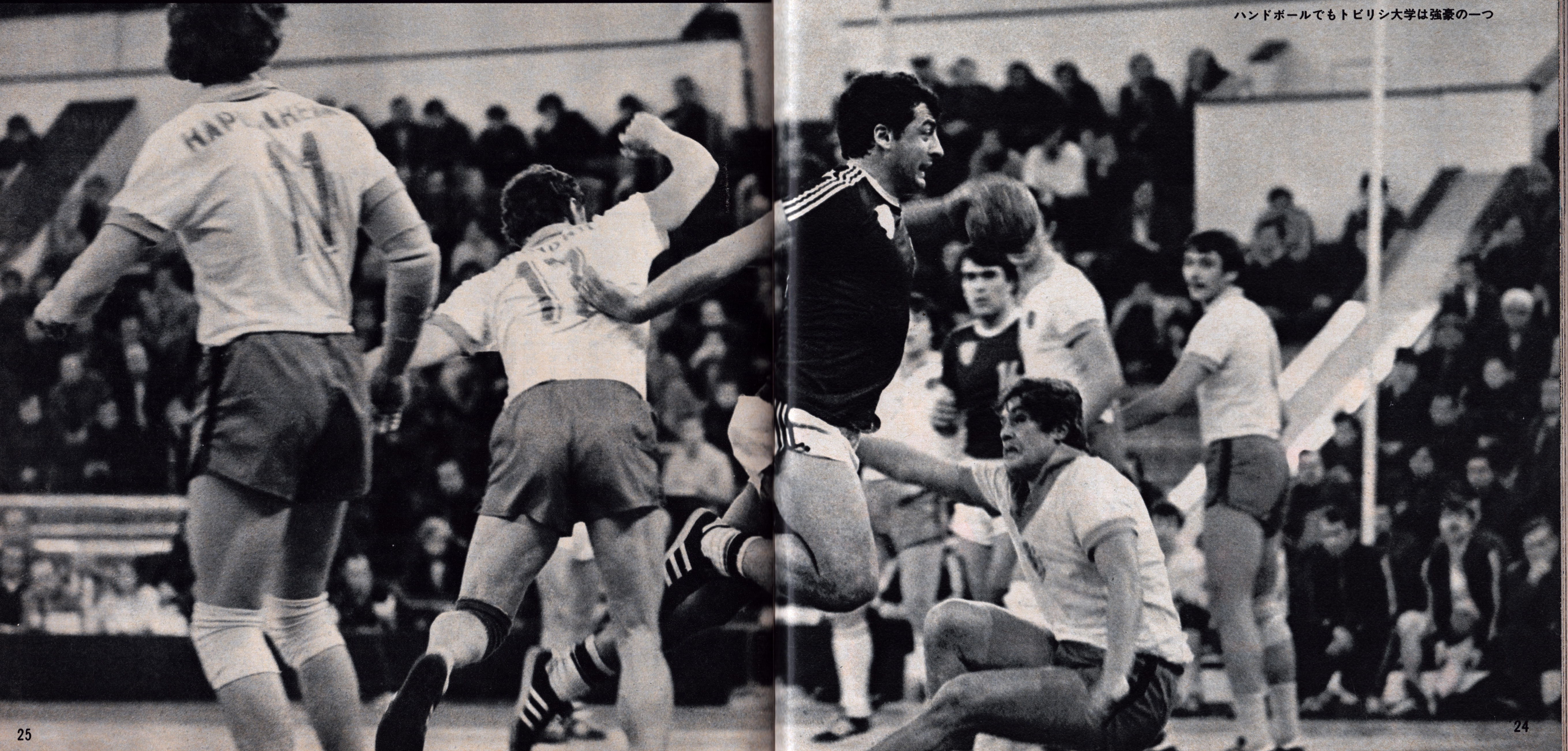
革命前の古いグルジアでは、スポーツは少数の者にしか手が届かなかった。スポーツは金持ちの特権だった。私がここで言うスポーツとは、現代の概念でのそれで、伝統的なスポーツや競技は民衆の中に生きつづけていた。グルジアではどこの村でも、取り入れが終わるとお祭りが催され、格闘技や剣投げ、石投げ、競馬など、民族的なスポーツが披露された。こうした伝統はいまでも残っているだけでなく、バドミントン、ハンドボール、バレーボール、テニスなど、以前にはグルジアではほとんど知られていなかったような種目も加わった。

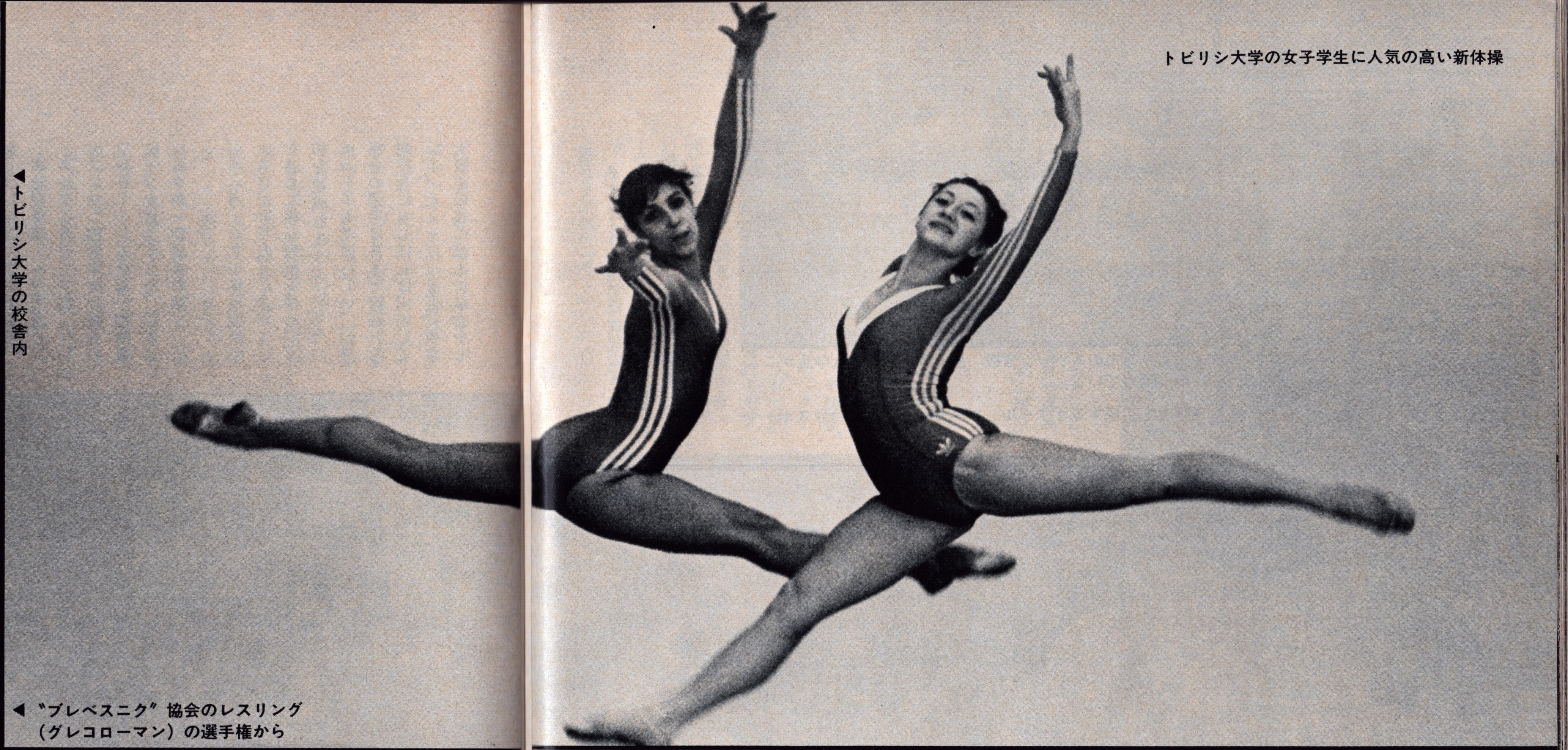
グルジア共和国では住民の4人に1人はスポーツをやっている。そのためのすべての機会と条件——余暇、資格のあるコーチ、立派なスポーツ施設、




▲トビリシ市のスポーツ宮殿。多くのトビリシ大学生がここを利用している。

◀学生を指導するオマール・プハカーゼ・ソ連功労スポーツマスター


ハンドボールでもトビリシ大学は強豪の一つ



トビリシ大学の女子学生に人気の高い新体操

無料の指導などがそろっている。若者たち、特に学生にスポーツが盛んなのはそのためである。共和国学生スポーツ協会“ブレベスニク”だけでも五万人以上を結集しており、その$\frac{1}{5}$はトビリシ大学の学生だ。

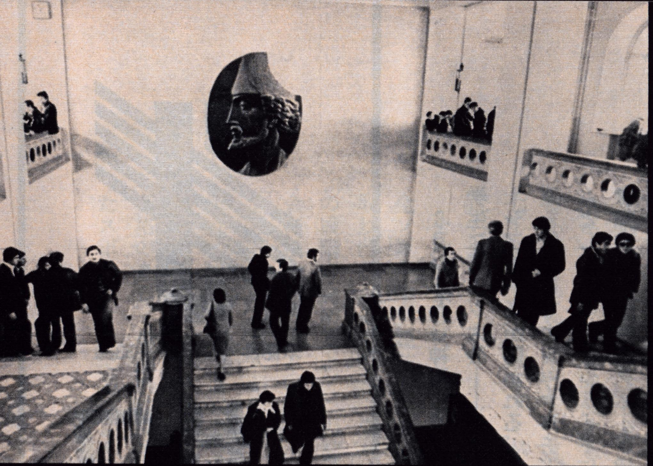
わがトビリシ大学は10月社会主義革命の勝利の翌年、一九一八年に開設された。これはかつてのロシア帝国領内に新設された最初の総合大学であり、わが国最初の民族大学でもあった。現在ここには20以上の学部、約一三〇の講座があり、約一万七〇〇〇人（そのうちの一万人が昼間部）の学生が学んでいる。

ついでながら、グルジアで最初に有資格スポーツ指導員の養成が始まったのもトビリシ大学においてである。トビリシ大学に設けられたこの体育学部は、のちに独立した大学――トビリシ体育大学になった。

わが大学はしばしばスポーツ大学と呼ばれる。それも根拠のあることで、たとえば、わが国で初めてスポーツ登山が生まれたのもトビリシ大学においてである。わが大学のニコラーゼ教授とディデブリーゼ教授の指導のもとに一九二三年8月、カズベク山（五〇三三m）の初登頂が行われた。わが大学からはチェスやサッカーやレスリシグの実に大勢の名選手――ソ連チャンピオン、欧州チャンピオン、世界チャンピオン、五輪チャンピオンが生まれている！

毎年春になると、わが共和国のすべての大学で学生デーが催される。この祭典のプログラムにはアマチュア芸能コンサート、各大学の学生代表会議、学術コンクールのほかにスポーツ競技会も含まれており、競技会にはわが大学のほとんどすべての学生が参加する。祭典の期間中、みんな街頭にくり出す。メーンストリートのルスタベリ大通りではマンモス・ロードレースが行われ、大学の建物の前にはリングが設営されて、マットが敷かれ、民族音楽が鳴り響く中でグルジア式のレスリングが行われる。

これは文字通りお祭りだが、日常的にもスポーツは盛んだ。スポーツは積極的な休息であり、人気の高い学科でもある。だが、体育科目の成績が悪いと、退学させられることもある。体育は物理や外国語と同じように重要な科目なのだ。体育の授業に出なくていいのは、健康上の理由でそれを免除されている者だけだ。具体的な数字を挙げよう。昼間部の学生一万一二八名のうち九八四一名が日常的にスポーツをやっており、そのうちの半数はさらに29種目ある部活動の何らかに参加している。コーチたちはみな高い資格を持っており、そのうちの多くはソ連功労コーチあるいはグルジア共和国功労コーチの名誉称号を受けている。スポーツと無縁な日は1日もない。

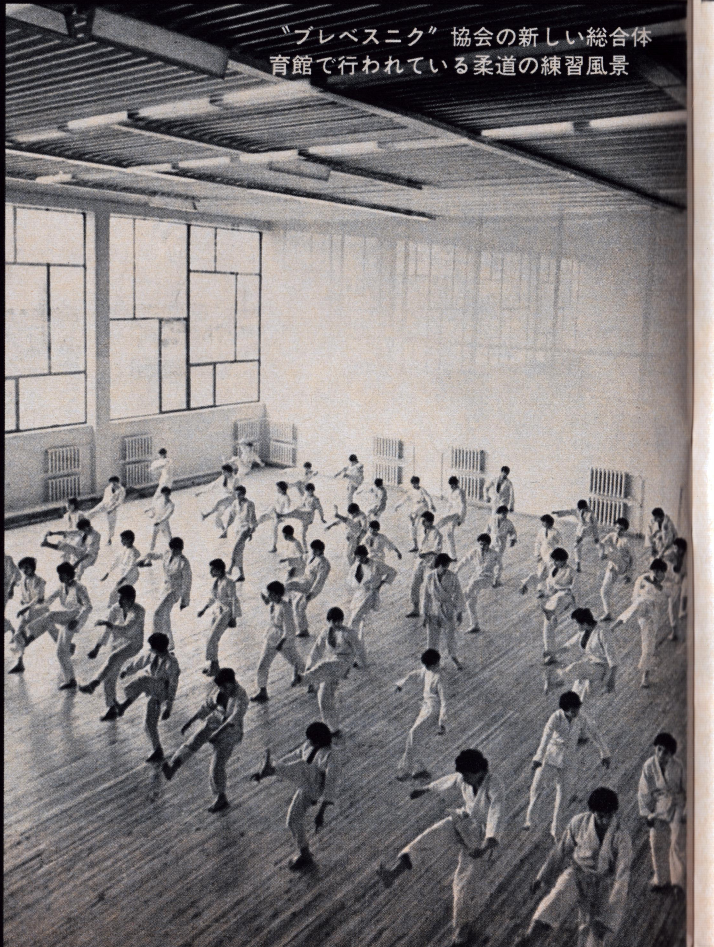


◀トビリシ大学の校舎内

朝は寮での体操、昼間は大学での本格的な体操、夜はクラブ活動。私はときどき、いまの学生がうらやましくなる。現在あるものの多くは、15年前にはなかった。最新式の用具や練習条件は文字どおり日に日に改良されている。いま大学では新しい総合校舎が建設中で、そこにはすばらしいスポーツ基地――プール、ホール、演技場、ゲーム広場が設けられる。つまり、トビリシ大学としても、さらに大勢の学生や教師をスポーツに引き入れることができるようになるだけでなく、われわれの施設を外部の希望者全員に開放することもできるようになる。



◀“ブレベスニク”協会のレスリング（グレコローマン）の選手権から



“ブレベスニク”協会の新しい総合体育館で行われている柔道の練習風景

承認番号U85M—5330

ユニバーシアード神戸大会に出場するソ連選手団

—V・シムク〝ブレベスニク〟協会中央評議会第一副議長に聞く

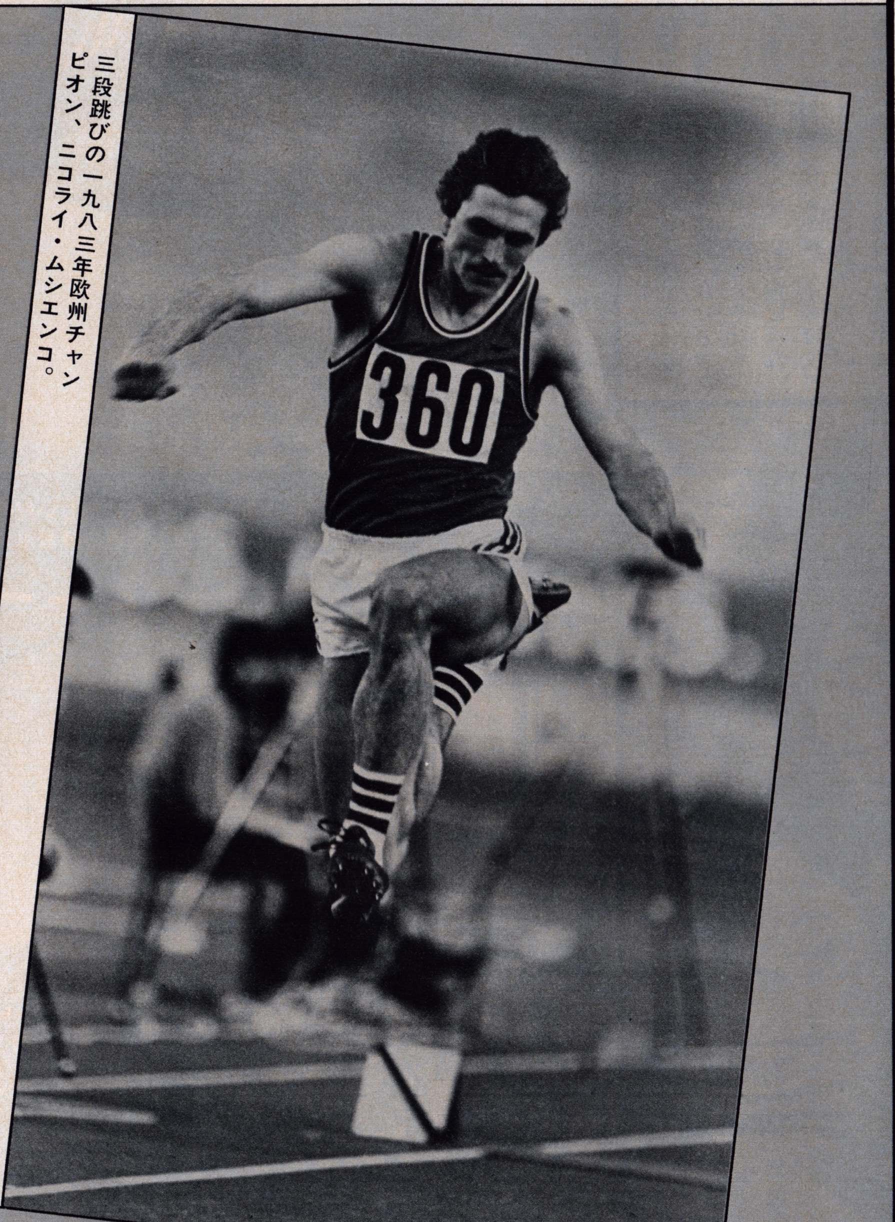
8月24日から神戸市で国際学生スポーツ大会——ユニバーシアード85が開かれる。ソ連を代表してナショナルチームとしてユニバーシアードに参加するのは学生スポーツ協会〝ブレベスニク〟である。

本誌記者M・シラエンとV・メリク＝カラモフが〝ブレベスニク〟協会中央評議会のワレリー・シムク第一副議長にインタビューした。以下はシムク第一副議長の話。

ユニバーシアードは規模の大きさだけでなく、スポーツを通じて相互理解を深め、平和を達成しようというそのモットーもすばらしい。わが協会の選手は日本で行われる競技会にもしばしば出場している。たとえば、最近、東京、大阪その他の都市で試合をしたソ連女子バレーボール・ナショナルチームの主体は学生だった。だが、神戸ユニバーシアードのような大規模な選手団（二〇〇人以上）が日本へ行くのは初めてだ。

以前、ソ連にはいくつかの学生スポーツ団体があった。医学生のスポーツ協会〝メーディク（医学者）〟、教育大学の学生の〝ウチーチェリ（教師）〟、技術系学生の〝ナウカ（科学）〟その他がそれだ。だが、そのような〝縄張り主義〟的な区分は、学生の間で大衆的な体育・保健活動、スポーツ活動を有効に展開し、全国の学生が参加する全ソ・スポーツ競技会を開催するのに不便だった。そこで一九五七年に〝ブレベスニク〟が結成された。

その成果は、一九八四年の全ソ夏季学生競技大会を例に取れば分かるだろう。すべての段階を含めると、この競技会には全国の約八〇〇の大学から約一五〇万人が参加した。しかも参加者の3/4はさまざまなランクのノルマを果たし、資格のある、全面的に発達したスポーツマンであることを



三段跳びの一九八三年欧州チャンピオン、ニコライ・ムシエンコ。


ユニバーシアード83の走り高跳びの優勝者、世界記録保持者イーゴリ・パルキン。



400m障害一九八三年世界選手権3位、第8回ソ連諸民族スパルタキアード優勝者アレクサンドル・ハルロフ。



モスクワ五輪400mと400mリレーの優勝者、一九八三年世界チャンピオン、ソ連功労スポーツマスター、ビクトル・マルキン。

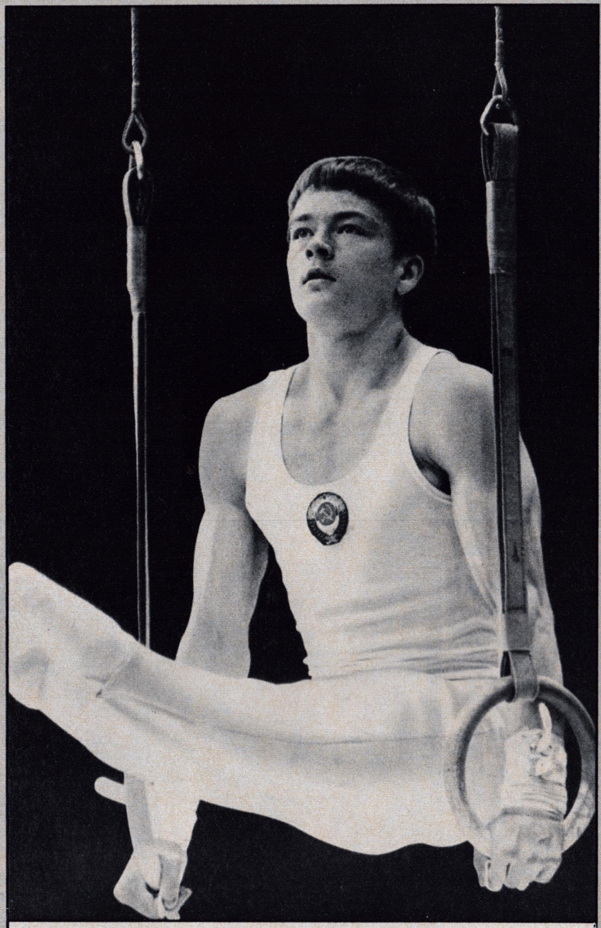
示した。

わが協会の主要な課題は、記録を立てることではなく、学生スポーツに大衆性を保証し、学生たちを健康で肉体的にしっかりした人間に育てることである。そのために、労働組合基金からかなりの額の資金が支出されている。これらの資金はスポーツ施設、健康増進キャンプ、観光基地の建設やコーチの賃金その他に使われる。

〃ブレベスニク〃のスポーツ施設はいまやかなり充実しており、スタジアム49、プール91、体育館一七〇〇以上、スキー基地三五〇、射場三三〇〇以上、無数のゲーム広場その他多くの施設を持っている。これによって協会では53種目のスポーツが可能になっている。学生に最も人気が高いのは陸上競技（約一二三万人）、スキー（一五万七〇〇〇人）、バレーボール（一二万五〇〇〇人）である。〃ブレベスニク〃協会全体では三〇〇万人の学生が恒常的に体育、スポーツ、ツーリズムにたずさわっている。〃ブレベスニク〃協会の学生たちは用具を利用



体操の一九八五年欧州選手権個人総合優勝、一九八三年世界選手権個人総合優勝、ソ連功労スポーツマスター、ドミトリー・ビロゼルチェフ。



体操の1984年ソ連選手権個人総合優勝、ソ連功労スポーツマスター、ウラジーミル・アルチョモフ。

し、スポーツ基地で休息し、教師やコーチの指導を受けるために、ほんのわずかの会費——年間三〇コペイカ（約一〇〇円）を払うだけでいい。

〃ブレベスニク〃協会は創設の当初から、ソビエト・スポーツにおいて主導的な地位を占めてきた。女子体操のラリサ・ラチニナ、短距離走のワレリー・ボルゾフ、女子スピードスケートのリジア・スコブリコワ、走り高跳びのワレリー・ブルメル、レスリングのアレクサンドル・メドベージ、チェスのアナトリー・カルポフ、女子体操のリュドミラ・ツリシチェワその他多くの大選手がこの協会から巣立った。〃ブレベスニク〃協会は陸上、体操、バレーボール、ハンドボール、水泳、水球、スケート、ソリ競技ではわが国でも名門と見なされている。〃ブレベスニク〃協会所属の選手が1年間に一〇〇以上のソ連選手権金メダルを獲得することもある。一九八〇年のモスクワ五輪ではソ連ナショナルチームに加わって、ソ連の学生選手が12種目で金メダルを取っている。



体操の一九八一年世界選手権個人総合優勝、一九八二年ワールドカップ優勝、ソ連功労スポーツマスター、オリガ・ビチェロワ。



体操の一九八三年世界選手権個人総合優勝、第8回ソ連諸民族スパルタキアード個人総合優勝のナタリア・ユルチェンコ。

〝プレベスニク〟協会は30カ国の学生スポーツ協会と緊密な結びつきを持っており、国際大学スポーツ連盟（FISU）の最も活発な一員である。

ソ連学生ナショナルチームはユニバーシアードに——夏季大会も冬季大会も——欠かさず参加しており、つねにいい成績を収めている。モスクワ大会、ベオグラード大会、ソフィア大会、メキシコ大会、ブカレスト大会でもそのことが実証された。だが、最も大きな勝利を収めたのはカナダのエドモントンで開かれたユニバーシアード83で、ソ連は金メダル59、銀メダル29、銅メダル27を獲得して、主なライバルである米国（獲得したメダルは金12、銀22、銅20）に大きな差をつけた。

だが、もちろん、過去の成功にばかり頼っているわけには行かない。だから神戸大会のために、極めて入念な準備が行われている。われわれは日本の関係者がこの大会の成功のためにあらゆる条件を作り出す努力をしており、新しい立派な施設を建設し、参加選手の生活と休息のために配慮していることを知っている。こうした努力と日本の観衆の大きな関心が報われるようなすばらしい大会になることを希望する。

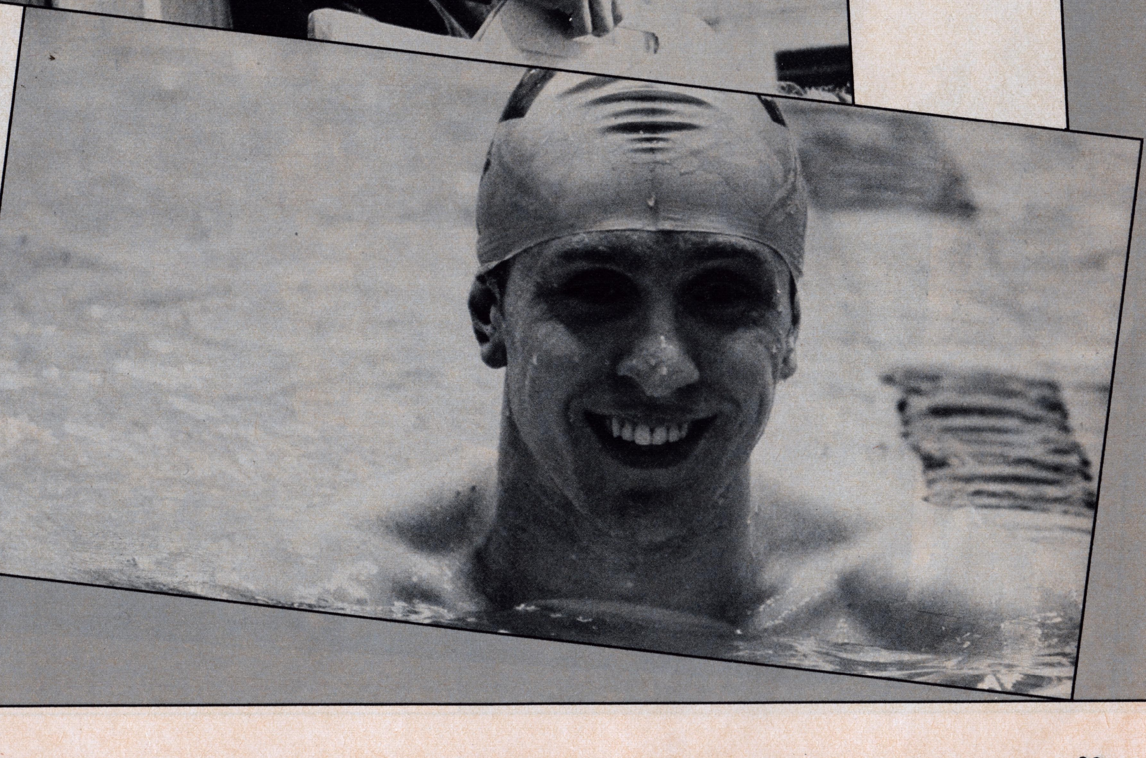
ソ連チームは11の全競技分野に出場する。ただ、バレーボールは男子しか出場しない。われわれは神戸大会で争われる一一五の金メダルのうち約30を獲得することを目標にしている。この目標が達成されれば、メダル最多獲得国になれるだろう。

われわれは神戸大会にこれまでいちばん多い一二〇カ国のチームの参加が予定されていることを知っている。メダル争いは激しいものになるだろう。米国はエドモントン大会での雪辱を期しているにちがいない。エドモントンでは米国が得意とする水泳でほとんどすべての金メダルをソ連に奪われたのだから。

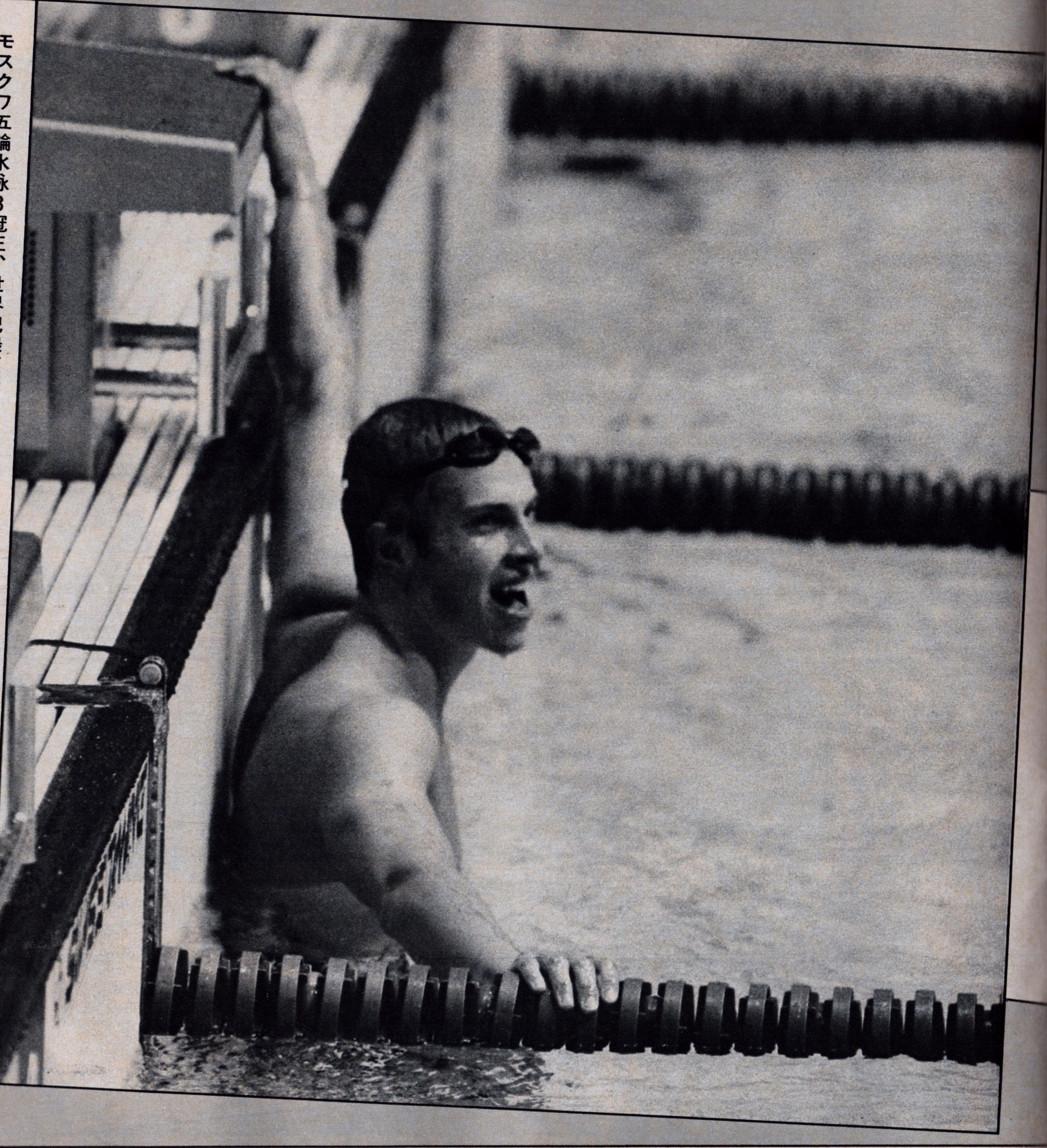
いまソ連の水泳チームではモスクワ五輪3冠王で世界記録保持者のウラジーミル・サリニコフ、前回の欧州選手権バタフライで優勝のアレクセイ・マルコフスキー、ソ連記録保持者で「友好84」国際ス



100m平泳ぎ欧州記録保持者
ドミトリー・ボルコフ



バタフライ欧州チャンピオン、
アレクセイ・マルコフスキー。



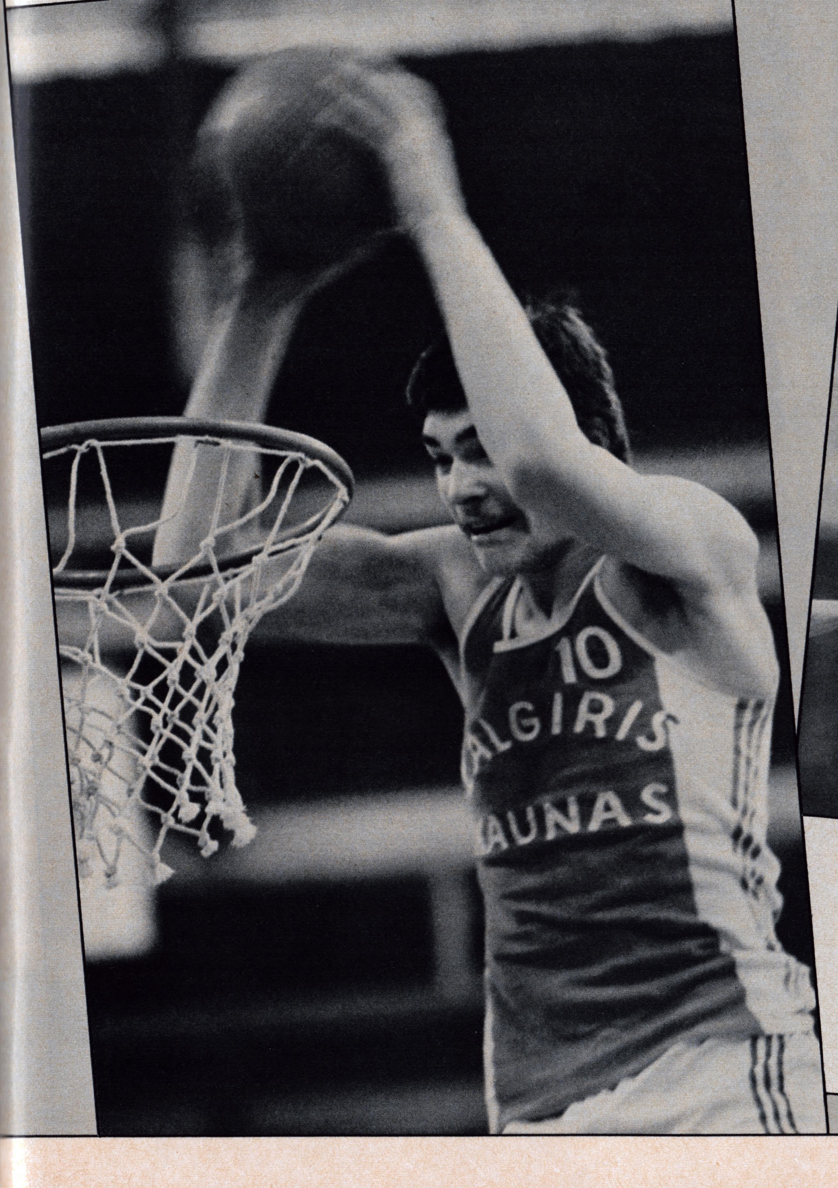
モスクワ五輪水泳3冠王、世界記録更新
19回のウラジーミル・サリニコフ。

ポーツ大会女子平泳ぎ一〇〇m優勝者ラリサ・ベロコニ、背泳ぎ二〇〇m世界記録保持者イーゴリ・ポリャンスキー、平泳ぎ一〇〇m欧州記録保持者で「友好84」優勝者ドミトリー・ボルコフのような強豪が大会に向けて準備している。

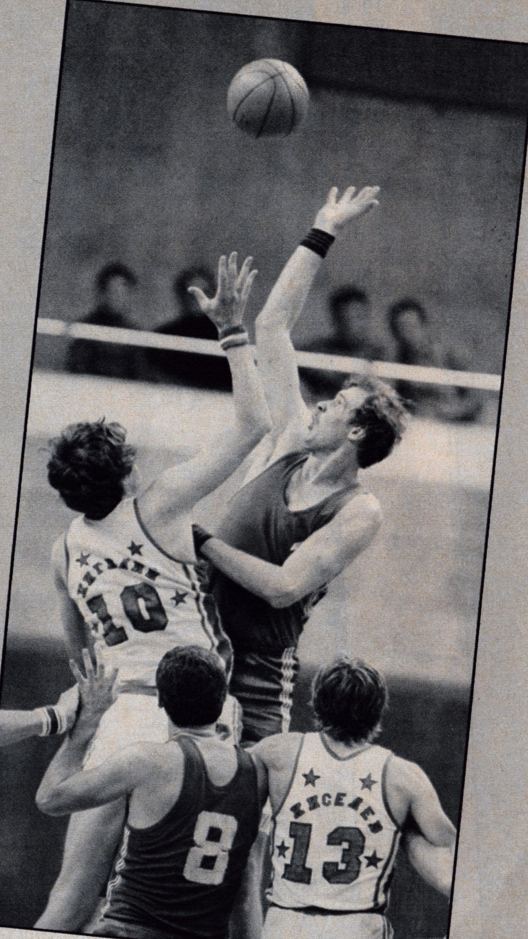
その他の種目にも有力選手が出場する。男子バスケットボール・チームはソ連ナショナルチームのコーチ、アレクサンドル・ゴメリスキーの特訓を受けている。ゴメリスキー・コーチは、今年6月、ドイツ連邦共和国で行われた欧州選手権で金メダルを獲得したソ連チームのアルビダス・サボニス、アレクサンドル・ベロステンヌイのような名選手を学生チームに招いた。女子バスケットボール・チームを指導しているのは、やはりソ連ナショナルチームのコーチ、ワジム・カプラノフで、バレーボール・チームはビャチェスラフ・プラトノフが指導している。プラトノフ・コーチが率いるナショナルチームは8シーズン、公式戦で負け知らずである。陸上チームにも有力選手が少なくない。たとえば、モスクワ五輪四〇〇m優勝者ビクトル・マルキン、ユニバーシアード83の四〇〇m障害の優勝者アレクサンドル・ハルロフ、ユニバーシアード83の走り高跳びの優勝者ニコライ・パクリン、三段跳びの強豪ニコライ・ムシエンコ、女子四〇〇m障害世界チャンピオンのエカテリナ・グルーニなどがそれである。

サッカー・チームはソ連選手権最高リーグの各クラブの選手で編成されている。体操にはドミトリー・ビロゼルチェフ、ユーリー・コロリョフ、ウラジーミル・アルチョモフ、ナタリア・ユルチェンコ、オリガ・ビチェロワといった世界チャンピオン、欧州チャンピオン、ソ連チャンピオンが出場する。

このような強力な選手団を編成することができたのは、ソ連の有力なスポーツ選手の多くが大学で学んでいるからだ。神戸ユニバーシアードが世界学生スポーツをいっそう発展させるための新たな刺激になることを確信している。



バスケットボール・ソ連ナショナルチームのセンター、アルビダス・サボニス。



バスケットボール・ソ連ナショナルチームのキャプテン、アレクサンドル・ベロステンヌイ（ジャンプ右）



フェンシング（サーブル）のアンドレイ・アリシャン



「友好'84」国際スポーツ大会の柔道78kg以下級で優勝したユーリー・メルクロフ

ヘルシンキ全欧会議から10年

緊張緩和の時代へかえることは必要であり、可能である

――全欧安保・協力会議10周年に寄せて

政治評論員 ウラドレン・クズネツォフ

政治的に協力し合っていくことは東西関係の核心と言うべきものである。こういう立場から10年前に調印された全欧安保・協力会議の最終文書の意義を評価するなら、この文書はまさに平和共存憲章、われわれの核ミサイル・宇宙時代における諸国の行動の模範といえよう。

最終文書は社会主義世界と資本主義世界の相互関係の歴史的経験――今後増やしていかねばならない肯定的な経験も、そして将来への反省材料となる否定的な経験も、併せて取り入れた。

全欧会議の開催と最終文書の調印は、戦後における欧州諸国、米国、カナダの大規模な集団行動であった。この集団行動は、戦時中の連合国の周知の共同決定や、ヒトラー・ファシズムに勝利した直後採択された決定を踏まえたものだった。ヤルタ会談で採択された「解放された欧州に関する宣言」やポツダム会談の諸決定には、ヘルシンキ全欧会議の最終文書の中で発展させられた理念が含まれていた。ソ連は建国当初からこの理念を守り通している。

その理念とは次のようなものである。

――社会・経済体制やイデオロギー体制のいかんにかかわらず、すべての国々の平和共存と協力

――内政問題の解決や国内法の制定のさいの各国の完全な主権

――共同の努力によって保障される平等の集団安全

――軍事対立のレベルを引き下げ、最終的には全面完全軍縮を達成すること。

全欧会議は、幾世紀にわたって、〝争いのたね〟や紛争の原因となってきた欧州の国境が、不可侵であり最終的なものであることを承認したほか、必要とされていた第2次世界大戦の政治的、国際法的結果を集団で総括した。会議は、力の立場、対決の立場に立つ政策が百害あって益のないことや、〝冷戦〟が破滅を招くことを確認した。欧州史上始めて諸国間の平和的な、平等な、実り多い関係の諸原則が、万国共通の義務的原則として明確に定式化され、宣言された。会議参加者たちは、「軍事的対立を弱め、軍縮を促進すること」を目的とする友好的な措置を定める意向を宣言したうえ、政治的緊張緩和と軍事的緊張緩和とが客観的につながっていることを認めた。さらに、この会議の成果は全世界に影響を及ぼした。欧州大陸の経験は他の大陸でも利用することができるからである。

緊張緩和の味方と敵

最終文書の理念、原則、勧告の具体化や政治的緊張緩和と軍事的緊張緩和の具体化は、欧州の平和を真に強固な、安定した、永続的なものにするに違いないあらゆるもののかなめである。ソ連は、このことを会議終了後直ちに他の会議参加国に呼びかけた。ヘルシンキの総括文書に定められた諸原則は、ソ連憲法に盛り込まれ、ソ連の対外活動のおきてになっている。ソ連は政治的緊張緩和を軍事的緊張緩和の措置で補強するための幅広い数々の平和愛好提案を行った。

しかし西側、特に米国は全く反対の道を歩んだ。

いつから、だれのせいで欧州情勢が悪化し始めたかをはっきり証明している客観的な資料がある。

全欧会議が終わった1年後の一九七六年にはやくも、最終文書に調印したフォード米大統領は、〝デタント〟という用語をもう使わないと声明した。

同年末、米国議会の下院は「米国と米国の同盟諸国はヘルシンキ会議の最終文書を自分の武器として使うつもりである」との報告書を大統領に送った。

一九七七年、カーター大統領は欧州駐留の米軍に中性子爆弾を装備するつもりであると発表した。

一九七八年、NATOは米国政府の強い要求により毎年軍事費を3％増やすことを決定した。

同年、同じ米国政府の強い要求によりNATOの軍備増強15ヵ年計画が採択された。

一九七九年、ホワイトハウスは調印ずみのSALTⅡ条約を批准のために上院に提出することを拒否した。

一九七九年、ワシントンは核ミサイルの〝軍備補充〟を決定することに成功した。

米国のせいで国際情勢は八〇年代にも悪化し続けた。ここに事実を列挙してみよう。

一九八〇年、欧州大陸での〝限定〟核戦争構想が大統領指令59号の形をとった。

一九八二年、レーガン大統領は英国議会で演説し、反ソ〝十字軍〟を呼びかけた。

同年、ワシントンは全欧の通商・経済協力に反対し、同盟諸国に西シベリア＝西欧間ガスパイプライン用設備の対ソ供給を強引にやめさせようとした。

一九八三年、〝パーシング2〟と巡航ミサイルの西欧配備が始まった。

一九八四年、NATO軍事委員会はワルシャワ条約諸国の〝第二陣〟に非核攻撃を加えるドクトリンを承認した。

同年、西欧同盟に加盟しているNATO諸国は、戦略爆撃機や長距離ミサイルの西独での生産禁止を解除した。

事実はこのようなものである。これらの事実のすべてが、核紛争の脅威をはらんだ、現在の不安定な国際情勢をつくり出したのである。

いかに安全を達成すべきか?

いま欧州に最も必要なものは何か? 最小限必要なのは核兵器の今後の蓄積をやめることであり、最大限必要なのは、欧州大陸での核対立のレベルをゼロに引き下げることである。従って最終文書にも定められている軍事的緊張緩和への移行が必要だ。

ソ連はこのような移行に賛成である。わが国は欧州の軍事的緊張緩和の包括的な建設的計画を発表した。この計画は次のことを規定している。

――中距離核兵器や戦術核兵器からの完全な解放

――化学兵器からの解放

――ワルシャワ条約とNATOによる軍事費の削減

――欧州大陸のさまざまな地域に非核地帯をつくること

――核兵器を最初に使用しないという諸国の義務（ソ連は周知のようにすでに一九八二年6月15日にこの義務を一方的に引き受けた）

――軍事力不行使・平和関係維持条約の締結

――ウィーンでの中欧相互兵力軍備削減交渉を成功裏に終わらせること

――一連の政治的、軍事的信頼醸成措置をストックホルム会議で採択すること。

欧州の安全への道にはワシントン、NATOのいばらの刺がまかれている。にもかかわらずヘルシンキ全欧会議後のプロセスは中断されていない。現在のように国際問題が錯綜し、不安定な情況のもとでは、このプロセスは恐らく東西関係をつなぐ最も強固な政治的環となるだろう。

全欧会議後のプロセスを阻止できるかのように思っている大西洋のかなたの連中は間違っており、希望を現実と感違いしている。欧州ではこれに関して米国の人々とは違った意見がある。P・ベイリネン・フィンランド外相の意見によれば、このプロセスは生命力を発揮し、近年の国際政治の変動に耐えた。このプロセスの輝きがなかったら、国際生活の地平線は現在よりももっと暗くなろう、と同外相は考えている。R・デュマ・フランス外相も全欧会議のプロセスにはダイナミックな勢いがあることを認めている。欧州の多くの指導者たちは、全欧会議後に出てきた可能性は決して汲み尽くされていない、と考えている。その可能性は東西双方の忠実な緊張緩和支持者たちの共同の努力によって実現することができる。アンドレオッチ・イタリア外相は、われわれはヘルシンキ全欧会議から始まったプロセスの枠内とストックホルム会議の枠内で多くのことをなしとげることができる、と考えている。

東西の共同の努力で植え付けられた全欧の木は、生命力のたくましい強固な根を持っている。だからこの木はこんご大きく成長できる。

ヘルシンキ全欧会議から10年



一九七五年夏、ヘルシンキで開催された全欧安保・協力会議

「われわれは、デタントのプロセスを復活させることを断固支持している。だがそのことは、七〇年代に達成されたことへの単純な復帰を意味してはいない。はるかに大きなことをめざさなければならない。デタントは、われわれの考えでは、政治の最終的な目標ではない。デタントは不可欠なものだが、兵器が山積みになった世界から確実で包括的な国際安全体制への過渡期にすぎない」

（一九八五年5月8日の戦勝40周年記念式典におけるM・S・ゴルバチョフの報告から）

全欧安保・協力会議の最終文書（一九七五年8月1日）から

1　参加国の相互関係を律する諸原則に関する宣言（抜粋）

参加国は相互の主権平等と独自性を尊重し、ならびに、とくに法律上の平等、領土保全、自由と政治的独立の各国の権利を含む主権に固有の、かつこれに包含されるすべての権利を尊重する。参加国の各々が自らの政治、社会、経済、文化の制度を自由に選び、発展させる互いの権利ならびにその法律、規則を制定する権利を尊重する。

すべての参加国は国際法の枠内で平等な権利と義務を有する……

参加国は相互間の関係および国際関係一般において、国家の領土保全または政治的独立に向けられ、もしくは、他のなんらかの形で国連の目的および本宣言と両立しない、武力の行使または武力による威嚇を控える……

参加国は相互に、すべての相互の国境ならびにすべての欧州国家の国境を侵すことができないものとみなし、従って現在および将来にわたって、これらの国境に対するあらゆる侵略を控える……

参加国は人間に固有の尊厳に由来し、人間の自由かつ完全な発展に不可欠である市民的、政治的、経済的、社会的、文化的およびその他の諸権利ならびに自由の効果的な行使を促進し、奨励する……

参加国は一般に認められた国際法の原則や規定による義務であろうと、自国が加盟した国際法に合致する条約、その他の協定から生じる義務であるとを問わず、国際法に従って負う義務を誠実に履行しなければならない……

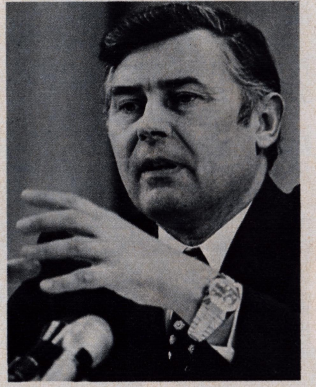
2　信頼増進措置と安全保障および軍縮の若干の側面（抜粋）

参加国は軍事的対決を減少させ、欧州における政治的緊張緩和を補い、参加国の安全強化を目的とする軍縮を促進させることをねらいとする努力に対する全参加国の関心を認める。参加国は厳格かつ効果的な国際管理のもとでの全面完全軍縮という究極目標の達成をめざし、規模においても内容においても前進となり、しかも全世界の平和と安全の強化につながるようなこれらの分野の効果的な措置をとる必要があることを確信する。

10年を振り返って

ヘルシンキの全欧安保・協力会議（一九七五年8月）から10年たった。この10年間の若干の成果について各省庁の指導者や文化人の意見を紹介しよう。

ヘルシンキ精神で協力し合うソ連と西側



ソ連国家科学技術委員会議長
グリー・マルチュク

全欧安保・協力会議の最終文書の採択に伴って、国際科学技術交流は重要段階を迎えた。一九七〇年代当時、各国は科学技術協力の経験を一歩一歩積み上げていた。ヘルシンキ合意は協力の精神そのものをうち固めた。

さて協力はどのような成果を上げただろうか？　全体として今までの成果は大きかったと言えるが、共同の活動は必ずしも順調にいったわけではなく、いい時も悪い時もあった。さらに西側の若干の先進諸国との科学技術協力の性格や水準もまちまちだった。

過去10年間、とくに前半の5年間は、協力が規模、期間ともに大きく伸びた年月であり、協力の国際法的基盤がしっかりと構築された時期であった。

一九七〇年代にソ連が西側諸国と結んだ科学技術、工業分野の政府間協定は80件以上にのぼり、個々の商社と組織が結んだ産業部門別の協定は三〇〇件以上にのぼった。また西側の20カ国との間に長期協力プログラムが締結された。これらのプログラムは現代の科学・生産活動の多くの分野を包含しており、まず、第一の例は宇宙と世界の海洋の観測調査、環境保全、天然資源の合理的利用といったグローバルな問題の解決での共同研究調査である。

ソ連と西側諸国は、電力産業、計装工業、電子工業と計算機製造工業、軽工業と食品工業、機械工業と農業、化学工業と石油化学工業、採油業、ガス産業と石炭産業、建設と運輸、その他多くの科学技術部門、物質的生産部門で協力し合っている。

現代の最も重要なグローバルな科学・実践問題や科学技術、生産の主導的部門で、われわれは米国、日本、西独、フランス、英国、イタリア、スイス、ベネルックス諸国、スカンジナビア諸国、カナダなどの西側のすべての主だった国々と協力している。

いま協力の強固な法的土台となっている政府間協定や産業部門別の協定に基づいて、数多くの共同機関――50以上の政府間合同委員会、二五〇の共同の部門別作業グループがつくられている。

安定した通商関係



ソ連貿易次官
ゲンナジー・ジュラブリョフ

戦後数年間のわれわれの取引相手は10カ国だったが、いまは一四五カ国と取引している。一九八五年までの5カ年計画の4年間にソ連の貿易額は48％増え、年平均伸び率はずっと10％以上を維持している。一九八四年の貿易総額は一三九七億ルーブルであった。

デタントの時代に西側諸国との間に確固たる条約・法的基盤が築かれ、その基盤はわれわれの通商関係の安定性や通商関係拡大の安定した傾向の基盤になった。西側諸国との交流形態もますます多様になっている。

ヘルシンキ会議後の10年間に、ソ連は西欧諸国と約50件の通商、経済協定を結んだ。その中には大多数の西欧諸国との間で結ばれた期限10年またはそれ以上の期間の経済、工業、科学技術協力プログラムがある。

ソ連の対資本主義諸国貿易における工業製品の比率は30％に達し、四〇〇億ルーブルを超えた。ヘルシンキ会議参加の国々との年間貿易額の伸びは次のとおり（単位10億ルーブル）。

	一九八三年	一九八四年
西独	七・〇	七・五
イタリア	四・四	四・五
フランス	四・一	四・二
米国	一・九	三・一
英国	一・八	二・二

互恵の通商、科学技術協力の発展で、ますます大きな役割を演じ始めているのは、ほとんどすべての西欧諸国との間につくられた政府間合同委員会である。

欧州の先進資本主義諸国との間ですでに締結されたか、交渉中の契約を考慮すると、ことしのソ連の対先進資本主義諸国貿易の取引額はさらに増えるものとみてよい。

「今日のソ連邦」昭和60年8月15日号（第28巻・第16号・通巻637号）付録

ドニエプロペトロフスクにおけるM・S・ゴルバチョフの演説要旨

（1985年6月26日）

「今日のソ連邦」1985年第16号付録

渉に貿易を利用しようとする試みは、成功の見込みのないものである。われわれはそんな貿易を必要としない。それがなくてもやっていけるのだ。

われわれは軍拡競争の停止ばかりでなく、全面完全軍縮にいたるまでのその最も大幅な削減についても合意する用意をもっている。ご承知の通り、いまわれわれはジュネーブで米国と交渉を行っている。その課題は地上での軍拡競争を停止させ、その宇宙への波及を許さないことであると、ソ連指導部は理解している。われわれが交渉に応じたのは、これらの目的を実際に達成するためである。しかし、あらゆる点から判断して、米政権とそれが奉仕している軍産複合体は、まさにこれを望んでいない。真剣な合意の達成は、どうやら彼らの計画には入っていないようだ。彼らは社会主義諸国に対する優位を獲得し、これら諸国に自分の意思を押しつけることを期待して、次から次へと新しい種類の大量絶滅兵器を強引に開発する膨大な計画を実現し続けている。

米国はジュネーブで軍拡競争の縮小に関する真剣な提案を出さなかったばかりか、逆にこのような縮小を不可能にする手を打っている。私が言うのは、いわゆる〝スターウォーズ〟計画、攻撃用宇宙兵器開発計画のことである。それが〝防衛的〟性格をもつなどという言説は、もちろん、ナイーブな人のためのおとぎ話である。その狙いは、ソ連の戦略兵器を麻痺させ、報復を受けることなくわが国に核攻撃を加える可能性を確保しようとするところにある。

ここに問題の本質があり、われわれはそれを考慮しないわけにはいかない。宇宙からの現実の脅威にさらされた場合、ソ連は効果的にこれに対抗する方法を見いだすだろう。全くはっきりと言っておくが、何人もこれに疑念をいだかないでほしい。さしあたりはっきりしていることはただ一つ――米国の宇宙軍事化計画は、ジュネーブでの相応の合意達成への道を完全にふさぐ障壁の役割を演じている。

米政府はその軍国主義政策によって、人類に対する重大な責任を背負い込んでいる。付け加えることができるが、もし米政府がもっと理性的な立場をとることを決断するなら、双方が核兵器のストックを大々的に、真に抜本的に削減することについての相互に受けいれ可能な協定が問題になってくるだろう。この兵器の完全廃棄への道、全世界諸国民の宿願である核戦争の脅威除去への道が開けるだろう。

しかし、ジュネーブ交渉の相手側が今の方針をとり続け、代表団の会議で時間を引き延ばし、交渉の対象となっている問題の解決を回避し、この時間を利用して、宇宙、地上、海上での自己の軍事計画の強行をはかるならば、われわれとしても状況を改めて評価せざるをえなくなることは、言うまでもない。われわれは、またしても交渉を人目をそらすために、米国の戦略的優位と世界支配をめざす方針の確保を目的とする軍備増強をおおい隠すために利用するのを許すことはできない。こういった構想に対するわれわれの反撃は、全世界の真に平和を愛好する勢力に支持されるだろうし、ソ連国民はわれわれを支持していると確信する。

『今日のソ連邦』一九八五年8月15日号付録
発行人　加藤宣幸
編　集　ソ連大使館広報部（郵便番号141・東京都品川区東五反田3―9―13・電話03―447―3536）
印刷・発行所　（株）新時代社（郵便番号101・東京都千代田区神田神保町1―44・電話03―293―4881）

西欧のパートナーとの交流の拡大

ソ連著作権協会会長
コンスタンチン・ドルゴフ



一九七四年にソ連著作権協会（VAAP）は、西欧諸国のパートナーと一四九件の著作権の輸出入契約を結んだ。ヘルシンキ会議の最終文書の中ですべての参加国は「著作権や文化財の普及に関する国際協定や取り決めを十分に効果的に適用するよう努力する」義務を負ったが、この最終文書の締結1年後の一九七六年には、著作権の輸出入契約件数は五二四に増えた。

そのうちとくに挙げておきたいのは、VAAPと米国のマクミラン出版社が結んだ期限10年のソ連のSFシリーズを英語で出版する基本契約である。ソ連の主なSF作家の名作一二〇編以上を含む20巻シリーズはすでに完結している。

フィンランドの出版社との協力も成果を上げており、8社が「ソビエト文学文庫」の刊行に参加している。「現代のソビエト文学」シリーズ15巻も、フランスのメシドル出版社から順次出版されており、すでに4巻が出ている。

国際図書見本市はVAAPと各国の出版社を直接結ぶ特殊な生きた形態である。こうした見本市の一つ――モスクワ見本市の生みの親は、ヘルシンキ会議であると言えよう。今秋開かれる第5回モスクワ見本市は、必ずや国際図書交流の拡大に重要な貢献をするだろう。

建設的な交流をめざすソ連の大学

アカデミー会員、ロシア連邦共和国高等・中等専門教育相
イワン・オブラスツォフ



いまソ連に留学している外国の学生、研究生、実習生の数は、一九七五年のそれの約2倍で、ざっと一〇万人である。ロシア連邦共和国についてみると、一一五ヵ国約一万五〇〇〇人（社会主義諸国から八〇〇〇人以上、発展途上諸国から六四〇〇人、欧州の資本主義諸国から約二〇〇人）が、ロシア連邦共和国の高等・中等専門教育省の62の大学で教育を受けている。

ヘルシンキ会議後外国の研究生、実習生の留学はさらに増え、この10年間に45％増えた。

同時にソ連から外国の大学へ行く実習生、学生、研究生の数も1・5倍増えた。たとえば一九七五年にわが省の大学が外国に送り出した留学生は約二〇〇人であったが、いまは三〇〇人余りで、そのうちの半数は資本主義諸国の大学で学んでいる。そのほかわが省の五つの大学の夏期ロシア語講習には先進資本主義諸国の市民六〇〇人以上が参加している。

もしわれわれのパートナー側が交流を妨害しなかったなら、こうした留学生の数はもっと増えていただろう。たとえばフランスその他の数ヵ国は実習生の交換を拒否している。

最も効果的な形態の一つは、西側諸国の12の大学との協力である。一九八四―八五年だけで4件のこうした協定が結ばれた〔モスクワ工作機械・工具大学と西ベルリン大学、レニングラード工科大学とハノーバー工科大学（西独）、レニングラード電機大学とストックホルム（スウェーデン）の高等技術学校、レニングラード大学とバルセロナ（スペイン）の大学〕。

ソ連の大学の主だった学者は、日本を含む西側諸国の学者と一緒に、さまざまな知識部門の二国間ゼミやシンポジウムに参加している。

過去10年間にソ連と西側の学者の多様で効率の高い協力形態がつくられた。大学間の交流や大学術研究センター、たとえば合同核研究所の活動、ソユーズ＝アポロ計画の実現などは、こうした協力のよい例である。ソ連は世界の学者の創造的接触に賛成である。情報問題の重要性とグローバル性を考慮し、私は世界各国の学者が平和に仲よく協力し合って課題を解決する大学術センターがほしいと思っている。

映画は世界の共通語



ソ連国家映画委員会議長
フィリップ・エルマシ

最終文書第三議題で参加国は、権限のある組織や会社が他の参加国の文芸映画および記録映画の選定・貸し付けをもっと広範に行うよう奨励し、映画週間や映画祭など非商業的催しを頻繁に持つよう助成する義務を負った。

ヘルシンキ後、われわれはフランス、イタリアの映画人との交流を活発にし、フィンランド、スペイン、ギリシャと協定を結んだ。ソ連での外国映画週間の開催や外国映画の新作上映、そして外国でのソ連映画週間の開催とソ連映画の新作上映は、ヘルシンキのあと初めて計画的・系統的性格を持つようになったと思う。モスクワ国際映画祭にも外国の代表的作品が参加するようになった。

映画の共同制作の意義を特に強調しておきたい。合作映画は過去にもつくられているが。体系的な発展を見たのはここ10年のことだ。一九七〇年代後半だけでもわれわれは40本の長編映画を外国と共同制作しており、そのうち24本は社会主義諸国と、16本は資本主義諸国との共同制作である。複数の国との合作映画もどんどん作られるようになっている。その中には反ファシズム映画『テヘラン43』(フランス、スイスとの合作)、『崖』(ドイツ連邦共和国、西ベルリンと協力)、ロシアのバレリーナ、アンナ・パブロワの伝記映画(英国との合作、ドイツ民主共和国、キューバ、フランス協力)、ジョン・リードを描いた『赤い鐘』(メキシコとの合作、イタリア協力)などがある。スペインのホアン＝アントニオ・バルデム監督はゲオルギー・ジミトロフを主人公にした『警告』(ブルガリア、ソ連、ドイツ民主共和国合作)を撮った。

映画制作の技術とスタッフを提供する分野での西側パートナーとの協力も進んでいる。米国のTV用映画『ピョートル大帝』への制作協力は大きなプロジェクトだ。われわれが協力することによって、ロシア史の重要な事件を歴史的信ぴょう性をもって示すことが出来よう。

レフ・クリジャノフ監督を中心に大制作集団が取り組んでいる大作、映画叙事詩『20世紀』はわれわれの制作計画の中で特別の位置を占めている。この一大映画叙事詩の課題は、人類史上に新たな社会主義時代の開始を刻んだこの激動の世紀を再現することにある。もちろんこの課題の完全な解決には、広い国際協力が不可欠だ。

マスコミは平和の事業に尽くさねばならぬ



ソ連国家テレビ・ラジオ委員会渉外総局長
レフ・コロリョフ

西側の同業者との協力はここのところずっと増えつづけている。

一九七五年にはソ連国家テレビ・ラジオ委員会のパートナーは資本主義国27カ国の50のTV放送組織だったが、一九八四年にはそれがTV64社、ラジオ42社になった。われわれの協力関係は長期協定と作業議定書によって揺るがないものになっている。協定文書の枠内で一九八四年にはおよそ五〇〇本のソ連TVフィルムが西側に提供され、一方われわれも外国から四二三本のTVフィルムの提供を受けた。

昨年は西側の放送関係者一〇〇〇人余りが、商談、政治家の公式訪問の報道、TV映画や記録映画の撮影、ラジオ番組の制作、研修などで訪ソした。

資本主義国の特派員に対してはソ連から直接TV回線または地上回線を通じて八五六本のルポルタージュを放送する機会が与えられた。

一方ソ連のテレビも、資本主義諸国を含めた諸外国の生活ぶりをソ連の視聴者に広く紹介した。一九八四年には中央テレビを通じてこのような番組二五七三本、時間にすると九六二時間分が放送された。これはまず第一に、ソ連テレビ・ラジオの外国駐在特派員が送って来るフィルム、〝インタービジョン〟(東欧諸国間のTV番組の中継機構)と〝ユーロビジョン〟間の交換によるTV番組、ソビエトTVも予約者になっている巨大な国際的テレビ・エージェント〝VISNEWS〟と〝UNITI〟を通じて配給されるルポルタージュ、西側のいろいろな会社から入手した映画や番組である。

ヘルシンキ後に生まれた最もポピュラーな協力形態は番組の共同撮影だ。例えば、日本のNHKと共同で『シルクロード・ソ連編』と『シベリア鉄道』が撮られた。一九八五年には国家テレビ・ラジオ委員会は、ソ連についてのTV映画五〇〇本以上の制作で西側諸国の撮影班に協力したが、これは一九七五年の約5倍にもなる。

もう一つの興味深い協力形態は、ソ連の政治・社会活動家、軍司令官、作家、ジャーナリスト、学者などが直接西側諸国の放送に出演することである。

宇宙通信回線を使った特別放送〝テレビ対談〟の組織と実行は、資本主義諸国のパートナーとの協力形態の今までとはちょっと変わった新しい例と言えよう。最近の2年間にわれわれは米国の社会団体およびTV会社と10回余りこのような〝TV対談〟を行った。

美術館同士の協力を深めよう



モスクワの国立プーシキン美術館館長、国際美術館評議会副会長
イリーナ・アントノワ

ヘルシンキの全欧安保・協力会議の最終文書が調印されたあとに訪れたデタントは、プーシキン美術館もそのひとつである文化施設にとっては、現実的な内容をもった観念であった。デタントになってからの数年間は、芸術・文化財の交流が大いに発展した時期だった。七〇年代の終わりに国際関係の冷却期がくるまで、あらゆる接触・交流は上昇線をたどる一方だった。オーストラリア、アメリカ、アフリカ、アジア、もちろん欧州と、すべての大陸の博物館、美術館の所蔵品がわが国にきて公開された。

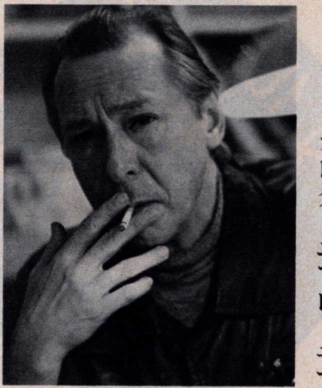
この期間中には新しい形の交流が少なからず起こった。そういう新しい交流のなかには、現代文化の基礎が築かれた20世紀の二〇年代のような、芸術・文化のきわめて重要な発展段階を現在と比較対照して考えさせてくれた催しもあった。私が言っているのは、ソ連とフランスで開催された「モスクワ＝パリ展」のことである。

七〇年代にはツタンカーメン王の墳墓の秘宝展、中世日本彫刻展、メトロポリタン美術館の名画(一〇〇点)展、ミュンヘン・ピナコテーク展、ウィーン美術史美術館などのユニークな美術展がプーシキン美術館で開催された。

美術専門家同士の個人的接触も盛んになった。私たちは世界中の美術館、博物館からやってきた同職の人たちと知り合いになった。プーシキン美術館で開かれた学術会議に多くの外国の同僚たちがはるばるやってきた。私たちの方も外国のシンポジウムや大会に積極的に参加した。プーシキン美術館はレニングラードのエルミタージュ美術館と共同で19世紀の末から20世紀初めのフランス絵画展を催した。この絵画展はインド、フランス、オーストリア、それから米国と日本では数カ所で開催された。昨年はやはりエルミタージュ美術館と共同で日本で印象派の絵画展を開いた。ついこの間もブーシェの絵を数点、日本の絵画展へ送った。

国際美術館評議会の線による美術館職員間の関係もこの10年間に大いに発展した。一九七七年にソ連で評議会の国際大会が開かれ、この種の会議としては出席者の数が初めて一五〇〇人を超えたのは、その一例である。図書の交換も盛んとなり、現在プーシキン美術館は世界の80の美術館・博物館と交換を行っている。

国際演劇交流をもっと盛んに



ソ連人民芸術家、モスクワ芸術座首席演出家
オレグ・エフレーモフ

ヘルシンキ以後文化交流の枠が広がったのは言うまでもない。私はモスクワ芸術座の演出家であるだけでなくまずソ連の演出家だから、私たちの演劇が西側の国の観客からきわめて好評を博していると言えることを、誇りに思う。芸術座が(一九七五年に)ベオグラードのユーゴスラビア・ドラマ劇場で公演したときがその一例である。そのとき上演したのは、ゴーリキーの『最後の人びと』と、G・ボカレフの『製鋼工』の2本だった。一九七六年にはギリシャ、一九八〇年にはドイツ連邦共和国とドイツ民主共和国、一九八四年にはハンガリーで公演を行った。

とくに強い思い出になっているのは、(一九八四年の)オーストリア公演である。ザルツブルグで芸術座はモリエールの『タルチュフ』とチェーホフの有名な『かもめ』を上演し、ウィーンでの公演にはM・シャトロフの『かくて勝利はわれらのもの』を追加上演した。このときの公演は大成功だったが、『かくて勝利はわれらのもの』が政治劇なので、なおさらうれしかった。この成功の陰には、レーニンの遺産や社会主義建設の諸問題に対する大勢の観客の関心があった。

モスクワ芸術座は米国、フィンランドから数回公演の招請を受けたし、日本公演の交渉も現在すすんでいる。ついでに言うと、安部公房の『幽霊はここにいる』が昨年芸術座で上演された。だが、私の見たところでは、現在おこなわれている程度の接触は、いわば大海の一滴みたいなものである。芸術座にも、芸術座以外のソビエトの劇団にも西側の国の観客に見せて驚かせるようなりな芝居がまだたくさんあるのである。ほかの劇団の同僚たちのことも言わないわけにはいかない。モスクワのレーニン・コムソモール劇場はパリで『イオーナ』と『もしかしたら』を上演した。レニングラード・ボリショイ・ドラマ劇場の日本公演(一九八三年)も大成功であった。

私はこんご一番有望な文化交流の形は、演出家や舞台美術家の交流を行って、互いの文化の内容をもっと豊かにする手助けとすることだと考える。ソビエトの創作知識人はヘルシンキで達成された合意を全面的に支持していると、力をこめて言いたい。私たちは、創造的な仕事にたずさわる人たちこそ緊張の緩和と相互理解の強化に大きな寄与をなしうる人間だと考えている。

文化トピックス

ガンチの白い唐草模様

ガンチ彫りは千数百年前からすでに知られている中央アジアの古い装飾技術で、ガンチというのは石膏（40―70％）と粘土を含んだ石状の鉱物を焼いてできる粘着性のある素材のこと。粉末のガンチを水に溶かしたものは乾きが早く、簡単にいろいろな形になる。湿ったガンチは彫りやすく、思いどおりの細工が施せるし、乾燥した面には絵が描ける。なかなか便利な素材なので昔から建物の装飾部の仕上げ用に使われていた。タシケント市内の建物にはこのガンチ彫りが数多く見られ、独特の見事な美をかもし出している。ウズベクやタジクの現代美術家たちも昔の名匠の伝統を引き継ぎいい仕事をしている。

写真はタシケントかんがい・農業機械化大学の内装をするウズベクの若い作家、ジャウトディン・ユスポフ（右）とウマル・タヒロフ。2人は現在もっとも活躍している作家で、地下鉄の駅や劇場、スナックなどのインテリアを手がけている。



工場へ出前コンサート

プロのアーチストの大企業への出前は日常的になりつつある。労働組合や企業の管理部が労働者の余暇の多様化につとめているからだ。例えばこのほど、セルゴ・オルジョニキーゼ記念モスクワ工作機械工場の職場の一つで、中央テレビ・全ソラジオ交響楽団のコンサートが開かれた（写真右）。モスクワ公演中のグルジア共和国タシケント市自動車工場文化会館に本拠をおくアマチュア舞踊アンサンブル“コルヒダ”も工場で出前公演を行った。工場が退けてから行われるこの種のコンサートは労働者の間で大変評判がいい。

写真右上はコンサートの合い間にベテラン労働者にカーネーションを贈る民謡歌手のリュドミラ・ズイキナ。



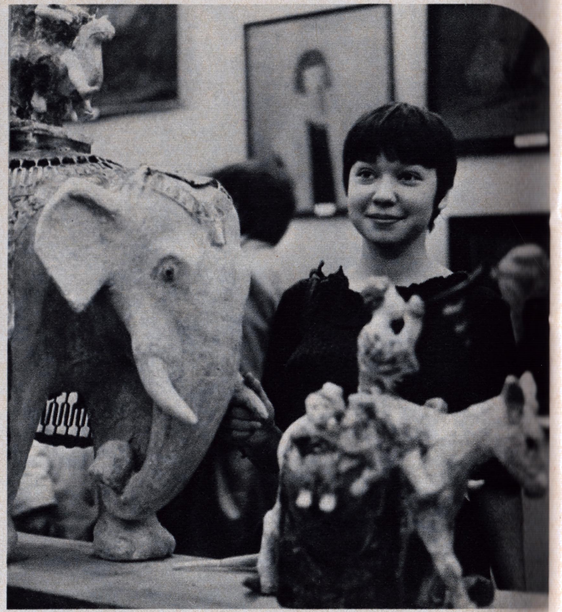


新進美術家の作品展

モスクワの美術家会館で今春、今年度の新進美術家作品展が開催された。出展作品は絵画、素描、グラフィック、彫刻、装飾工芸品、舞台装置図など約1000点。作品の多くはソ連美術家同盟が組織し、補助金を出している若い美術家のための“創作の旅”（創作出張）で制作されたもの。

写真下右は彫刻家アンナ・ミトリャンスカヤとその作品。下左はS・ボルコフ作『ヤウザ門』







西シベリアの大油田地帯で働く

──ボーリングエ ユーリー・スモリーの生活

本誌記者 アロイズ・フィル　カメラ A・グラシチェンコフ

オビ川中流域の沼とタイガ。この地下に膨大な量の石油が埋蔵されている。



コガルイムのヘリポート

西シベリアの北、大河オビの中流の交通困難な沼沢地の針葉樹林と凍土帯で、地質学者たちは世界で最も大きい油田のひとつを探り当てた。その工業的開発がはじまったのは25年前のことだ。

シベリアはその豊かな地下埋蔵資源を簡単に手放してはくれない。石油産業の労働者たちはここでは実に苛酷な自然条件の下で働いている。この人たちの生活ぶりを密着取材するために、本誌のアロイズ・フィル記者とカメラマンのアレクサンドル・グラシチェンコフは西シベリアのスルグート市の北東二五〇kmにあるコガルイムという集落へ向かった。



仕事中のユーリー・スモリー

◀通行困難なオビ川中流域



ボーリング現場で（左がスモリー）

初対面はヘリの機上

ユーリー・スモリー、32歳、ベロルシア人。私たちがたまたま彼と知り合いになったのは、MI8型ヘリの客席であった。西シベリアの石油埋蔵地帯は、道路がまったくない地方とはもう言えないけれども、一番人気のある交通機関はやはりヘリコプターだ。

私たちはスルグートからコガルイムへ飛んだ。スルグートはここ20年間に人口がほぼ10倍になった町で、オビ川流域の石油産業労働者の首都と呼ばれている。スモリーはちょうど、石油増産問題を討議するために開かれた党・経済関係活動家会議に出席したあとスルグートから帰る途中だった。スモリー自身は共産党員でもなく、幹部でもなく、平のボーリング工だ。でも、こういう会議へ招かれたのだから、スモリーが腕のいいボーリング工で、その知識と経験を高く買われている、ということはすぐ察しがつく。

私たちは開閉式の窓のわきに隣り合わせた。空高く飛んでいるヘリの窓際の席から眺めた風景は二度とはお目にかかることがないような眺め



だった。暗緑色、うす緑色、または黄色のだ円形や円の、おだやかで、ほとんど規則正しい模様のじゅうたんが地平線までびっちり敷きつめてあって、そのだ円形と円の中心には空色の点がみえる。湖なのだ。

「ああ、きれいだ」と、私は思わずつぶやいた。

「手のつけようがない沼なんですよ」という言葉がスモリーから返ってきた。

30分過ぎた頃、彼は自分が掘っている掘削井のやぐらをヘリの上から指さした。それからさらに15分過ぎると、かなり殺風景な針葉樹の密林が眼下を通り、そのなかから純白の建物が散在している風景がひらけてきた。そのときスモリーが言った。

「やっとうちに着きました。コガルイムです」

私たちを自宅へ招いてくれたので、翌日、私たちはスモリー家で一日を過ごした。家族は4人。器量よしの奥さんニーナ（30歳）は専門が経済担当のエンジニア。コガルイムの採油管理部の計画課で働いていたが、子供ができたのでいまは専業主婦だ。坊やのアンドレイはもう1歳半。上のイーゴリ（9歳）は10年制学校の3年生である。稼ぎ手はいまのところ世帯主のユーリーひとり。こういう家庭だし、自分の専門が経済だから、主婦のニーナが家計を切り盛りしているのだろう。収支残高はやや黒字だ。ニーナの許可を得て家計簿の内容をノートに書き写し、彼女に手伝ってもらって、仕訳してみた。


息子たちの相手をするユーリー・スモリー

昨年の月平均収支（単位ルーブル。コペイカは四捨五入）

収入 ユーリーの平均賃金	770
支出	
①所得税（高額所得なので税率は13％）	100
②組合費（所得の1％）	8
③食費	220
④家賃（2室30・5平方m、別に台所・廊下・バス・トイレ。家賃には熱湯・水道・集中暖房費が含まれる）	10
⑤電気代（1kW当たり4コペイカ）	6
⑥ガス代（使用量に関係なく1人当たり42コペイカ）	約2
⑦食料品以外（耐久消費財を含む）の購入代	250
⑧雑費	15
計	611

医療費と教育費はソ連では無料であるから、含まれていない。

これを見ると、文化費と娯楽費がないのにきっと気がつくはずだ。いまのところ文化・娯楽は、テレビ、読書（ニーナは本の購入代は支出⑦に含めている）、日曜日にタイガへ遠足してキノコ狩り、果実拾い、冬はスキーをやることで満足している。コガルイム町では映画館はまだ設計段階だし、まして劇場とか音楽堂はいまのところ計画にも上っていない。

黒字分159ルーブルはそのまま貯金する。ユーリーの毎年のボーナス（当地の呼び方では13カ月目の給料）も貯金する。もちろん、2番目の子供が生まれるまでニーナが働いて三〇〇ルーブル以上稼いでいた頃の方が、貯金の増え方はずっと速かった。ニーナは、アンドレイが満3歳になり、幼稚園へ通えるくらいからだがしっかりしたら、元の仕事に戻りたいと考えている。ところで、幼稚園に通わせると月に24ルーブルかかる。

スモリー家の貯金は何に使われるのか？

失業の心配はないし、重い病気になるとか、子供たちが成人して例えば大学へ進学する場合でも大した支出にはならないから、「不時に備えての蓄え」という考えは一家にない。貯金の大半は、一家が28日間の夏休みをとるときのために取って置く。夏休みには、数千kmも離れた亜熱帯の黒海沿岸にある大衆向きの避暑地へ飛行機で行くのが恒例になっている。3年に1回、往復の切符がただでもらえる。

それでも余った金は、自動車の購入に回すことになっている。貯金を増やすことにスモリー一家はあまり気を使っていない。コガルイムでは、周辺地域ではなおさらのこと、乗用車はいまのところあまり役に立たない。スモリーと同行して石油の採掘井へ行ってみたとき、私たちもそれがよく分かった。石油の採掘に当たる人たちは現場では2交替制で働いている。2週間はボーリング作業の現場で働き、2週間はコガルイムの自宅で休養する。

密林のなかのボーリング作業

石油の堀削井へ行ったときは〝交替車〟に乗った。乗り心地のよい〝バス〟と頑丈な水陸両用車の合いの子みたいな、一見変てこな乗り物をここではこう呼んでいる。スモリーがどうやって道がつくられるかを説明してくれている間は、道は結構平坦だった。

道路が通る沼地に砂を撒く。砂が沈んでもどんどん撒いて、その上に厚さ1mほどの道床をつくる。砂は一〇〇〇kmも離れたオビ川の上流から運んでくる。道床の上をセメントで薄く覆い、さらにその上に鉄筋コンクリートの板をすき間なく敷き詰める。このコンクリート板はスルグートから持ってくる。コンクリートの上にアスファルトを張る。こうして出来た道路は工費が1km当たり実に八五万ルーブルもかかるのである。

この道路は未完成だったので、アスファルトの舗装部分が終わったとたん、車はひどく揺れ、うっかり〝ダローガ〟（道路という意味のロシア語）とも言おうものなら舌を嚙みかねないほどだった。

石油の掘削井がある場所は、沼のなかに砂を撒いてつくった島だ。その島の上に作業員が泊まるトレーラーが数台、食堂車が1台、それに浴室用の小屋がひとつある。ちょっと離れたところから見ると、白色合金の波板でできた格納庫のようなものがある。そのなかで、馬力の強い蒸気・電気式原動機が日夜うなっている。その向こうが、移動式台架に設けられた掘削井やぐらだ。

こういう〝島〟が密林のいたる所にたくさん散らばっている。だがそれはヘリの上から見える景色だ。地上では、憂うつな夕方、トレーラーから出てきても、周囲に見えるのはひょろひょろの、元気のない草木だけで、自分といまいましい蚊のほかには誰ひとりいないような気になる。ここの冬はどんなだろう？ それを考えたら、シベリアの北部の開発にあたっている者の給料が、人間がたくさん住んでいる地方の普通の給料の2、3倍なのは別におかしくない。

ボーリング工の仕事は機械化されているが、それでも手の助けを借りる必要がある。ボーリング工が扱うのは25mもある長いスチール・パイプ（ロッド）とそれを組み立てる巨大な装置である。一見大雑把な仕事のようだが、実は貴金属や宝石類の細工のような手先の細かさを必要とする。試掘孔はまとめてたくさん——ひとつの場所で30本ほど掘る。それぞれちがう方向に、しかも、目標に正しく向けて打ち込まなくてはならない。つながれた鋼管は三〇〇〇mの深さまでとどく。鋼管が回転し、先端のビットが鉱層に食い込んで行く様子は、単なる鋼鉄の管というよりも、生命のある蛇のようだ。鋼管を必要な方向へ向けるのはそう簡単ではない。スモリーはボーリング作業を射的にたとえる。撃ち損じはいとも簡単だ。だが、一回の撃ち損じ（試掘孔が油脈にぶつからない場合）は何千ルーブルにもつくのである。ボーリング工の腕は鋼管が大きな油層にぶつかる割合できまる。スモリーはその割合が非常に高い。

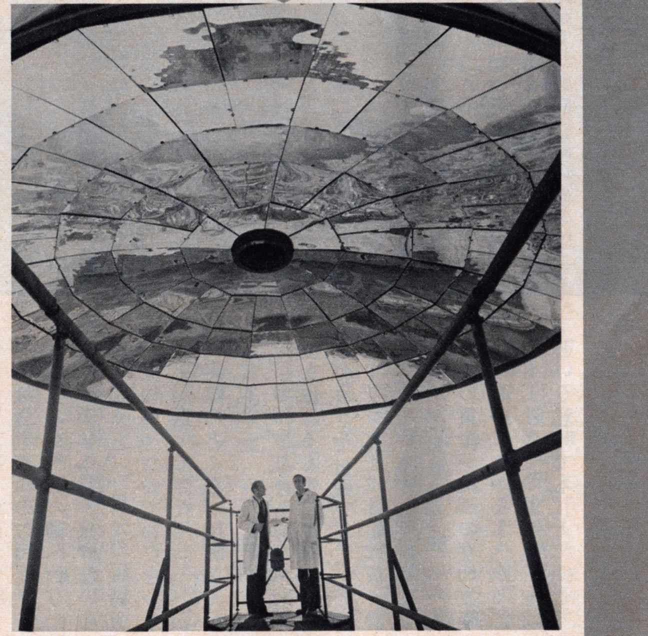
スモリーには助手が4人いる。みな18歳の、職業技術学校の卒業生ばかりで、一人前のボーリング工に仕上げてもらうために送られてきたのだ。持ち時間の仕事がすんで一息つくと、みんな教科書と向かい合う。通信教育の大学へ進学することにしたのだ。スモリーは食堂車にのこってテレビを見るか、隣の湖へ釣りに行く。大学へ行く気はないのかと聞くと、「自分の居場所が見つかったのでね」という答えが返ってきた。

実際のところ、技師なんかいくらいたって、腕のいいボーリング工がいなくては石油を掘れるものではない。西シベリアではボーリング工は非常に高く評価されている。〝評価〟という文字どおりの意味（スモリーの賃金が技師の平均賃金より高いことからも分かる）でも、社会での重要性、権威という意味でも。

話題を拾う

期待される太陽炉

ソ連科学アカデミー全ソ電源研究所アルメニア支部の実験場に新型太陽炉が据え付けられた。これは直径10mの放物面を持つ集光機（写真）と日光反射鏡（面積120平方mの平面鏡系）から成る複雑な装置である。この太陽炉では太陽光線を一カ所に集中させることによって3500度Cまでの高温が得られる。これほどの高温だと事実上あらゆる物質を溶かせる。太陽熱による溶解の利点は、他の方法では得られない清浄度の高さにある。多くの超純度の耐火材の生産は太陽炉の助けを借りてのみ可能で、現在はまだ実験室用に少量しか生産されていないが、まもなくキログラム単位ではなく数百トン単位の生産が始まる予定。





弟妹救助で表彰

まだ7歳にもならないラシド君を頭にきょうだい4人が留守番をしていた時、台所から火が出て子供部屋にまで燃えうつった。ラシド君は煙にまかれた弟妹を必死に外に運び出すと、ゆりかごの中で寝ていた赤ちゃんを助けにまた燃えている家の中にとって返した。隣近所の人たちが駆けつけた時は、兄弟4人は無事外に避難した後だった。

この勇敢な行為に対し、″セルプ・イ・モーロト″まち（ウズベク共和国のカラカルペク自治共和国ヌクス地区）はもうすぐ一年生になるラシド君（写真中央）に勇敢な行為を称えるメダルと入学に必要な学用品一式を贈った。

鉄道模型のコレクション

タリン（エストニア共和国首都）の配車センターの運転手A・レイマンは機関車や車両など鉄道模型のコレクター。コレクションの数は500以上もあり、前世紀から今日までの鉄道輸送の歴史を順次目で追うことが出来る。いろいろな国の製造年代も違う蒸気機関車、ディーゼル機関車、電気機関車の実物の87分の1大のコピーもある。

レイマンのコレクター歴は長く、もうこの道20年以上のベテラン。現在考えているのは60平方mの大きさを持つ動く鉄道模型の製作。

大都市で開催される模型愛好家クラブの展覧会には常時出品している。

レイマンが中心になってタリンの建設者クラブに今年初め、小中高生のための鉄道模型クラブが出来た。エストニア共和国初の鉄道模型ジュニアクラブである。





石の展覧会

「石の驚異」と名づけられた展覧会がこのほどモスクワで開催された。モスクワ自然実験者協会の石愛好家セクション創立20周年を記念して開かれたもので、モスクワ郊外で採取した天然石やサハリンその他の鉱物が展示された。模様がおもしろい珪石、石英の結晶鉱、めのう、各種玉髄の切片の美しい自然の絵、碧玉、天然石から作った宝飾品、ブローチ、ネックレスやペンダント、イヤリング、宝石類が人々の目を楽しませた。

ソ連の視点

ヒロシマから核兵器のない世界へ

ノーボスチ通信政治評論員　S・ベグロフ

ソ連は、核保有国がたとえばことしの8月6日から、すなわち広島への原爆投下40周年の日から、あらゆる核爆発に対するモラリトアムを宣言しようという自らの提案を改めて確認した。ゴルバチョフ・ソ連共産党中央委員会書記長は米国の民間研究者団体のメッセージに対する回答（8ページ参照）のなかで、このようなモラトリアムは核実験の完全全面禁止条約が結ばれるまで効力をもつだろうと言明した。

また、つい先日、広島市民の意思にもとづいて広島市が非核都市、平和都市の宣言をしたことが報じられた。

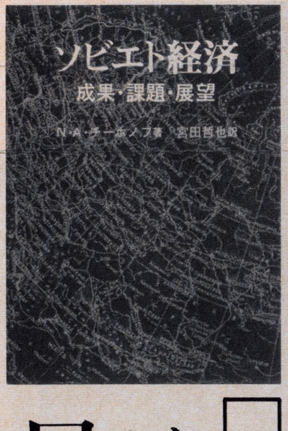
この二つの出来事がほとんど同時に起こったのはもちろん偶然ではあるが、この符合には大きな象徴的意義がある。どちらも、核兵器から解放された世界をめざす実際的な行動をとる必要性を強調しているからである。「水爆の父」といわれる米国のテラー博士でさえ、先頃パリで講演し、悪名の高いSDIはその主唱者のやかましい宣伝とは逆に、人類を核兵器から解放するどころか、逆に攻撃用宇宙兵器に必要なエネルギーを得るために核爆発を利用することを見込んでいることを認めた。このことから見ても、核のない世界をめざして実際的行動をとることの緊張性はいっそう強まっている。ところで、レーザー兵器がつくられている米国のロス・アラモスへ日本から磁気部品が供給されているが、これは「スターウォーズ」用のロボットの神経中枢となるためのものだという。

しかし、広島の男、女、子供が米国の原爆の最初の犠牲になったのは、かれらの同国人が関与して、全人類に対するもっと恐るべき兵器をつくらせるためではなかったと思う。また、欧州で数百万の人々がヒトラーの強制収容所の焼却炉のなかで焼け死んだのも、それから40年後に、これらの殺人炉を操作した親衛隊将兵の墓に西側の指導者が花輪を捧げるためではなかったのである。

ビトブルグのドイツ軍墓地を親しく訪れ花輪を捧げたレーガン米大統領は、原爆犠牲者を追悼するため8月6日に広島を訪問してほしいとの要請を拒否した。そこには、あの最大の流血戦争を引き起こした者たちを罪の意識から解放しようという空しい努力や、世界で最初の、無意味な原爆投下の命令を下した者たちの罪を認める男らしさに驚くほど欠けていることがはっきり現れている。だが、レーガン大統領が一つの「絶対兵器」の犠牲者と会うのを拒絶したことは、米国が同じような新型兵器に執念深く賭けていることをより明瞭に浮かび上がらせている。

米国政府の公式代表は、新しい核弾頭の開発に必要なかぎり核実験を続けると、はっきり言明している。道は「マンハッタン計画」から「スターウォーズ」計画まで直通なのである。

しかし、この道は核のない未来へ通じる道ではなくて、出口のない悪循環だ。どんなことがあってもこの道を断ち切らねばならない。未来への道はあらゆる面の核軍拡競争に「ストップ」と言うことから始まる。そのことをソ連は粘り強く提案している。まさにそのことを広島の灰は無条件に呼びかけているのである。



新刊紹介

ソ連経済の構造分析と改革の展望を示す

——N・A・チーホノフ著、宮田哲也訳『ソビエト経済　成果・課題・展望』

昨年、モスクワのノーボスチ通信社出版局からソ連共産党中央委員会政治局員、ソ連閣僚会議議長（首相）N・A・チーホノフの著書『ソビエト経済——成果・課題・展望』が出版され、本誌でも紹介したが、このほどその日本語版が東京のありえす書房から刊行された（宮田哲也訳、B6判二六一ページ、定価二〇〇〇円）。

本書は現代ソビエトの経済構造全体を分析したものであり、21世紀を見通した経済発展のために、ソ連共産党とソ連政府が提起する諸課題を述べたものとなっている。

主な内容を紹介すると、第一章はソ連経済の概観であり、10月社会主義革命後から大戦期、六〇—七〇年代、八〇年代とソ連経済の発展をあとづけている。第二章「単一の国民経済コンプレクス」では、多民族国家ソ連での国民経済の形成、シベリアの総合開発にふれている。

第三章は、あらゆる生産分野への科学技術の成果の導入について述べられている。科学技術の進歩は国民経済を一層発展させる上で重要な要因となる。ロボット、コンピューター、新材料の開発や海洋開発、宇宙工学、エネルギー計画——これらすべてがソビエト経済の中でいま大胆に実行されている。

第四章で著者は、労働生産性の向上と結びついた原材料・エネルギーの有効利用の必要性を強調し、天然ガス・石油・石炭などの燃料産業、水力発電、原子力発電について概観する。

第五章、第六章では、国民経済の均衡発展、生産力配置の新しい原則、経済過程での計画的管理システムについて言及されている。第七章は、食糧計画の実現と農工コンプレクス創設の諸問題である。

第八章は、経済相互援助会議（コメコン）諸国における社会主義的経済統合の発展が述べられている。著者は第九章で、国際的な経済関係の建設的な発展は緊張緩和をおしすすめ、各民族・国家間の信頼を強めるものになると指摘している。最後の第一〇章は「人間のため、人間の福祉のため」と題し、社会主義の基本目標——国民福祉について、具体的に生活水準、社会保障、教育、医療などを見ている。

全体の中で、特に現在日本で注目されている「経済改革実験」についてふれた箇所——第六章「管理」では、実験の成果は良好であり「その適用範囲を広げていくための諸条件が生まれてきた。今日すでに七〇〇以上の企業が新しい経営条件の下で運営されている。一九八五年にはこのような企業の数は著しく増え、全工業生産高のおよそ四分の一を占めることになるであろう。実験はまず機械工業、連邦構成共和国の食料品工業、軽工業、及び地方工業など一連の省に及ぶであろう。鉄鋼省と石油化学工業省に所属する企業でも実験の準備が始められている」と、ソビエト経済が大きく質的に転換し始めていることを示している。

今年初めからソ連ではすでにソ連共産党第27回大会の具体的な準備が始められている。大会では党綱領新稿が審議され、一九八六—一九九〇年および二〇〇〇年までの期間の経済・社会発展の基本方向が決定される。従って、今後のソ連の発展に関心のある人には本書は特に注目に値しよう。なぜならば本書で述べられたソビエト経済の成果・課題・展望がすでにその新しい方向を示しており、計画の中に組み込まれていくからである。

書店にない場合は、㈱ありえす書房（電話03—379—1275、振替東京4＝141547）へお申し込み下さい。

催し物のお知らせ

☆ボリショイ劇場バレエ特別公演

大阪・フェスティバルホール（8月3、4日）、名古屋市民会館（8月6、7日）、福岡・サンパレス（8月10日）、広島・郵便貯金ホール（8月12日）、松山市民会館（8月15日）、東京・NHKホール（8月18日）

▽電話予約・お問い合わせは、エミー・インターナショナル（電話03・234・7207）／東京労音（電話03・265・6361）へ。

☆オシポフ記念国立ロシア民族オーケストラの公演

東京厚生年金会館（9月30日）、小樽市民会館（10月2日）、北海道厚生年金会館（3日）、秋田市文化会館（5日）、宮城県民会館（6日）、埼玉会館（7日）、神奈川県民ホール（8日）、沼津市民文化センター（9日）、四日市市文化会館（10日）、高松市民会館（11日）、鹿児島市民文化ホール（14日）、熊本市民会館（15日）、九州厚生年金会館（16日）、長崎市公会堂（17日）、下関市民会館（18日）、福岡市民会館（19日）、岩国市民会館（20日）、京都会館第1ホール（21日）、神戸国際会館（22日）、大阪フェスティバルホール（24日）、静岡市民文化会館（25日）、名古屋市民会館（26日）、長野県民文化会館（27日）、富山市公会堂（28日）

▽電話予約・お問い合わせ先／民音・予約センター（電話03・363・9151）、各地民音事務局

☆ソビエト名作映画鑑賞会

8月26日（月）

ソビエト秀作アニメシリーズ・ユーリー・ノルシュテイン特集

▽会場　東京・大手町・日経小ホール

▽開映　6時15分　入場料800円

▽お問い合わせは、㈱日本海（電話03・262・4131）へ

（上記会場では毎月1回、ソビエト映画が上映されています）

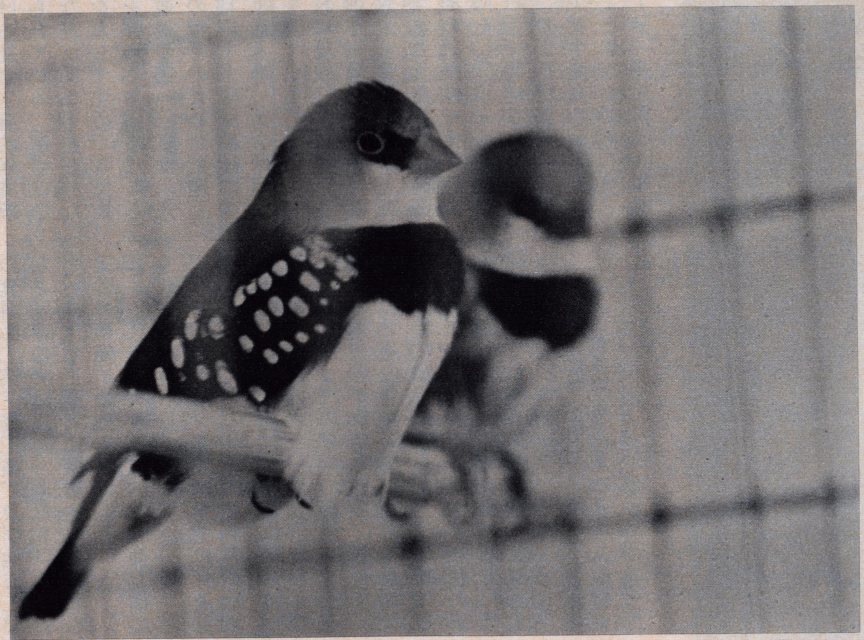
〃世界でいちばん美しい鳥は?〃

——モスクワの飼い鳥展覧会

本誌記者 リュドミラ・ルブツォワ
カメラ I・ガブリロフ V・ボブコフ







上 「声のいい鳥・美しい鳥」展を見るために並んだ人々
中 生物学者ワレリー・ルドニツキーとペットのコバタン
下 カノコスズメ

子どものころ、ネズミや子イヌ、あるいは野鳥や〃しゃべる〃オウムを飼ってみたいと思ったことはないだろうか? そんなわけだから、一カ所にほんのしばらくでもじっと座っていられない子どもたちでさえ、この4月、モスクワ市自然保護協会の展示ホールで開かれた「声のいい鳥・美しい鳥」展を見るために、何時間も親と一緒に列に並んだのである。この展覧会を見たがったのは子どもたちだけでなかった。珍しい鳥の展覧会は、鳥学者はもちろんのこと、自然を愛する大勢の人々の関心を集めた。

展覧会は小鳥たちの優しい鳴き声、澄んだ鳴き声にあふれて、さながらメロディーの王国のよう。出品された一八二点の鳥の中には、二〇〇—三〇〇年前にわが国に移入されたジュウシマツも見られた。この小柄な鳥はすっかり人間に飼い馴らされてしまい、いまでは野生で生きられないほどで、カゴの中でよく増える。非常に〃善良〃で、他の鳥の卵を暖めるだけでなく、ヒナまで育てる。

ジュウシマツと同じキンパラ科のカノコスズメもとても可愛い。展覧会にはまた、プリモーリエ〔沿海〕地方に住むイカルや、突然変異や交配によって得られた黄色、オレンジ色、緑色、ブルーなど、色とりどりのカナリアも出品されていた。優雅なシラコバトの隣では白色毛冠ポーリッシュ種のニワトリが時を告げ、見事な姿のニワトリたちが胸を張って歩きまわっていた。

オウムやインコの人気は格別である。小柄なアフリカ産のクロボタンインコやベネズエラ産のキボウシインコが人気を集めていた。

オウムの仲間は人間の言葉をまねることで知られているが、言葉をしゃべる点ではこの展覧会に出品されたアフリカ産のヨウムは抜群で、この鳥のカゴのまわりには人垣ができるほどだった。人気にすっかり気をよくしたこの鳥は、子どもたちの求めに応じてポーズを取っていた。

モスクワ市自然保護協会愛鳥クラブの外国の鳥セクションが催したこの展覧会はこれが通算4回目。クラブにはさらに二つのセクション——ローラーカナリア・セクションとソ連の鳥セクションがある。

外国の鳥セクションには鳥学者だけでなく、さまざまな年齢と職業の人々80人が参加している。鳥に関心がある人ならだれでもクラブの会員になることができる。会費は年にわずか3ルーブル(約一〇〇〇円)。これは専門書や餌の代金、展覧会の開催のために使われる。クラブの仕事は講演会を行ったり、鳥の飼い方の相談に応じたりすることだが、いちばん大切なのは珍しい鳥や絶滅しかかっている鳥を保護し、それらを人為的に増やすための条件をつくり出したり、新しい種類をつくり出すことである。こうしたクラブの活動の結果を示すのが、毎年開かれる珍鳥の展覧会である。

展覧会にはふつうの愛鳥家もコレクションを出品できるが、もちろん、クラブの会員が優先される。出品するためには開催の1カ月前までに、出品する鳥を明記した申し込み書を選抜委員会に提出しなければならない。委員会が出品にふさわしい鳥を決める。

展覧会に出品できたとしても、それだけではまだ十分ではない。鳥たちにはさらに厳しい試練〃容姿〃コンテストが待ち受けている。このコンテストは今回はオウム・インコの部で行われた。評価対象とされるのは羽の色、大きさ、頭や足やクチバシの形である。

どんな〃美人〃が選ばれたか? 厳正な審査の結果、金メダルと1級賞状がモスクワの技師ビクトル・ヤーシン(40歳)のアカクサインコに決まった。

展覧会は約1カ月間開かれたが、この間二万八〇〇〇人が入場した。その約半数が子どもだった。



白色毛冠ポーリッシュ種のニワトリ

▼展覧会場で



キエリクロボタンインコ



シロブンチョウ



イカル



展覧会のコンクールで金メダルと1級賞状をもらったアカクサインコ



キボウシインコ



ヨウム



▶▶マキゲカナリア





1

ペチョラ地方の夏祭り

民族学者 ユリア・クラソフスカヤ
カメラ Y・ルニコフ

1　ゴルカ祭りを祝うウスチ・ツィリマ村の女性たち。一番のおしゃれ着で身を飾り、美しい野に遊ぶ。

2　ペチョラ川沿いに広がるウスチ・ツィリマ村

3　色とりどりのミトンや飾り帯、樹皮で編んだかご――どれも村一番の編み物名人、アレナ・シュリヤキナおばさんが作ったもの。チャストゥーシカ（俗謡）もすぐ口をついて出る。



2



3





北国の夏は遅い。ここ、コミ自治共和国（ロシア連邦共和国北欧部）のペチョラ川に暖気が訪れるのも7月の半ば、白夜の季節の後半になってからである。北国の常として、ジャガイモが遅ればせながら、しかし仲良く一斉に花開く。ついでだがこの地方のジャガイモはとてもおいしい。春の雪解けで水に浸った野原ではありとあらゆる草たちが今を盛りと背伸びをしている—

—もうすぐ草刈りの季節だ。

だが草刈りの前に、ペチョラのまちや村の人々は〝ゴルカ〟——夏祭りを祝う。ゴルカというのはこの地方の輪舞の名で、この日は老いも若きも一日中、輪舞の輪の中にいる。

祭りの日は男も女も特別おめかしをする。古い民族衣装やショールを持っている人もいるが、大部分の人はお祭り用に、民族調の飾りや刺しゅうのあるおしゃれなサラファン、スカート、ブラウスなどを新調する。イヤリングやチョーカー、ネックレスなどは民族衣装に欠かせないアクセサリーだが、これもこの地方の人たちの手になるものが多い。

皆さんがごらんになっている写真は、ペチョラ川右岸に8㎞にわたって広がるウスチ・ツィリマ村で撮ったもの。

ウスチ・ツィリマ村のゴルカ祭りには毎年よそからも大勢の人が来る。古くから伝わる農村の風習は、今に生きる歴史として、また陽気な現代的祭りとして人々の心を引きつけて離さない。

そして祭りは終わり、翌日、ペチョラの人々は草刈りに出る……



4　祭りの日の夕暮れ、近所の庭に集まって歌をうたったり、おしゃべりをしたり。

5　ペチョラのスプーンの模様はとても手がこんでいる。十字架とその周囲の図形は、善、幸福、安泰の印であり、自然の春のめざめの象徴だ。

6　ウスチ・ツィリマ村の女性の胸飾り

7　北の国の人々の手工芸品

8　祭りの仕度をする女性たち。晴れ着で一番大切なのは柄ものののスカーフ。何枚つけてもいいが一番きれいなのを表面に出す。





短信アラカルト

珍しい発見物

アライ山脈（キルギス共和国）の支脈の標高四五〇〇mの所で、オシ教育大学の調査隊が円形の石に刻まれた謎の模様を18個発見した。それは地図だと分かった。これらの地図は地理学、天文学、数学に精通している者でなければ描けない。それは、大陸間、山脈間、諸島間の距離が正確に計算されていることからも分かる。

今のところ、中央アジアの傑出した学者ムハメド・ベン・ムサ・ホレズミが9世紀にただ一度だけこのような地理学的調査をしたことが知られているにすぎない。しかし石の地図の製作者は、署名によれば、ラスール・アアルイムス・イビンである。歴史家はこれまで、この名にお目にかかったことがない。彼は何者か？　偉大なホレズミの弟子の一人か？　なぜ地図はかくも到達困難な場所で発見されたのか？

学者たちは今後これらの質問に答えなければならない。しかし一つだけ明らかなのは、巨大な学術・文化的価値を持つ歴史的記念物が発見されたということである。

イルカの学校

多くの国にマリンランドがある。ソ連では黒海沿岸に幾つかこのような施設がある。そのうちの最大のものはバツミ市にあり、ここではソ連海洋漁業・海洋研究所グルジア支部の専門家たちが働いている。池や22の水槽では淡水や黒海その他の海に住む60種のさまざまな魚や動物を観察することができる。入園者の間で最大の人気を呼んでいるのは、芸を仕込まれたイルカの演技だ。現在イルカ水族館には5頭のイルカがいる。それぞれが人間のように独自の性格、独自の能力を持っている。

最近、新しい仲間——オットセイのシャルンとアリストファンが加わった。1カ月のトレーニングで、命令に従って輪を抜けたり、寝転んだり、潜水したりすることを覚えた。

いまイルカがオットセイと一緒に出演するプログラムが準備されている。

リュックに入るオートバイ

オートバイが普通のリュックサックに——と言ってもこれは冗談ではない。リガ市（ラトビア共和国の首都）の「サルカナ・ズワイズグネ」工場がそれを生産している。正確に言うと、これはオートバイではなくてミニ・モペットだ。2輪車の等級表ではこれはオートバイとバイクの間の地位を占めている。大人にも子供にも乗り回すことができ、1回の給油で二〇〇km以上走れる。もっとも、速度はあまり出ず、時速40kmまで。その代わり優れた点は沢山ある！　しばらく乗り回した後で、ハンドルを折り畳み、サドルを下ろし、全車体を簡単に肩にかつぐことができる。

残っていたマンモスの好物

マリ自治共和国（ロシア連邦共和国欧州部）の二つの湖——大マリエルと小マリエルは自然の記念碑の地位を得た。これらの湖にはマンモス時代に繁茂した植物ヒシの珍しい個体群が残っていたからである。ヒシの実は人間が昔から食用にしてきたが、これはマンモスの好物でもあった。このユニークな食物を保存するために、マリ大学の学者、共和国の自然保護協会の活動家は湖周辺に特別の規制を設けることに成功した。ここでは狩猟や漁獲が禁止され、マスクラットの数が調節され、湖周辺への立ち入りが制限された。専門家がたえずヒシの生育地を見守っている。

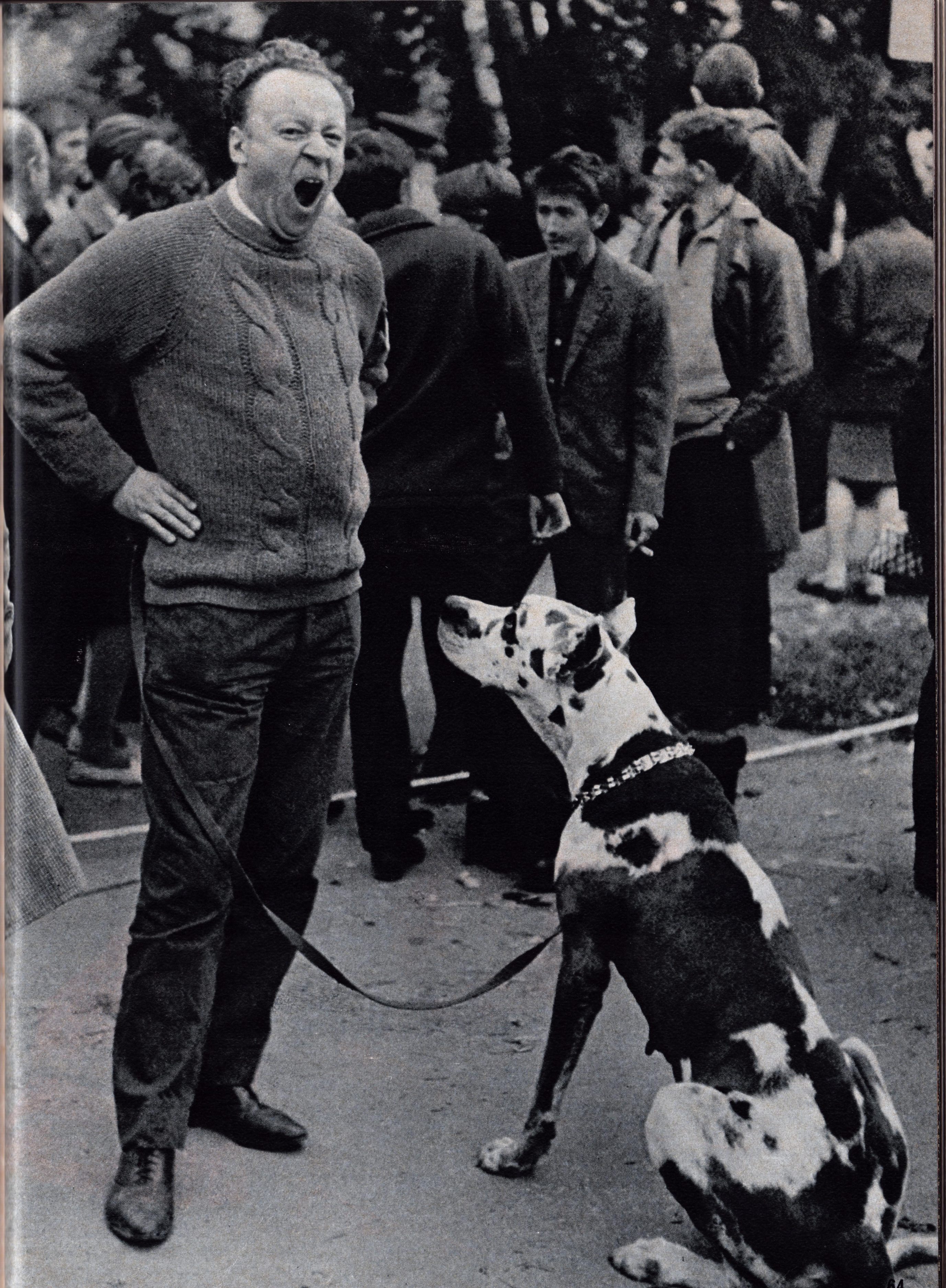
サケの輸送

テプロフ養魚場（ハバロフスク地方）で生まれたサケの稚魚は、自力でオホーツク海まで泳いで行けるが、養魚場では特殊なポンツーンに設けられたプラスチック製の水槽に入れて海洋まで運んでいる。

普通の条件ではサケの稚魚は海への旅を体重〇・五gの頃から始める。当然ながら、稚魚は川魚のえじきになる。産卵場から大洋に行きつくまでに約半数の稚魚が死ぬと計算されている。だが水槽での旅は安全が保障される。

サケの稚魚を輸送するというこの試みは他の実験にとっても貴重である。旅の間、稚魚は流水が通るといの中で配合飼料で育てられる。海へ入る前に稚魚は2gになる。そして3年たつと、体長約1mの立派なサケが大洋の深みから故郷の岸へ戻ってくる。

現在ハバロフスク地方には四つの養魚場があり、そこでは数百万尾のサケ・マスの稚魚が育てられる。養魚場の仕事の成果はすでに目に見えて現れている。サケ・マスが減ってしまったビラ川とビシャン川では、沿岸にある二つの養魚場のおかげで再びサケ・マスがよみがえり始めた。"人工孵化器"育ちの魚群が郷里に戻っているからだ。



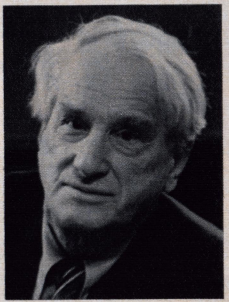
▶「ボクと一緒じゃ退屈なのかな？……」
（V・カルポフ撮影）

札幌で開かれたエルミタージュ美術館展

——ピオトロフスキー・エルミタージュ館長に聞く

入場者でにぎわうエルミタージュ美術館展の会場（写真提供＝北海道新聞社）





ボリス・ピオトロフスキー・エルミタージュ美術館館長

札幌のエルミタージュ美術館展（7月13日—8月22日、北海道立近代美術館、主催＝北海道立近代美術館、北海道新聞社、ソ連文化省、エルミタージュ美術館）の開会式に出席するため、ソ連文化省の代表団が来日した。代表団のメンバーにはエルミタージュの館長ボリス・ピオトロフスキー科学アカデミー会員（77歳）が加わっていた。本誌でもこのユニークな世界美術の宝庫とその卓越した指導者については何回も紹介している。来日3度目のピオトロフスキー館長にM・エフィーモフ本誌記者がインタビューして、今回の札幌の展覧会について語ってもらった。以下はその談話。

「近年、エルミタージュと日本の各新聞社との間に、そしてこれら新聞社を通じて日本の美術館や画廊との間に仕事上のよい関係が確立されている。日本経済新聞社と日動画廊はその一例だ。われわれの意見では、日本で開かれたエルミタージュのコレクションによるレンブラント展、フランス名画展、ソ連で開かれた北斎展、日本画展、日本のコレクションによる西欧絵画展などは大成功だった。このように、エルミタージュが日本側と行っている文化交流には、すでに歴史と伝統がある。しかし、今回の札幌でのエルミタージュ展の意義は特に強調しておきたい。今やわれわれとの文化交流に北海道が加わったからだ。

　われわれは喜んで北海道新聞社との協力に応じた。エルミタージュ美術館展の開催に大きな役割を演じた渡辺喜久雄・北海道新聞社長との会見は、いま思い返しても実に愉快なものだった。この展覧会が日本の美術愛好家の関心を集めるものと確信している。

　エルミタージュ展には40点の油彩、25点の素描、15点の版画が出品されている。いずれも16—18世紀の作品だ。この中にはティツィアーノ、レンブラント、ルーベンス、バン・ダイク、ロラン、ブーシェ、その他の巨匠の作品も含まれている。

　特に注目していただきたいのはハルスの『手袋を持つ青年の肖像』だ。この絵はロシアの女帝エカテリーナ2世が一七六四年にドイツで手に入れたもので、事実上この絵がわが美術館の基礎になった。エルミタージュの歴史はまさにこの作品の購入の瞬間に始まったと言える。

　札幌の展覧会は始まったばかりだが、われわれはすでに文化協力の今後の計画について日本側の主催者たちと合意した。ソ連で北海道をテーマにした大きな展覧会を開くこと、日本で18世紀—19世紀初めのロシア実用美術展を開くことが計画されている。なお、この〝実用美術展〟の方は現在ラテンアメリカで大成功を収めて開催中である」

日本から贈られたシャリャーピンの肖像画

演劇評論家　ワジム・キセリョフ



▲6月3日、モスクワで行われたシャリャーピンの肖像画の贈呈式であいさつする知野光志氏。左は中央演劇博物館のワレリー・グービン館長。

去る6月3日、日本の有名な画家鶴田吾郎が一九三六年に描いたロシアの大歌手（バス）フョードル・シャリャーピン（一八七三—一九三八）の肖像画が知野光志さんという日本の美術収集家から、モスクワにあるA・バフルーシン記念国立中央演劇博物館へ寄贈された。

　この肖像画はシャリャーピンが一九三六年（昭和11年）に訪日し、東京の日比谷公会堂で歌ったときの姿をモチーフにして制作されたもの。

　中央演劇博物館は昨年で創立90年を迎えた由緒ある博物館だが、56年前演劇研究家であり美術収集家であったアレクセイ・バフルーシン（一八六五—一九二九）がその所蔵コレクションをそっくりこの博物館に寄贈し今日の基礎ができたので、その名を記念している。

　現在の所蔵品は五〇万点を超え、名優、劇作家、名バレエダンサーの手紙や原稿、版画、肖像画、衣装や舞台装置のエスキース、ポスター、プログラム、写真、映画フィルム、珍しい図書類、陶器コレクションなどから成っているが、演出家、舞台装置家、アーチストなどソビエトのすぐれた演劇関係者、教師、演劇学者からの寄贈で毎年一万点ないし一万五〇〇〇点ずつ所蔵点数が増えている。

　博物館の展示（定期的に模様替えされる）には、肖像画ギャラリー、ロシアの演劇、ソビエトの多民族的な演劇について物語る陳列ホールが含まれている。また、季節ごとに国の祝日や記念日、有名な芸術家の記念日にちなんだ特別展を催す。この博物館には世界中の多くの国から芸術学者や歴史学者が研究にやってくるし、またロシア・ソビエトの演劇史に関する著作でバフルーシン演劇博物館の所蔵品を引き合いに出さないものはひとつもないくらいだ。

　37年前、この博物館にフョードル・シャリャーピンの展示室が設けられた。シャリャーピンはきわめて多芸多才の人で、比類のない美しいバスと、まれにみるほどの演技力の持ち主であったし、天才的な画家であり彫刻家だった。この博物館にはシャリャーピンのスケッチ、メーキャップ、自画像（彫刻）が展示されており、シャリャーピン特別室には、モスクワ、ペテルブルグ（現在のレニングラード）、ミラノ、パリでシャリャーピンが出演したオペラの舞台写真、当日のプログラム、ポスター、衣装と舞台装置のエスキースなど珍しい資料が展示されている。これまで博物館の所蔵品にはシャリャーピンの晩年の肖像が欠けていたが、知野氏が今回寄贈した一九三六年の肖像でその空白が埋められることになった。この作品はシャリャーピン室に展示される。知野氏には博物館から深甚の感謝の意が表された。

「地方の時代シンポジウム」に出席したハバロフスク知事

去る7月10、11の両日、神戸市で第4回「地方の時代シンポジウム」が開かれたが、これに参加するため、V・S・パステルナーク知事（執行委員会議長）を団長とするハバロフスク地方の代表団が来日し、7月5日から12日まで滞在した。同シンポジウムは北海道、神奈川県、兵庫県、沖縄県の4道県の主催で毎年開かれているものだが、今年は兵庫県と友好関係を結んでいるソ連、中華人民共和国、米国、オーストラリアの地方自治体の代表も招待されて、7月10日のパネル・ディスカッションに参加し、地方自治体間の協力関係の発展に関する問題を話し合った。



地方の時代シンポジウムの模様。右から4人目がパステルナーク・ハバロフスク地方知事。

シンポジウムで発言したパステルナーク・ハバロフスク地方知事は、15年余り前に確立されたハバロフスク地方と兵庫県の間の友好関係が、年ごとにいっそう発展していることを強調し、「この関係を両自治体の公式代表団の交換だけに限ることはなく、できるだけ広いさまざまな層の市民が交流に加わるようにすべきだ」とのソ連側の考えを述べた。

パステルナーク知事はその点で、学校、病院、美術館、芸能集団といった個々の団体、施設間の直接の交流と協力の確立を提案し、最後に「そうすれば、われわれの関係は新しい、より充実した内容をもち、より多角的になるだろうし、ハバロフスク地方と兵庫県の住民、ソ連と日本の国民間のいっそうの相互理解の深まりと友好の強化にも役立つだろう」と結んだ。

在日中パステルナーク知事は坂井兵庫県知事とも会い、友好的な会談を行った。

（K・デリバス）

神戸でソ連スポーツ報道写真展



◀ **展示された写真を見る宮岡・神戸市助役とワシリエフ在大阪ソ連副領事**

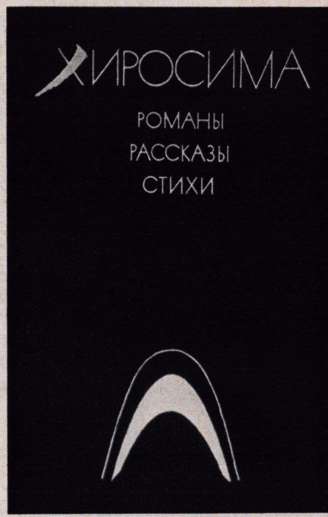
7月13日から21日まで、神戸市・ポートアイランドの貿易促進センターでソ連スポーツ報道写真展が開かれた。これは神戸国際交流協会、ユニバーシアード・フェスティバル実行委員会、日ソ協会兵庫県連合会の主催、ノーボスチ通信社、在大阪ソ連領事館の協力により開かれたもの。

展示された写真の大多数は、ソ連の著名なスポーツカメラマンでノーボスチ通信社所属のユーリー・ソモフの作品で、カメラのレンズを通して捉えられたスポーツの世界が約一〇〇枚のカラー、白黒写真で展示された。スポーツと人間、スポーツのドラマ性とロマン——ユーリー・ソモフの作品にはこれらのテーマが鮮やかに映し出されている。

写真展の開会式であいさつに立った宮岡寿雄・神戸市助役は、写真展が時宜にかなったものであることを強調した。ユニバーシアード神戸大会開催の直前に開かれたこの写真展で、日本のスポーツファンはソ連の優れた競技者を知ることができる（写真に写っている選手の多くはユニバーシアードに参加するソ連チームのメンバー）。

宮岡助役はまた、スポーツカメラマンY・ソモフの作品とともに、ノーボスチ通信社のもう一人のカメラマン、ヤン・チーホノフの作品もこの写真展にたくさん出品されたことを歓迎し、このラトビア共和国のジャーナリストによる20点の写真は神戸の姉妹都市リガの生活を紹介しているので、神戸市民には特別な関心を呼ぶだろう、と述べた。

同じく開会式に出席したS・V・ワシリエフ在大阪ソ連副領事は、ソビエト国家が国の体育とスポーツの振興のために払っている大きな関心について語った。またソ連と日本のスポーツマンの活発な交流について触れ、「ことしだけでもすでにソ連のバスケットボール、バレーボール、アイスホッケーのチームが神戸を訪れた。目前に迫ったユニバーシアード神戸大会はこうしたスポーツ交流の強化に重要な役割を果たすだろう」と述べた。



『ヒロシマ』の表紙

警告の本『ヒロシマ』

——日本の作家・詩人の作品集

「文芸図書」出版所長　ワレンチン・オシポフ

わが文芸図書出版所は第2次世界大戦終結40周年を迎え、一九四五年の悲劇的出来事をテーマとした日本の作家の作品集『ヒロシマ』を出版した（五七四ページ、五万部、キム・レーホ編、まえがき——ミハイル・デムチェンコ）。これには長編小説2編、短編小説数編、詩約二〇〇編が収められている。

歴史上の事件は歳月がたつほど遠くなるという法則があるが、広島の悲劇はそうはならない。過ぎ去った歳月の長さにはまったく関係なく、広島の思い出はわれわれから遠ざかったり、近付いたりする。あれから40年たったいまほど、広島の思い出がわれわれに身近になったことは、おそらく終戦以来なかったろう。世界的核戦争の脅威がいまほど近付き、高まったことはないからである。人類にとって、過去を忘れることは自分の未来を奪うことにほかならない。この万代不易の真理を悟った人々の数は、世界中で増える一方である。

この作品集の題名は巻頭に収められた小田　実の長編小説『HIROSHIMA』からつけられた。「ヒバクシャ」（被爆者）の悲劇的な運命を描いた作品はこの40年のあいだに沢山書かれたけれども、そのどれにも共通した特徴は、原則として、原子爆弾の爆発そのものや、原爆の恐るべき後遺症の数々を非常に細かく描写していること、最大限のノンフィクション性が時には行き過ぎた自然主義に陥っていることなどであった。ところが、この頃になってようやく、この核の悲劇の社会的・哲学的な意味をさぐり、悲劇をもたらした原因を解明し、この犯罪の責任、軍事的に使用する必要など全然なかったこの兵器を使って何十万もの人間を殺りくした責任、人間の運命を傷つけ歪めてしまった責任を問うた作品が現れてきた。

小田　実の『HIROSHIMA』はまさにそのような作品である。

『HIROSHIMA』はまちがいなく傑作であるが、それは、いわゆる「広島問題」そのものの枠をはるかに超えた作品であるからだ。この作品のなかには、平和と核軍拡競争の停止のための闘いに各国の国民が力を合わせる必要のあること、米国で生まれ事実上米国市民である日系人（彼らの多くは第2次世界大戦中米軍の一員として戦った）に対する差別問題、米国から帰ってきた日本人に対する日本国内での差別の問題、そのほか多くの現代世界の問題が縦糸と横糸のように生き生きと組み合わされている。

小田　実の『HIROSHIMA』のほかに、井伏鱒二の有名な長編小説『黒い雨』が収められている。あの8月の日々の悲劇をドキュメンタリー風に再現した若い娘の日記体の作品だ。本書に収録されている短編は原　民喜の『夏の花』、太田洋子の『半人間』、林京子の『ギヤマン　ビードロ』、後藤みな子の『刻を曳く』など。作者はみな原爆の生き証人ばかりで、いずれも悲劇的な過去を忘れようとさせる者たちに激しい論戦を挑み、そういう人々に反対している。

いま、帝国主義の侵略層が人類をまたもや世界的な核破局へ引き込もうとしているこのとき、人道的立場に立ったこれら反軍国主義的作品の作者たちは、読者に広島と長崎の悲劇を思い出させるだけでなく、歴史はわれわれに果たして何も教訓を与えなかっただろうかと問いかけている。明るい未来を実現するための闘いの引き金としての過去の記憶——これがこの作品集に収められた作品の著者たちと、愛情と深甚の敬意をこめてその出版に当たった編集者たちをひとつに結ぶ考えになっている。

ノーボスチ通信 特派員報告

起こらなかった奇跡

A・ジグノフ記者（ダルエスサラーム）

〃組織だった都市化の手本〃とか、〃未来の町づくりの模範〃とか、南アフリカ共和国の官製宣伝機関は、ヨハネスブルグから一三六㎞のアフリカ人の町エカンガラの建設をベタ褒めしてきた。

都市のアフリカ人をすべてバンツースタン（黒人居留地）へ追い払おうとしてもうまく行かないことがプレトリアでようやく理解されたのがそもそものきっかけだった。ヨハネスブルグの場合、人種差別主義者はいわゆる〃工業地帯〃をつくり、そこにアフリカ人を住まわせて働かせることに活路を求め、その候補地にエカンガラが選ばれた。住宅の電化、道路の舗装、学校の建設など盛りだくさんの約束をした。

ところが、間もなく〃独立〃することになっている隣のバンツースタンのクワンデベレにエカンガラを合併させる決定が採択されたことが突然明るみに出た。つまりエカンガラを手本にする〃組織だった都市化〃は、すべてのアフリカ人をインチキ独立バンツースタンの市民にしてしまうという人種主義者の考えを実現するためのカムフラージュになろうとしている。

エカンガラの住民をなにが待ちうけているかは、想像に難くない。移住者用の12の巨大な収容キャンプを見るだけでよい。男子は近隣の都市、といっても何百㎞も離れた所へ働きに行く。午前3時に起きてバスに乗り、帰るのは夜の9時頃になる。エカンガラそのものには、建設中の首都の官庁の土台を置く溝を掘る仕事しかない。アフリカ人はクワンデベレのことを〃ハンガーランド〃（飢えの国）と呼んでいる。

祖国の自由か、それとも死か

O・ボンダレンコ記者
I・ペトゥシコフ記者（マナグア）

ついこの間まで平和だったニカラグアの首都マナグアはこの頃文字どおりがらりと様子が変わって、前線に近い町の様相を呈してきた。十字路や広場に戦車が姿を見せ、高射砲の砲身が空をにらみ、砲兵陣地が戦闘隊形をとり、企業や官公庁の入り口には武装したパトロール隊が警戒にあたっている。

「いつ米国が侵入してきても撃退する用意を整えておかねばならない」――ニカラグア民族解放戦線（サンディニスタ）機関紙「バリカーダ」のハビエル・レイエス編集長は記者たちにまずこう前置きして、次のように語った。

「わが国をめぐる事態の動きを分析すると、この危険はまったく現実的だ。周知のように、米国議会はレーガン政府の好戦的圧迫に負けてソモサ派の匪賊やCIAの雇い兵の支援費の支出を結局承認し、下院は議会の承認がなくとも軍隊をニカラグアへ派遣する全権を大統領に与えてしまった。全体の背景から見て、こうした決定は、ワシントンがわが国の革命を圧殺しようとしているものと見るべきだし、事実上米国の直接的軍事介入への道を開いた」

われわれはサンディノ国際空港へ行く途中、2本の幹線道路が交差した地点に配置された戦車のそばに車を停めて、その指揮員のロヘル・アンジノ曹長に、そこを守っている理由をきくと、次のような答えが返ってきた。

「私たちの戦車隊がここにいるのはわが国への軍事的脅威があるからだ。軍事的反革命が次々と敗北しているので、レーガン政府は直接介入計画を練っている。マナグア市民はわれわれを温かく迎えてくれた。必要とあれば、市民と肩を並べてわれわれの革命を防衛するつもりだ」

警察と泥棒

A・イグナトフ記者（ローマ）

イタリアを訪れた人のだれもが、恐らくイタリアでだまされた体験談を語るだろう。しかしたいていはだまされた者が自分の気まり悪さをあざ笑いかねないほど、だますことが陽気に行われている。しかし〃コンビナシオネ〃〔悪巧み〕が単純な盗みの枠を越える時、この現象が引き起こすのはすでに笑いではなく、涙であり、時には血でさえある。

とはいえ、最も恐ろしいのは組織された犯罪の規模ではなくて、犯罪がイタリアで人間の習慣に及ぼす影響である。繁華街で大勢が見ている前で事件が起こっても、警察は目撃者を探し出すことができない。みんなこわがって、自分は何も見ていない、と言うからだ。

もちろん、イタリアの〃コンビナシオネ〃の範囲が広く、多種多様であるにもかかわらず、イタリアの今日の生活はそれだけではない。

このほどローマでもう一つの審理が始まった。被告人席に座っているのはイタリアの軍情報機関の元指導者たち。彼らは司法機関をだまし、ネオファシストのテロ行為事件に関する証拠物件を隠匿したかどで告発されているのだ。そのうちにナポリで元ギャングの一員が、これらの被告の一人、ムズメチ将軍が、法王の暗殺未遂事件を起こしたトルコ人テロリストのアジャを脅迫してむりにブルガリア人を共犯として告させた、と語った。そこで軍の情報機関の元首領たちは、恐らくイタリアおよび世界の世論に対する犯罪的な欺まん、ブルガリア市民に対する中傷、セルゲイ・アントノフに対する根拠のない逮捕と拘置についても釈明しなければならないだろう。

ソ連の新聞記事から

（一九八五年7月前半）

党中央委政治局の定例会議

ソ連共産党中央委政治局は定例会議で一九八六―九〇年および二〇〇〇年までの期間における軽工業その他、国民消費物資を生産する工業部門用の機械の製作、貿易、公共給食、サービス分野の発展についての問題を検討した。

新婚家庭のための住宅事情を改善する目的で青年向け住宅団地建設に関する提案が検討、承認された。住宅と各種の文化施設、生活サービス施設を含むこれらの団地は青年が直接労働参加することによって建設される。青年住宅建設協同組合の組織に関する諸措置も予定され、政府は協同組合員に対し、銀行クレジットの返済と協同組合住宅建設用に無利子の貸付けを受けられる特典的条件を設ける予定である。

保健の向上をめざす最重要政策の一つとして政治局は、各級医療従事者に対する職務給への付加賃金の導入にかんする措置を承認した。付加賃金は外科医その他いくつかの科の専門医、手術や分娩、麻酔、蘇生、集中治療のセクションの中級・初級医療要員に支給される予定である。

M・S・ゴルバチョフ同志を団長とするソ連党・政府代表団とレ・ズアンを団長とするベトナム社会主義共和国党・政府代表団の会談の結果が審議・承認された。

ワルシャワで開催されたコメコン（経済相互援助会議）の第40回総会の結果を検討し、政治局はN・A・チーホノフを団長とするソ連代表団の活動を承認した。

政治局はまた共産党とソビエト国家の対外政策の遂行に関連する若干の他の問題を検討した。

（プラウダ紙7月6日号）

船員デー記念式典

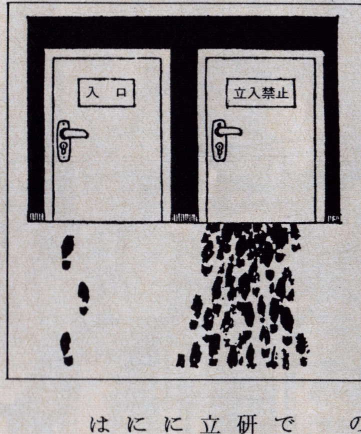
7月5日、モスクワで船員デーの記念式典が催された。

海運はソ連の輸送体系の中で重要な位置を占めている。輸出品の半分以上と輸入品の3/4は海上輸送されており、毎年数億tの貨物と一億三〇〇〇万人以上の乗客が河川交通によって運ばれている。

この分野では一層の集約化が進められており、船舶と関連工場との連係プレーが引き続き強められている。

式典ではT・グジェンコ海運相が演説した。

（トルード紙7月6日号）



（L・カプースタ作、イズベスチヤ紙7月8日号）

近くなったウラジオストク

5カ年計画を遂行する中でアエロフロートは多くの成果を上げているが、そのうちの一つにモスクワ＝ウラジオストク間の直通便の開設がある。この新しい空の便の開通によりモスクワ＝ウラジオストク間は3時間短縮され、沿海〔プリモーリエ〕地方の住民だけでなくソ連極東のすべての住民が数々の恩恵を享受できる。今後は、東の空の拠点ハバロフスクで便を乗り継ぐ必要がなくなる。直通便の開通により浮いた余力は追加の便を仕立てたり、乗客サービスを改善することに向けられる。

（トルード紙7月3日号）

人工水晶体による白内障治療

ソ連の女性眼科医エレオノラ・ワレンチノブナ・エゴロワは世界知的所有権機関（WIPO）の金メダルを受章した。これは毎年、その年の最も優れた発明に対して贈られる名誉あるメダルで、今回は人工水晶体による白内障の外科治療法が選ばれた。

長年、この治療法の開発に力を注いで来たエゴロワ博士は、6年前にこの研究で博士号をとり、以来治療法の確立につとめた。手術後90％以上が完全に視力を回復しているこの人工水晶体による治療は、ソ連内外に広く普及しはじめた。

（プラウダ紙7月5日号）

ピオネール・キャンプの夏

▶キャンプ評議会に選出された子供たちは、会議を開いてピオネール生活のあらゆる問題を討議する。きょうの議題は「ロシアの森」コンクールの開催。薬草採取や鳥の餌箱の設置などの行事が予定されている。



◀ユリア・セミョーノワ（写真中央）は「スタンココンストルクツィヤ」工場の技師。工場のコムソモール組織から夏のあいだピオネール指導員になってほしいといわれ、喜んで引き受けた。





科学の家には多くの工作サークルがあって、誰でも自分の気に入った作業ができる。



「スタンココンストルクツィヤ」工場の指物工V・ミロノフは木工サークルを指導している。



マクラメ編みに熱中する双子のオーリャ、ターニャ・ベリンワ姉妹。

ソ連には六万五〇〇〇のピオネール・キャンプがあって、夏の3カ月間に7歳から14歳までの子供二八〇〇万人余りが楽しい日々を送る。

モスクワ郊外ベレヤ川のとても景色のよい場所にある「ヤースナヤ・ゴルカ」キャンプも、そういうキャンプの一つ。ここで夏休みを過ごすのは、モスクワの「スタンココンストルクツィヤ」（工作機械構造）工場で働いている労働者、職員の子供たち二五〇人。工場は二〇〇万ルーブル（1ルーブルは約三〇〇円）余りをかけて、木造のまち（コッテージ、工作の家、おとぎ宮殿はみな、古いロシア建築の様式で建てられた）をつくった。1回26日間のキャンプ代として両親が払うのは10ルーブルだが、工場は子供一人当たり一五〇ルーブルの費用を負担している。キャンプ生活中子供たちは、工作や芸術のサークルに入ったり、スポーツに興ずる。



おとぎ宮殿内の美術スタジオ



▼新作の練習に励む舞踊アンサンブル「ゴロシンキ」のメンバー。指導しているのはモスクワ文化大学を卒業したビクトル・キセリョフ。

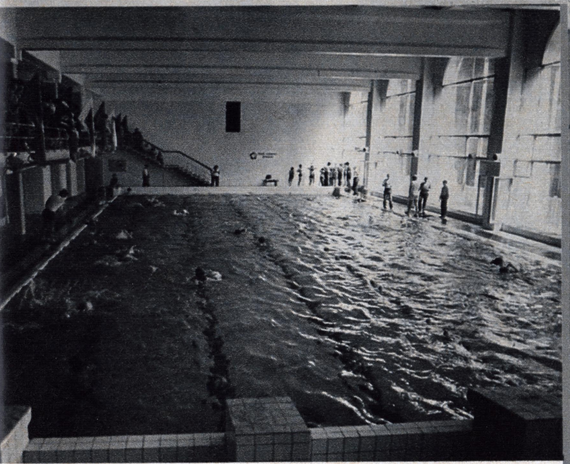




年少で、サッカーをするにはまだ早いとあって、指導員が楽しいボール遊戯を考え出した。

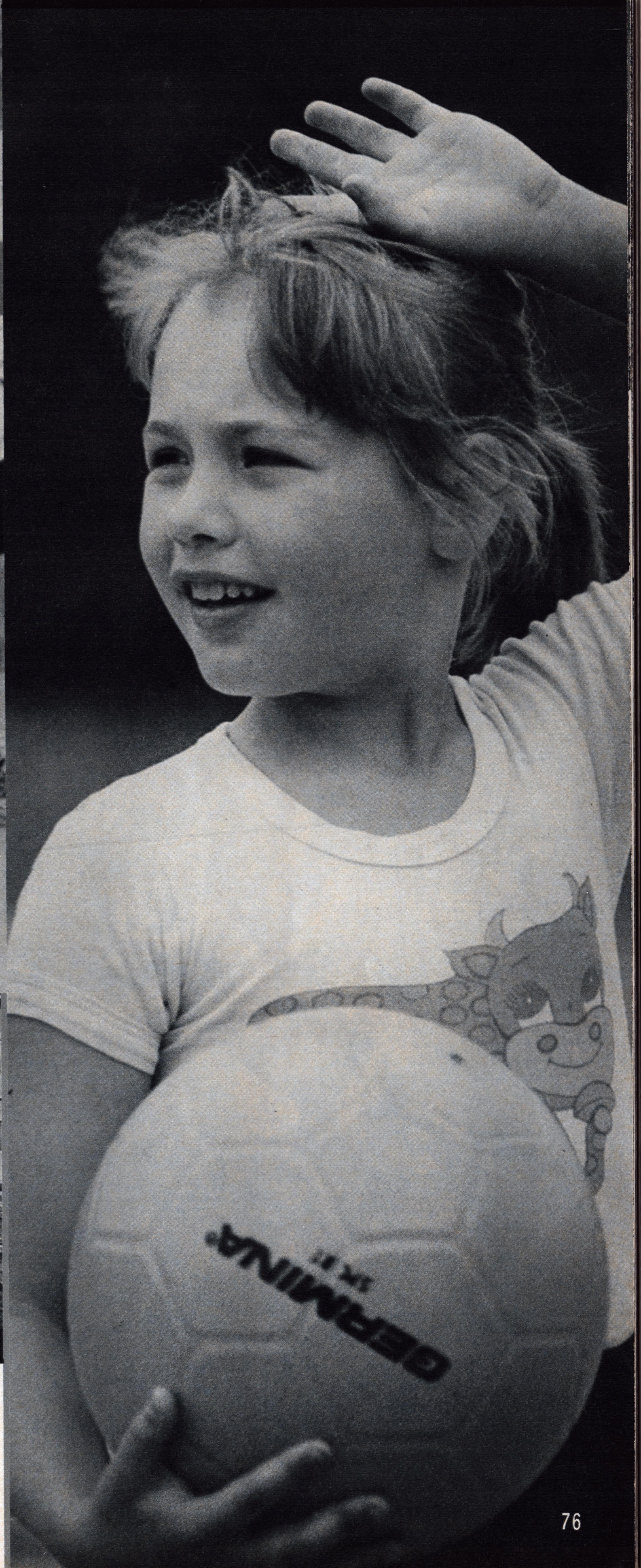
黒海まで行かなくても、結構水遊びが楽しめる。





雨の日も苦にならない。キャンプには屋内プールがあって水泳の講習や競技が行われる。

▶キャンプ内の花形バスケットボール選手オクサナ・スハレワちゃん。「背が高くなきゃバスケットはやれないなんて言ったのはだれ？」





おとぎ話宮殿の正面入り口

キャンプ・ファイアを囲んで

二つのロシア語コンクール



ロシア語弁論コンクール決勝大会の入賞者。左から星野浩美、高村聖木、帯谷知可、村田由美子、戸田繁、小原志浦の皆さん（写真提供＝朝日新聞）



全国ロシア語コンクールで1位になった磯　正彦さん（写真提供＝日ソ学院）

6月29日、東京・築地の朝日ホールで一九八五年度朝日スピーチコンテスト「第22回ロシア語弁論コンクール決勝大会」（主催＝朝日イブニングニュース社、朝日新聞社、後援＝在日ソ連大使館）が開かれ、東京外大、札幌大、東大、上智大、大阪外大、横浜市立大、早大、埼玉大、日ソ学院などから16名が出場。審査の結果、『ある夫婦像』の題でスピーチした日ソ学院3年の村田由美子さんが優勝した。2位以下の入賞者は次の通り（敬称略。）

2位・帯谷知可（東京外大）、3位・戸田　繁（東大）、4位・高村聖木（つくば万博コンパニオン）、5位・星野浩美（東京外大）、小原志浦（東大）。

特別賞・田川　実（東京外大）、加藤剛敏（早大）、佐藤泰代（札幌大）。

なお、1位、2位の入賞者はこの夏、1週間のソ連旅行に招待される。

§　§　§

7月7日、東京・世田谷区経堂の日ソ学院で第14回全国ロシア語コンクール（主催＝日ソ協会、日ソ学院、後援＝在日ソ連大使館、井上満・ちとせ記念会、ナウカ株式会社）が開催された。

今回は日ソ学院をはじめ、札幌大、創価大、横浜市立大、早大、東京外大、東大、大阪外大などから12名が出場。各出場者のスピーチと質疑応答について審査の結果、『私の夢』と題してスピーチを行った磯　正彦さん（28歳、会社員、日ソ学院日曜コース在学中）が1位になり、賞状と優勝杯を獲得した（副賞は14日間のソ連旅行）。2位は戸田　繁さん（東大）、3位は鈴木まりさん（東外大）。また、パク・チャン・スーさん（早大）、中嶋秀樹さん（札幌大）に特別賞が贈られた。

日本向けモスクワ放送を聴きましょう！

日本向けモスクワ放送の時間と周波数

時間	7.00—7.30		18.30—19.00		19.00—20.00		20.00—21.00		21.00—22.00		23.00—24.00	
	周波数（メガヘルツ）											
周波帯域（メーターバンド）	A	B	A	B	A	B	A	B	A	B	A	B
16			17.88	17.88	17.88	17.88	17.88	17.88				
19			15.24		15.24		15.24					
25	11.73	11.73							11.73	11.73	11.73	11.73
			11.91	11.91	11.91	11.91	11.91	11.91				
			12.03	12.03	12.03	12.03	12.03	12.03				
31				9.50		9.50		9.50				
	9.52											
			9.54	9.54	9.54	9.54	9.54	9.54				
									（21時30分から）			
	9.56	9.56							9.56	9.56	9.56	9.56
											9.79	
									9.86		9.86	
41										7.22		7.22
		7.24	7.24	7.24	7.24	7.24	7.24	7.24	7.24	7.24	7.24	7.24
												7.28
240	1.25	1.25	1.25	1.25	1.25	1.25	1.25	1.25	1.25	1.25	1.25	1.25
417	0.72	0.72	0.72	0.72	0.72	0.72	0.72	0.72	0.72	0.72	0.72	0.72
476			0.63	0.63			0.63	0.63	0.63	0.63	0.63	0.63

※ Aは1985年8月31日まで、Bは9月1日から

今日のソ連邦
一九八五年8月15日号

昭和五十四年六月二日第三種郵便物認可　発行人　加藤宣幸
編集・ソ連大使館広報部（郵便番号141・東京都品川区東五反田3－9－13・電話03・447・3536）

定価　一五〇円
（購読料は会費に含まれる）